

夏とラベンダー

草津出

初恋。誰だって経験したことくらいあるだろう。

それは甘酸っぱい恋の思い出だったり、あるいは苦い失恋の記憶だったり。人によって様々だ。

だけど、一つだけ言えることがあるとすれば、たいてい初恋の相手ってのはなかなか忘れられないってことで。俺の場合もまさにその通りだった。

その子に出会ったのは小二の夏。かなり暑い日だったのを覚えてる。

太陽に焼かれたアスファルトがめらめらと燃えて、目玉焼きだって焼けるんじゃないかというほどの凄まじい熱気を孕んでいた。そして、やかましいセミの鳴き声その熱気を何倍にも増幅させていた。そんな夏のこと。

その日なにを思ったのか、俺こと遠野少年は、せっせと物置から自転車を引き張り出していた。

せっかくの夏休みだからと、ある冒険を企てていたのだ。

自分の足だけでどこまで遠くに行けるのかという、今改めて考えると馬鹿馬鹿しい挑戦だった。今やバスとか電車を使えば、どこへ行くにもあつというまどというのに。

それで結局どこまで行けたのかというと、実はよく分からない。遠くまで行けたのかも知れないし、意外と近場だったのかも知れない。

ただ、最終的に終着点となったラベンダー畑は印象に深い。

そこには金のしずくを振りまいたみたいに光り輝く紫色のラベンダーが、絨毯のように一面に広がっていた。

今でも脳裏には鮮やかなラベンダーが咲き誇っている。それほどあの光景は当時の俺にとって衝撃を与えたのだ。

そして、そこで、遠野少年はとある少女と出会ったのだった。

「はあ……、はあ……」

太ももが痛い。久々に乗ったが、自転車がこんなにキツイなんて。

なにを思ったか、俺こと遠野青年は、今朝、物置からホコリの被った自転車を引っ張り出していた。バス通学に切り替えてからめっきり使わなくなったヤツだ。

そしてこれまたなにを思ったのか、現在そいつをえつちらおつちらと漕いでいる。

「ふう……あちい……」

汗が一筋流れ落ちる。先ほどまではシャツで拭いたりもしていたが、今ではもうすっかり億劫になって、流れるままに任せている。

セミの鳴き声が脳内でガンガン鳴り響いて、逃げ場を失った汗たちがさらに噴き出す。最低の悪循環だ。

こんな暑い日なら無理して外に出る必要はない、と普段の俺なら思っていたかも知れない。

しかし、今の俺には一つだけ目的があった。

「ちくしよう、やつと見つけたぞ……」

そう、俺はあの日のラベンダー畑に来ていた。

あの時の感動をもう一度だけ自分の胸に刻みつけたと思った。だからわざと夏休みの一番暑い日を選んで、あの夏を忠実に再現したのだ。

だけど当時の記憶にはとくに白い霧がかかっている、ラベンダー畑を探し当てるのに少し時間がかかってしまった。おかげで、汗でびしょりだ。

「よつこらせつと」

ラベンダー畑を見つけ出した満足感に満たされた俺は、自転車から降りて、その辺のあぜ道に腰を落着けた。

「ふう……。それにしても、近えなあ……」

目的としていたラベンダー畑は、意外にも近くにあった。

真つ直ぐ行けば、恐らく一時間ほどで到着するだろう。あの日は往復で半日はかかったというのに、まったく拍子抜けもいいところだった。

「ちっせえなあ、世界って」

自然とそんな台詞がこぼれ出た。

子供の頃はもつと世界が広がった気がする。それなのに、世界の一番端っこにあったはずのラベンダー畑はこんなにも近くに存在していて。少しばかり、期待外れだった。

こんなことなら、思い出の中に留めておけば良かったのだろうか……。
ラベンダー畑を見渡した。

いつの間にか、あの少女を探してしまっている。小さな体に不釣り合いな、大きな麦わら帽子をかぶっていたあの子。お日様の匂いのする黄色いワンピースを着ていたあの少女のことを。

いるわけないって頭では分かっているっていうのに。

「……あれ？ もしかして遠野くん？」

不意に呼びかけられて心臓がドキリと跳ねた。どうしてかは分からないが、イタズラしているのが見つかった子供のような心地がした。

そうしてしばらく石のように固まっていると、声の主が回り込んできた。

「あー、やっぱり遠野くんじゃん」

「……橘さん……？」

そこに現れたのは、クラスメートの橘さんだった。

「うん、久しぶりだね」

「ああ、ええと、久しぶり」

橘さんとは夏休みが始まってから会ってなかった。だからざっと十五日ぶりだろうか。こんなところで遭遇するとは思ってなかった。

「こんなところで会うなんて偶然だな」

俺は言った。

「この近くにお爺ちゃんのお家があるの」

橘さんが指さす。示された方向には、数百メートル先に一軒家がぼつりぼつりと見えた。あのどれかがそうなのだろうか。

俺のとなり腰かける。よく手入れしてあるのだろう、つやのある長い黒髪がふわりと風を孕んだ。

「遠野くんは？」

俺の顔を覗き込む。あまりに急だったものだから、俺はちよつとどぎまぎしてしまう。

「お、俺？」

尋ねられてから考える。

目的、か……。それならアレだ、たぶん思い出の場所巡りというのが一番しつくりくる。しかし、なんか正直に答えるのも恥ずかしいな。

「遠くからラベンダーが見えたから、立ち寄ってみただけだよ」

長考の末、俺はそう答えた。

「でも近くで見たら、そんな大したことなかった」

そしてどういう訳か、勝手にそんなことを口走っていた。暑さのせいで気が変になっってるんだろうか。

頬を伝って汗が流れた。橘さんが苦笑する。

「確かにね。富良野のラベンダー畑見たことあるけど、それと比べたらやっぱり見劣りするよ」

「そりや、富良野になんて敵うわけないじゃん」

「そうかも」

橘さんが笑う。彼女の笑顔はラベンダーの紫の中で、一際白く輝いて見えた。あまり気にしたことなかったけど、なんつーか、橘さんって結構かわいいんだな……。

……って、なに考えてんだ俺。

余計なことを考えたせいも、急に暑さが何倍にも増した気がして、汗が噴き出す。

「あちいなあ」

「暑いねえ」

「こんなことなら、やっぱ外に出なきゃよかったんだよなあ」

愚痴みたいなものがこぼれていた。

みい、みい、とセミの鳴き声が途切れなく続く。そのおかげで俺の声はかき消えてくれたかと思っただ、どうやら橘さんには聞こえてしまったみたいだった。

「どうして？」

疑問のこもった声で、橘さんが尋ねる。

「じゃあどうして今日、遠野くんは外に出たの？」

橘さんの瞳はあまりにも純粹で、ビー玉みたいに透き通っていた。

俺はなぜか、その瞳の奥があの夏に通じているように思えて。

思わずこんな言葉が口を衝いて出ていた。

「忘れ物を探しに」

「忘れ物？」

「そう」

口にしてみて、自分でもようやく気付く。

そうか、俺がこのラベンダー畑に足を運んだ理由はそういうことだったのかって。

「だけど見つきりそうもねえわ。だってさ、世界が狭過ぎるんだよ」

「狭過ぎる？」

ラベンダー畑に目を移す。陽の光を受けて仄かに揺らめくその風景は、幼かったあの頃の記憶と比べると、どうにも見劣りしていた。

「子供の頃ってさ、もっと世界が広がった気がするんだ」

咲き誇るラベンダーの花は、綺麗だけどこか物足りない。まるで、画家が晩年に描いた未完の作品のような寂しさが感じられた。

「子供の時はすごく感動したのに、大人になったら、ああこんなもんかって思うことあるじゃん？ 多分それってさ、大人になるにつれて、世界が縮まってるってことなんじゃねえかなってさ」

俺は世界の縮小によって、すっかりしぼんでしまったラベンダー畑を眺める。

やっぱり来るべきではなかったのかも知れない。こんな気分になるのなら、クローラーにあたって涼んでいたほうがよっぽどマシだったのかもと思う。

「私も、分かる気がするなあ」

黙って俺の話聞いていた橘さんが、不意に呟いた。

「このラベンダー畑、お気に入りの場所だったんだ。けど、富良野のラベンダー畑を見た途端に、この場所が色あせちゃって」

橘さんもラベンダーのほうを向いていた。暑さで参ってしまった俺と違い、橘さんの表情はどこか涼しげだった。

「なにも知らないままだったら、ずっとこの場所を好きでいられたのかなあ、なんて」

橘さんは、この場所を好きでいられなくなったことに、後悔を感じているのだろうか。

「なんで大人になるんだろうな」

「さあ、なんでだろうね」

俺の問いかけに、橘さんは冗談っぽく笑ってみせた。

多分、一生かかっても分からない気がする。

湿った風が頬を撫でつけた。微かな熱気を含むそれは、俺の記憶の奥底にじめじめと貼りついて離れなかった。

俺はケツについた土ボコリを払って、立ちあがる。

「さて、そろそろ帰るかな」

なんだかモヤモヤが消えない。しかし、少なくとも俺の探していたものは、ここにはないことが分かったのだ。もうこれ以上いても仕方がないだろう。

「そっか」

橘さんが少し名残惜しそうに言った。

突き刺すように注ぐ真夏の太陽は、けれども俺たちを避けるかのように影法師を作っていた。

「良かったらさ、またおいでよ」

「気が向いたらな」

「気が向いたら、か……」

橘さんがラベンダー畑を遠い目で見つめていた。

「あの男の子は気が向かなかったのかな」

「え……？」

ラベンダーが夏の風に揺られて小さく踊っていた。風に運ばれた紫色の甘い香りが、俺の鼻腔の奥をくすぐる。

「買ってもらったばかりの麦わら帽子と、お気に入りの黄色いワンピース。似合ってるって言ってくれたあの男の子は、今頃なにしてるのかな」

あまりの驚きに、俺は思わず橘さんを見た。

橘さんは微笑ましそうにラベンダー畑を眺めていた。それはまるで、幼かった俺たちの姿を、そこに見出しているようだった。

そうか君が……。

「——どうかした？」

「いや……なんでもないよ」

宇宙は日々拡大しているくせに、世界は縮小を続けている奇妙な世の中だけど。その時の俺は一瞬だけ、あの夏に戻れたような気がした。

神宮司さんは絵を描かない

草津出

僕にとって放課後という時間は、極めて平坦な時間だった。僕が放課後を使って過ごす時間はいつも同じ。友人と取り留めのない話をしながら美術室へと向かう。そしてイーゼルに立て掛けた画用紙にデッサンを描く。画用紙は前日と変わらず平坦で、こののっぺりとした白い板に命を吹き込むのは中々骨の折れる作業だった。時々側面から画用紙を覗き込むも、無機質なそれが非幾何学的な動きをすることは一度もなかった。画用紙がいつもと変わらない態度を決め込んだ時、僕はなぜ美術部なんかに入部してしまったのだろうと詰まらぬ考えを巡らせる。

それは本来考えるまでもなく僕が望んだからなのだが、このあまりにも個人主義的で平坦な活動は僕の肌にあまり合っていないように思えた。ではどんな部活が僕に合っているのかと考えると、真っ先に運動部が浮かんだ。例えばサッカー部だ。仲間と切磋琢磨しながら全国大会を目指す。実によいではないか。しかし僕にはその平坦なグラウンドを駆け回る体力などありもせず、そもそもチームメイトと良好な関係を築くだけのコミュニケーション能力も持ち合わせていなかった。では僕の取り柄とは何だろう。それは恐らく絵を描くことであつた。僕は昔から絵を描くことが好きで、上手いとお世辞を貰えるくらいには絵が上手かった。僕はその平坦な賞賛に鼻を高くして絵を書き続けた。だから僕が夢中になれることはたいして上手くもない絵を描くことだけなのだった。つまり何が言いたいのかというと僕には美術部が一番合っているということなのである。

僕はこの日、絵の題材を決めかねていた。といってもコンクールに出展しても賞なんて取れる実力のない僕にとっては正直どうでもいいことだ。下手くそというのはこういう面では気楽なものだった。その意味では逆に絵が上手い人間は不幸なのかもしれない。好きな絵を気楽に描くことができなのだから。なので僕は芸術家には一生かかっても得られぬであろう幸福を満喫することにした。さて、前回は何を描いたのだったろう。たしか猫耳メイドだった。では今回は何を描こう。猫耳メイドがいい。そんなわけで題材を猫耳メイドに決めた僕はモデルを探して辺りを見回した。すると斜め前に座っている前野さんが視界に入った。前野さんには以前もモデルをお願いしたことがあつた。また彼女に頼むのが丁度いいかもしれない。僕は丁度いい女の子が好きだった。もし合コンで同席するとした

ら賑やか過ぎる子ではなく、極端に大人しい子でもなく、こういう丁度いい女の子が丁度いいのだ。合コンなんて行ったことないが、きつとそうだ。その点前野さんは類稀ない丁度よさを備えていた。僕は前野さんにモデルをお願いすることにした。しかし声を掛けようとしたところで、あることを思い出す。それは前に前野さんを前に立たせて前野さんの絵を描いた時のことだ。完成した絵を前野さんに見せた時、彼女はそれを見て引いたのだった。だけども僕には彼女が嫌な顔をしたことが理解できなかった。ちよつとデフォルメして猫耳にスク水を着せた以外は、ありのままの前野さんを描いたのだというのに。どうやら彼女には僕の崇高な芸術を理解できないらしかった。そんな前野さんなんかは僕の崇高な芸術の一端を担わせていいのだろうか。いやぶつちやけいいのだが前野さんの方が嫌がるに違いない。というわけで前野さんをお願いするのは諦めることにした。しかし他にモデルを頼めそうな女子がいただろうか。後ろの方に座っている後藤さんは、根暗で後ろ向きだから僕の嫁のイメージに合わない。横の方に座っている横島さんは、邪だから何か見返りを要求されそうだ。どちらもモデルにするには難しかった。

そんなこんなでモデルの子をどうしようかと悩んでいる時だった。僕の瞳に一人の女の子が映り込んだ。それは美術室の窓側の一番後ろに座っている子だった。同じクラスの、名前はたしか神宮寺さん。彼女は美術室にいる部員全員の視線を避けるようにそこに佇んで、独りで本を読んでいた。絵を描こうという気配はまるでない。しかし周りの部員は誰一人として彼女のことを咎めようとはしていなかった。その時僕はふと思いついた。僕が美術部にまだ入りたてだった頃、絵を一切描こうとしないのに入部した子がいると、好奇の目に晒されている人物がいたことを。その当時の僕は特に興味を抱いていなかったが、しばらくすると噂が止んだので、その彼あるいは彼女は部活を辞めてしまったのかと思っていた。だけどもさかまだ在籍していたなんて。窓から降り注ぐ光を浴びながら誰にも邪魔されず本を読んでいる神宮寺さんの姿は、どこか様になっていた。その時僕の脳裏に稲妻が走った。神宮寺さんの姿は僕の絵のモデルにピッタリだったのだ。もつと具体的に言うとなら僕と僕のクーデレ猫耳メイドにピッタリだった。僕はいつの間

か神宮寺さん元へ歩いていった。神宮寺さんは僕を認めると、また直ぐに本へと視線を戻した。だけど僕はそれを気にせず、こう言った。

「僕の猫耳メイドになってくれ」

もとい、

「僕の絵のモデルになってくれ」

神宮寺さん眉ひとつ動かさず、本をめくる指だけを動かした。

「好きにしたら？」

そのツンとした言葉の端先に、僕は彼女をモデルにして描く可能性を確かに感じ取った。神宮寺さんの快い承諾を得た僕は、早速彼女の前にイーゼルを立てる。見える、見えるぞ作品の完成形が。間違いない、今回の作品が恐らく僕の最高傑作になる。そう直感的に感じ取った僕は直ぐさま筆を走らせた。これが僕と神宮寺さんによる創作活動の始まりだった。

絵を描きながらポテトチップスを食べることが愚の骨頂だということくらい僕だって知っている。油ぎった手で持っている鉛筆がギトギトになってしまいうのもそのせいでツルツル滑ってうまく鉛筆に力が伝わらないのも本当は簡単に予想できることだったはずだ。だがしかし考えてみてくれ。もしも自分の鞆の中にポテチの袋が入っていたら家に帰るまでこれを開けずにいられるだろうか。否、断じて否。ポテチの袋を見ると思わず開けてしまう行為。最早それはさが性なのだ。そう性、いや伝説だ。これこそがポテトチップスが駄菓子界の伝説として君臨している所以なのだ。誰一人としてこの衝動に抗うことはできない。そう誰一人として。

「神宮寺さんも食べる？」

「いい、本読んでるから」

神宮寺さんは一秒たりとも本から目を話すことなくそう答えた。ポテトチップスの誘惑に耐えるとは、彼女はかなりのツワモノのようだ。僕はポテチを食べながら人を裁く某新世界の神よろしく鉛筆を走らせた。

僕が神宮寺さんに絵のモデルをお願いして数日が経った。神宮寺さんとは、絵

が完成するまでモデルになつてもらおう約束をしていた。神宮寺さんは相変わらず美術室の隅で本を読んでいる。あれから毎日神宮寺さんのことを見ていたが放課後の彼女は本当に手を止めることなく本を読み続けていた。読んでいる本は毎回違っていた。小難しい小説を読んでいるかと思えば、訳の分からない哲学書や数学書を読んでいることもある。どっちにしろ碌すっぽ本を読まない僕にとってはその何がいいのかさっぱりだった。さっぱりといえば僕は割とさっぱりしたものが好きで、特に柑橘系に目がなかった。爽やかな香りとほのかな酸味が、僕の気分をさっぱりさせる。何か嫌なことがあった時にこれを食べさえすればすべてをさっぱりと割り切ることができるのである。しかし柑橘系の種類の多さには僕もほとほと困り果てていた。たまに自分が今食べている蜜柑が本当に蜜柑と呼んでいい代物なのか妙にさっぱりしない気分になることがあるのだ。そして僕はそんなさっぱりしない気分を蜜柑を食べてさっぱりするのであった。ちなみにポテチを買う時もコンソメ味の横に置いてあった新商品、レモンソルト味にひどく興味をそそられた。だが新商品というのは当たり外れが激しい。僕は商品棚の前でたつぷり一分間悩んだ挙句、無難にコンソメ味を選んだのである。けどもしかししたらレモンソルト味の方が美味しかったのかもしれないと考えるといま気分がさっぱりしない。僕はさっぱりしない気分を、さっぱりしないコンソメ味で補うのだった。

神宮寺さんは同じ体勢を維持したまま本を読み続けていた。絵のモデルになっているのだからそれはむしろいいことのはずなのだが僕はどうにも腑に落ちなかった。神宮寺さんは素っ気ない性格の人だった。僕が何か話しかけても素っ気ない返事ばかりでそれ以上会話が広がらない。その素っ気なさは醤油に溶かしたワサビのそれに似ていた。寿司を食べる時僕は専らサビりなのだが、時々敢えてサビ抜きを食べることがある。寿司そのものの柔らかい食感を楽しみたいからだ。つまり僕が言いたいのは神宮寺さんにもその物腰の柔らかさを持つて欲しいということなのである。まあ限りなく余計なお世話ではあるのだろうが。だけど普段の神宮寺さんは妙な近寄りたさを放っていた。それは常に殺気を放つ野良猫のようで、近づいた者を傷つけてしまう危うさを内包していた。今まで気に留めた

ことはなかったが、クラスでの神宮寺さんもどうやらグループから孤立しているようだった。昼休みも誰と話すこともなくぼつんと独り席に座っている。僕はそれがなんとなく気になった。たしかに昼休みにどう過ごそうがそれは個人の勝手だ。しかし僕にはただ黙々と本をめくり続ける神宮寺さんの姿がどうしても楽しくそうには見えなかった。本当は深く関わらないであげたほうが利口なのかもしれない。でも僕は一度知ってしまった人のことを黙ってスルーしてしまえるほど出来た人間ではなかった。そもそも彼女の素っ気ない後ろ姿は僕の思い描くクーデレ猫耳メイドのイメージにピッタリではあるのだが、彼女にはひとつだけ足りないものがあつた。それはデレである。いくら神宮寺さんが周りにクールに振舞っていても、それはクーデレとは言えない。クールな彼女の内面にあるデレを引き出さない限りは、僕の作品は永遠に完成することはないのであつた。

「神宮寺さん」

「なに？」

「本読むの、面白い？」

「絵を描くよりは」

神宮寺さんは僕を見ることなく言った。まるでその体勢を維持することに意地になつていようだった。だが僕にも意地はある。神宮寺さんから言葉を引き出すのは決して簡単ではなかったが、その維持された澄まし顔をなんとか弄つていじらしい表情を引き摺り出してみたかつた。

「絵を描くのが嫌いなのかい？」

「ええ」

神宮寺さんはさも興味がないかのように言った。でもそれはおかしな話だった。この学校には必ず部活に入らなければならないという七面倒な規則は存在しないからだ。絵が嫌いならば美術部なんかに入らなければいい。それなのに何故神宮寺さんは美術部の部員なのだろう。僕だって絵が嫌いなら美術部になんて入っていない。僕にとつて絵とは至高の美少女との邂逅だった。自分の手で最高の美少女を創り上げることが、僕の絵を描く一番の目的だ。ゆえに僕は美術部に入部してから美少女以外の絵は一度も描いたことがない。それは傍から見れば僕が

ふざけているように感じられるらしかつた。しかし僕はいたつて真面目なのだ。むしろ理想の異性を追い求めるこの行為こそ人間の純粹な心理なのではないのだろうか。だとしたら石膏像などという訳の分からないものをデッサンしている奴らのほうがよっぽど不純だった。

「あなたは絵が好きなの？」

「好きとか嫌いとかそんな次元じゃないよ。理想の嫁を生み出すことは僕の宿命なんだ。なのに前野さんたちはそれが分からないときてる」

「前野さん？」

神宮寺さんは僅かに首を傾げた。

「あそこにいるだろ？」

僕は前野さんを指で指した。

「ああ……」

神宮寺さんは前野さんのことが分かつたらしくまた直ぐに読書に戻つた。考えてみれば前野さんもひどい人だつた。僕の絵を見て引いたのはもちろんのこと、もつと現実を描いた方がいいなどと宣つたのだ。前野さんは何も分かつちやいない。僕の追い求めているのは究極の二次元嫁なのである。それは世の中に蔓延る三次元とは似て非なるものだつた。愛敬のある瞳はより大きく、女性らしい曲線はより丸く。二次元の女の子は三次元のそれよりも身体的な特徴を現実からかけ離れた表現で描かれる。つまり、二次元の本質とは非現実性なのだ。

「前野さんも、後藤さんも横島さんも何も分かつてないよ。僕はただ絵を描きたいんじゃない。自分だけの二次元嫁を描きたいんだ」

「一つだけいいかしら」

神宮寺さんが僕の言葉を遮つて、口を開いた。

「なんだい？」

「あの子の名前、前野じゃなくて吉野よ」

「……なんだつて？」

「ちなみに後藤と横島は、それぞれ加藤と青島だから」

「マジで？」

「マジで」

衝撃の事実だった。どうやら僕は今まで彼女たちを印象だけで勝手に呼んでいたらしい。全然気が付かなかった。いや気が付く余地がなかった。誰か指摘してくれてもよかったものを。考えてみると本人にもそう言ってしまったような気がする。今まで彼女たちが僕にやたら冷たいのは芸術性の違いのせいだと思っていたが、あながちそれだけでもないらしかった。

すると神宮寺さんは本を閉じおもむろに立ち上がった。

「今日はそろそろ帰ってもいいかしら」

窓の外にはすっかり茜が降りていた。

「ああ、付き合ってもらって悪かったね」

「別にいいわよ、どうせ本を読むのは同じだもの」

神宮寺さんは本を手早く鞆にしまうと、僕に背を向けた。

「じゃあね」

「僕も一つだけいいかな」

僕は神宮寺さんに問いかけた。立ち止まった背中を肯定と受け止めて続ける。

「君の名前は、神宮寺さんで合ってるよね？」

「……さあ、どうだったかしら」

神宮寺さんはそれだけを言うとうと美術室を出て行った。他の人も少しづつ帰途に着いているらしく美術室は僕と糞真面目に絵を描いている部員数名だけになっていた。気付かないうちにこんなに時間が経っていたなんて、僕も随分集中したものだ。今日ばかりは相対性理論を信じざるを得ない。ずっと同じ格好で絵を描いていて硬くなってしまった身体をほぐすために大きく伸びをした。神宮寺さんが帰ってしまった以上ここにもあまり仕方がない。他に用もないので僕も帰ることになった。道具を片して帰宅の準備をする。前野さん、いや吉野さんもそろそろ帰るつもりらしく、支度を始めていた。それにしてもまた名前を間違えて覚えてしまったていたなんて。僕は昔から、人の名前を覚えるのが苦手だった。頭が悪いか記憶力がなくてかそういうことは関係なく、人の名前だけ。これまでも名前を覚えるには随分苦労した。誰かが僕のことを病的だと言っていた。自分

でもそう思った。だけど成長していくにつれて、この記憶異常は段々となりを潜めていった。今はもう日常生活には支障がない程度には落ち着いているので、最近はこのことを殆ど忘れてしまっていた。だけどまだ完全には治ってなかったらしい。吉野さんには少し悪いことをしてしまったと思った。美術室を出る時に目が合ったので笑いかけてみた。だけど吉野さんは無愛想に顔を背けるだけだった。なんとなく気まづくなった僕は、そそくさとそこから立ち去った。これからどんな顔をして美術部に顔を出せばいいのだろう。そんなことを考えながらその日は過ぎていった。

だけど切り替えが早いのが僕の取り柄だ。朝起きると昨日のことなんて割とどうでもよくなっていた。それどころかむしろ気分がいい。早く放課後になって絵の続きを描きたいとさえ思った。テレビの星座占いは僕のさそり座が一位勝ち取っていた。ラッキーパーソンは寡黙な人とあった。それはきつと神宮寺さん指しているのだと僕は思った。そう思うとますます放課後の時間が待ち遠しくなった。普段は退屈な時間である授業も今日は苦ではなかった。それはまるで春の麗らかな陽射しの中で雲雀の鳴き声を聴いているかようだった。僕はそんな柔らかな微睡みの中で授業をやり過ごした。

放課後になると、僕は真つ先に神宮寺さんの席へと向かった。神宮寺さんの席は窓側の一番後ろ、奇しくも美術室でいつも彼女が陣取っている位置と同じだった。当然ながら神宮寺さんの席の周りには一人もいなかった。角の席というのは人気の高い席なので一見羨ましくもあるが、神宮寺さんにいたってはそれが悪循環を生んでいるようにも見えた。僕は窓の外を眺めている神宮寺さんに声を掛けた。

「神宮寺さん」

神宮寺さんは教室で声を掛けられたことが思いがけないことだったらしく、こちらに振り向いて目を丸くした。だけど声の主が僕と分かると少しほっとしたような表情を見せた。

「なにかしら」

「今日も美術室に行くよね？」

「ええ」

「一緒に行こうよ」

僕がそう言うと、神宮寺さんは渋い顔をした。

「悪いけど、先に図書室に寄ってから行くから」

さすが読書家の神宮寺さんらしい答えだった。僕なんて図書室には入学してから一度も入ったことがない。どうも苦手なのだ、図書室に漂うあの古びた本の匂いが。

「そっか。じゃあ早めに来てくれよ。神宮寺さんが来てくれないと僕は何もやることがないんだ」

「分かったわ」

神宮寺さんの返事を聞いた僕は、自分の鞆を引っ掴んで美術室に向かった。美術室に入るとすでに前野さんが来ていて絵を描く準備を始めていた。目が合ったので僕は彼女に向かってにっこりと笑った。前野さんは昨日と同じように顔を背けてしまったけれど、それはもしかしたらただの照れ隠しなのかもしれないと思えばあまり悪い気はしなかった。僕は神宮寺さんがいつもいる位置の横を陣取りイーゼルを立て掛けて彼女のことを待った。神宮寺さんがいない間は手持ち無沙汰なのでどうやって過ごそうかと思っていたが、そんな心配をする必要がなかったほど彼女は直ぐに美術室に姿を現した。

「随分と早いね」

「そうかしら。図書室なんて、そう何分もいるところじゃないと思うけど」

そんなものだろうか。数分間本に囲まれているだけで気持ち悪くなってしまう僕に本当のところは分からないけど、その答えは本好きにはあるまじきもののように思えた。神宮寺さんは澄ました顔でいつもの場所に椅子を置き、そこに座り本を読み始めた。僕は神宮寺さんの開いた本の表紙を見た。タイトルはマクロ経済学。今度は経済学か。よくそんな小難しいものを読む気になるものだ。僕なんかきつと数秒にらめっこしただけでリタイアだ。そのうち聖書を原書で読み出すのではないかと思うと少し気がじやなかつた。だけど人の趣味をとやかく言う権利なんて僕にはない。仕方ないので僕も自分の仕事に取りかかることにした。

神宮寺さんの身体の比率を測るために、胸のほうに鉛筆を握った腕を伸ばす。うーむ、C……いやDだろうか。普段は制服を着ているから分かりづらいが、どうやら神宮寺さんは着痩せする人らしかった。僕は描いている猫耳メイドの胸の部分をつくらと描き直した。神宮寺さんはいちいち僕を気に留めることもせず本のページをめくり続けている。それは昨日の彼女をそっくりそのまま切り取ったかようだった。だけどやはりその姿は楽しそうには見えない。今の神宮寺さんに何か当てはまる言葉があるのだとすれば、それは無心だった。ここ数日間僕は絵を描くために神宮寺さんを観察してきたが、その中で幾つか気付いたことがあった。

まず一つ目、神宮寺さんは読む本のジャンルを選んではないということ。彼女は読む本が日によって全く違うのだ。今までは純文学から始まり哲学書や数学書、かと思えば流行りの小説を読んでいることもあった。今日読んでいるのは経済学の本だが、今までこの分野の本を読んでいたことは一度だってなかった。そこまです興味があるとは思えない。神宮寺さんがそれを選ぶ基準が僕にはよく分からなかった。

次に二つ目、本のページをめくるスピードが常に一定であるということ。神宮寺さんは必ず一定の間隔で読んでいる本のページを次に進めていた。たとえそのページが挿絵や図式で埋め尽くされていて、文字数が極端に少なかったのだとしてもだ。紙をめくるその音はまるで、静かに時を刻むメトロノームのようだった。僕は絵を描いている間、ずっとその音色に耳を傾けていた。

そして三つ目、神宮寺さんの読んでいる本には必ず図書室のラベルが貼つてあるということ。僕は描いている絵の中の彼女が持つ本の背表紙に、ラベルを描き足した。

「神宮寺さん」

「なにかしら」

「いや、なんでもないよ」

彼女は本当に読むために本を読んでいるのだろうか。もしそこに何か別の理由があるのだとしたら、僕はそこまでして神宮寺さんが本を読もうとする理由を聞

いてみたかった。だけど聞くことはできなかった。神宮司さんがそんなことをしている裏には何か理由があるような気がしていたからだ。自分からその理由を話そうとしないということは多分、彼女は深く足を踏み入れられることを嫌っている。無理やり聞くなんて無粋なことはいしたくなかった。それに神宮司さんにそれを聞いて彼女が気分を害してしまえば、このモデルの話自体がおじやんになってしまう可能性もある。それだけは何としてでも避けたかった。今描いているこの絵を完成させなければ、僕は絶対後悔するからだ。これを逃せばきつともう満足できる絵を描くことはできないだろう。思えば前野さんをモデルに絵を描いた時でもそれ以外の時も、僕は自分の絵に一抹の物足りなさを感じていた。あの時はまだその正体が分からなかったが、今ならはつきりと言える。恐らくその物足りなさの正体は、モデルの女の子と二次元の女の子のイメージの不一致性にあった。前野さんが悪いわけではない。しかし前野さんという人物は僕の思い描く嫁の偶像から微妙にズレを生じさせていた。そのズレが僕を白い画用紙に向かわせた時、大きな誤差となって表れる。つまり前野さんのモデルでは僕の追求める理想の二次元嫁を完成させることは不可能だったのだ。その点、神宮司さんは僕の理想しているそれに限りなく近い佇まいをしている。それが神宮司さんにとって良いことなのか悪いことなのかは置いておくとして、とにかくあと一歩手を伸ばせば僕の満足のゆく美少女がそこにその形を帯びるのだ。だから何としてでもこのチャンス逃すことはできない。だがしかし、そこにはまだ一つ問題が存在していた。その問題を直視した時、僕はその筆を置かざるを得なかった。

「どうしたの？」

神宮司さんは突然手を止めた僕を訝しげに見た。でも僕はこれ以上絵の続きを描くわけにはいかなかった。

それはもはや言うまでもない。デレだった。僕が今回芸術へと昇華しようとしている題材はクーデレ猫耳メイド。だがこのままの神宮司さんを描き続けていても確実にデレは描き切れないうら。デレがなければただの不愛想なメイドになつてしまいかねない。それは実に由々しき事態だった。もちろん神宮司さんを無視して無理やりデレを絵の中にねじ込むこともできなくはない。でもそれをして

しまえば、きつと前野さんの時の二の舞になってしまいうら。僕の思い描く二次元と神宮司さんのイメージに齟齬が生まれてしまう。神宮司さんそのもののデレを引き出さなければ意味がないのだ。デレを何とか引き出さねば。でも引き出すにはどうしたらいいのらう。別に多くを望んでいるわけではない。ただ、本を読み続けているだけでない他の表情を引き出したいだけだ。このまま彼女の限りなく無表情な瞳を眺めているだけでは、これ以上想像の余地がないのだ。少なくとも、ここで一言二言の会話しかないまま絵を描き続けているようではギリ貧だった。

僕はおもむろに立ち上がった。

「今日はここまでで切り上げるよ」

「そう」

神宮司さんはそれだけを言うと、すぐにまた本の上に視線を戻した。

「神宮司さんは？」

「もう少しここで本を読んでいくから」

「分かった。じゃあまた明日」

僕は本を読み続ける神宮司さんを置いて美術室を後にした。絵の完成ははつきり言つてまだまだ先だ。だけど少しやるべきことが見えてきた。僕はまだ神宮司さんのことをほとんど知らない。クラスと部活動が一緒というだけでそれ以上の接点もない。だけど僕は芸術の飽くなき探求者だ。僕の芸術を完成させるにはこのままでは足りないのだ。神宮司さんは何が好きで何が嫌いなのか。どんなことで泣いてどんなことで笑うのか。僕の空想的実在性を体現させるには彼女のことをもっと知らなければならぬのだ。具体的にはまだ何をすればいいのか思いついたわけではない。だけど僕は今、自分の芸術が新たな局面に立たされているのをひしひしと感じ取っている。胸が高揚感に満たされていた。僕はこの熱が冷めつしまわないうちに早めに家に帰り、翌日の作戦を練つたのだつた。

ホームルームが終わつたのを確認した僕は、自分の机にべつたりと広がつた涎を袖で拭きつつ、昨日と同じように神宮司さんの席に向かった。神宮司さんは昨

日とは違って、僕の顔を見ても驚きはしなかった。ただ、またかという面倒くさそうな表情を顔に張り付けているだけだ。それでも僕はやはり昨日と同じように神宮司さんに声をかけた。

「今日是一緒に行こうよ、美術室まで」

「悪いけど、今日も先に図書室に寄ってから行くから」

神宮司さんはただ昨日のセリフを反芻するように言った。

「昨日も借りてたのに今日も借りるのかい？」

「ええ」

「読書熱心だね」

「ありがとう」

ちよつとだけウンザリした様子で答えた。それは昨日と全くと言っても差し支えないほど同じ受け答えだ。ただ、実は僕もこうなることは予想していた。だからこそからは、昨日までとは違う。

「なら、僕も一緒に図書室まで行ってもいいかな？」

神宮司さんにとってそれは、予想外の言葉であつたらしい。彼女は眉をわずかに釣り上げた。

「どうして？」

「神宮寺さんがどうやって本を選んでいいのか気になるからさ」

「……やっぱりこのまま帰る」

突然立ち上がり、教室を出ていこうとした。僕はそれに倣うように神宮寺さんの後を追う。

「だったら僕も帰るよ、神宮寺さんがいないと絵も進まないし」

なぜか神宮寺さんを、ここで逃してはいけない気がした。

「勝手にすればいいじゃない」

神宮寺さんからすれば、きつと僕は迷惑極まりない輩として映っていることだろう。だけど神宮寺さんには悪いけど、諦めてノコノコ引き返す訳にはいかなかった。これは僕の芸術を昇華させるための聖戦^{聖戦}なのだ。だってもし僕が怖気付いてしまったらこれから先の神宮寺さんはずっと、教室の片隅で無愛想に本を眺め

続けるだけになってしまはずだから。笑顔を見せることは一度もないはずだから。僕はその光景が現実のものになってしまふのがなんとなく嫌だった。

僕らはいつの間にか、閑静な住宅街を歩いていた。自分の家まで帰るためにはここを通り抜けるのが近道なのだが、並んでいる一軒家の豪勢さを見るかぎり、僕には不釣り合いな場所らしい。この場所を通る時はいつも、僕は息苦しさを感じていた。

「どこまで付いて来るの？」

神宮寺さんが苛立たしげに言い放った。

「帰り道が一緒だなんて奇遇だよ」

「ふざけないで」

僕の精一杯の言い訳はしかし、虚しくも神宮寺さんに一蹴される。

「一体何のつもり？」

「そんなに悪いことかな、一緒に帰るのって」

神宮寺さんは普段どんなことを思つて帰り道を歩いているのだろう。その日読んだ本の内容だろうか。それとも、別の何かだろうか。それかまた、さらに別の――。

「僕は神宮寺さんのことが知りたいんだ」

「なんでそんなに、私のことを構うの？」

正直に話したほうがいいと思つた。

「神宮寺さんのことが気になるから」

「――っ！」

僕がそれを言つた途端、神宮司さんは急に立ち止まった。顔が仄かに紅潮を始める。

「いきなり、何を」

「嘘じゃないよ」

僕の絵を完成させるためには、神宮司さんの外見だけをすくい取るだけじゃ駄目なのだ。そこには彼女の内面の描出が必要不可欠だった。そうすれば今まで描いてきたどの絵よりも良い作品ができるはずだ。だから僕は絵を完成させるため

に、神宮司さんのことをもつと知らなくてはならない。

ふと気が付くと目の前の道路は、二手に分かれていた。一方は僕の家へ続く道。もう一方はさらに高級な住宅街が続いていく道だ。

「神宮司さんはどっちの道？」

「……こっち」

神宮司さんは僕が帰るのは違うほうを指していた。

「そっか、じゃまた明日」

僕は神宮司さんに軽く手を振ってから、その場を後にした。

これが僕の考えた作戦、その名も『コツコツと好感度を上げましょう』だ。毎日放課後を共にすることで、神宮司さんへ精神的に接近を図るという寸法だ。どんなプロのボクサーだって、試合を決める前には何度もジャブをするだろう。それと同じだ。昨日メイなんとかとパなんとかの試合を見ていた時に思いついた。こうやって何回も一緒に帰ったりすれば、いつかは僕にも心を開くはず。まだ初日ではあるが、手応えがあった……と思いたい。もちろん鋭いストレートは決まらなかったが、続けていけば、きつと判定には持ち込める。

そんなわけで僕と神宮司さんの二人で一緒に帰るといふ日常は、次第に習慣化していった。美術部に顔を出した日も、活動を終えた後は一緒に帰るようにした。片付けをしている最中に帰ってしまおうとする神宮司さんを引き留めるのには、なかなか骨が折れたが。最初は面倒そうな表情を浮かべていた神宮司さんも、最近はもう諦めたらしくそんな素振りも見せなくなった。

「おい、ちよつといいか？」

そんなある日、僕は一人だけ美術部の顧問に呼び出された。

「あ、はい」

僕は本を読み続けている神宮司さんをそこに残して、促されるまま美術室を後にした。廊下に出ると、そこに立っていた顧問がやたらと渋い顔をしていた。先生は僕にいったい何の用があるのだろう。顧問といえど、ほとんど絵を描いて活動する部の性格上、部員が接する機会はありません。かくいう僕も、全然話したことがない。そういえば、この先生の名前ってなんだっけ。

「お前に頼みたいことがあるんだが」

「え、もしかして僕の絵が欲しいんですか？」

「そんな訳ないだろう」

ひどい言い草だ。生徒の芸術性を理解しないなんて、教師失格ではないだろうか。

「最近お前、神宮司と仲良いだろう」

「ええ？ そんなふうに見えちゃいますか？ そうか参ったなあ」

「私の、話を、聞け」

「はあ」

僕は先生の気迫に気圧され、言葉を濁した。それにしてもなんだこの顧問は。まともに話したことなかったが、なんだかいけ好かない先生だ。それになんだそのタコみたいな頭頂部は。蛸沢と命名しよう。

蛸沢は頭を真つ赤にして言った。

「神宮司にそれとなく言っただけなんだ」

「何をですか？」

「絵を描いてくれ、とだ」

「なんで」

わざわざ、僕に頼む必要があるのだろう。僕なんかの口から言わなくても、先生が直接言えはいいのに。

「私が言っても聞かんのだ、神宮司は」

でも絵を描くなんて、それこそ個人の自由のはずじゃ……。

「分かったな？」

蛸沢は僕に有無を言わせぬ態度でそう言った。

「はあ」

蛸沢からやつと解放された僕は、釈然としないまま描きかけの絵の前に戻る。椅子に座って一息ついたところで、どこからか自分への視線を感じた。顔を上げると、神宮司さんは本を閉じて僕を見ていた。

「どうしたの？」

「綿貫先生に、何か言われたんでしょう？」

綿貫？ ああ、蛸沢の本名か。

「忘れたよ」

僕はためらうことなくそう答えた。

「忘れた？」

「うん」

神宮司さんは呆気にとられたような顔をしていた。僕はその顔を眺めながら続けた。

「あんまり大した話じゃなかったからね」

「ふうん」

そう言うと神宮司さんはそっぽを向いた。だけど、その頬には微かに笑みが射したように見えた。今のが見間違いじゃなかったとしたら、僕は多分、神宮司さんの笑った顔を初めて見た。

「……もう今日は描くのやめた」

僕は鉛筆を放り投げた。

「え？」

神宮司さんが目を見開いてこっちを見たが気にしない。今日の神宮司さんの笑みを維持するならば、このままここに居るのは得策じゃないと思ったからだ。

「また一緒に帰ろうよ」

「あ、うん」

神宮司さんの返事を聞いた僕はすぐに鞆に荷物をまとめた。でも蛸沢に見つかったら少し厄介だ。

「行こう」

神宮司さんの手を引いて、急いで図書室を後にした。そして、そのままの勢いで学校の門を抜ける。

小走りで駆けているうちに、僕らはいつもの分岐路に辿り着いていた。僕と神宮司さんの、世界が分離していく道だ。

「ここまでくれば大丈夫だね」

「ちよつと、手」

神宮司さんに言われてみると、知らないうちに僕らは手を繋いでいた。僕はすぐに手を放す。

「ごめんごめん、嫌だった？」

「別に、そんなんじゃないけど」

神宮司さんはこっちを見ずに言った。

「そう？」

取り敢えず神宮司さんの機嫌を損ねないで済むならばよかった。

「神宮司さんはこっちだよ」

僕は自分の帰り道とは違う方向を指した。そこは僕の進むガタガタした道とは違って、綺麗に舗装されていた。そして、その先には大きな家が立ち並ぶ高級住宅街が続いていく。文字通り、神宮司さんは僕とは住む世界が違うのだ。

「今日はいきなり切り上げて悪かったね」

神宮司さんは何も答えなかった。ただ、僕の言葉に応えるように小さく頷いていた。

「じゃ、僕はこっちだから」

そう一言だけ言って、僕は歩き出した。

考えてみたら、今日もあまり絵が進まなかった。ここのとこ思うように捗っていない。こんな様子で本当に絵は完成するのだろうか？ だけど神宮司さんの本当の顔を引き出さない限りは、きっと本当に描きたかった絵は完成しない。そういう意味じゃ、今日という一日も絶対に無駄じゃなかったはずだ。

そうして帰途に就こうとした、その時だった。

「——奈緒」

突然、僕ら呼び止める声があった。だけど、それが向けられていたのは僕じゃない。僕は、神宮司さんのほうを見た。

神宮司さんは、声のした方をじっと見つめたまま立ち止まっていた。

僕は神宮司さんの視線の先を追った。その先には壮年の男性が立っていた。その目元が、どこか優しそうな雰囲気を感じている男性だ。

「……お父さん」

神宮司さんはそう呟いた。

「部活はもう終わったのかい？」

「うん……」

「今日は早いんだね」

「うん……」

お父さん、とそう呼ばれた男性の問いかけに、神宮司さんはただ淡々と答えていた。だけどその返事にはどこか覇気がない。

もしかして神宮司さんは家族と上手くいっていないのだろうか、と僕は思った。そして、僕は果たしてこの会話を聞いていいものなのだろうか、と。

「……」

「最近、絵は描けているかい？」

「……」

神宮司さんの顔が険しいものになったのが僕には分かった。

「ずっと気になっていたんだ。このところ話す機会がなかっただろう？ あま

り描いていないって聞いていたから」

「……」

「奈緒のことが心配なんだ。前みたいに、絵を描いてくれないから——」

その時、神宮司さんの中で、何かが崩壊した。

「——私は絵を描くための人形なんかじゃない」

神宮司さんは叫んでいた。心の奥底に溜まった澱を吐き出すように。

男性は面を食らったように口をつぐんでいた。僕も驚いて言葉を失う。一瞬、この空間だけが切り取られたかのように静止していた。

次第に、止まった空気に沈黙が流れ込み始めた。

「……っ！」

神宮司さんは張りつめた糸が切れたかのように、苦渋の顔で走り出した。それ

は神宮司さんの家のほうではなく、学校へ引き返す道のほうでもなく、もう一つの道のほうだった。僕と男性は、それをただ目で追うことしかできなかった。

彼は僕に向き直った。

「……嫌なところを、見せてしまったね」

「僕のほうこそすみません。こんなところに居合わせてしまったて」

「いや……」

と、そこで言葉を止める。顔を僕から背けて、神宮司さんが走り去った方向を眺める。

「こんなつもりじゃなかったんだがね……」

その表情はどこか後悔をしているように見えた。

「失礼だけど、君は奈緒とどんな関係なのかな？」

再び僕のほうを見て、尋ねた。

僕は神宮司さんにとってどんな存在なのだろうか？

「僕は神宮司さんの友達……」

少し言葉に詰まる。

「……になりたいと思ってます。できれば、その先にも」

僕の答えに男性は小さく吹き出した。

「なるほど、正直だね」

冗談めかして言う。だけどその目は淡い寂寥を映していた。

「僕はどうしても奈緒に画家になってほしい訳じゃないんだ。むしろ自分の道は自分で選んでほしいとさえ思ってる。それなのに、いつもこういうふうにする違いが起きてしまう」

彼は少し寂しそうに笑った。きっとそこには、僕が知り得ないたくさんの葛藤があるのだろう。

「奈緒の友達候補である君に、一つ頼みごとをしていいかな」

「なんですか」

「不躰かもしれないけど、奈緒が進みたい道を見つける手助けをしてほしいんだ」

その目は真剣だった。本気で神宮司さんのことを思っていることが、僕にも伝

わってくる。

僕は一度だけ彼に会釈をして、神宮司さんが走って行ったほうに向かった。

神宮司さんはこの先どんな道を選ぶのだろうか？ やっぱり絵を描く道を選ぶのか。それとも別の道を見つめるのか。それは僕には分からない。だけどたとえそのどちらを選んだとしても今の神宮司さんがいなくなることはないはずだ。だつて、その選択をするのは神宮司さん自身なのだから。

神宮司さんは近くの公園のベンチで独り座っていた。僕の気配に気づいて顔を上げる。僕は彼女のほうに近づいていった。そして口を開く。

「……僕は昔から人の名前を覚えるのが苦手で、自分から剽軽なキャラをするこつでそれを必死に隠してきたんだ。だけどずつと思つてた。本当にこれでいいのかつて」

どうして僕はこんな身の上話をしているのだろう。神宮司さんの同情を引きたいからだろうか。いや、違ふ。

僕もきつとけじめを付けなければならないのだ。

「神宮司さん」

言うことはもう決まつている。

「僕の猫耳メイドになつてくれ」

それは数年前の朝のこと。

僕は自宅で新聞のとある記事を見つけた。

それは、僕と変わらぬ歳の女の子が、美術展で金賞を獲得したことを伝えるものだつた。

にゃんたとネコスケの日常 草津出

眼中無人、傲岸不遜。世とゆうはまことに人間が幅を利かせているものではないです。彼らはよくヤレ地球のため、環境のためと嘔たつて居りますが、そのほんとおのころは、ただ自分のことがカワユイだけなのでございます。そのことばのなかに、本気で世を憂れう色は窺がえませぬ。人間とゆうものは、どれほど身勝手な生き物で在りましょうか。

人間は得てして、他の生物をみづからのしたに置きたがるもので在ります。彼らは古来から様々なものを飼慣らして居りました。牛豚鶏もろもろ、それらは健康で文化的な最低限度の生活を営むことも許されず、日々人間の酷使に耐抜いているのでございます。ああ哀われなり、家畜共！ 人間を呪わらずして何を呪わいましょうか。されども彼らが支配するのは家畜だけでは在りませぬ。彼らは往々にして愛玩目的で我々を手元に置く。彼らは、我らにペットとして一方的な愛を注ぐのにございます。かの有名なクレヲパトラも、その手で愛したものが居るとか居らぬとか。

ところは日本国の某所。ここにも人間に飼われているのが一人居りました。正確には一匹とゆつたほうが良いので在りましようが、ここでは敢えて一人とゆう表現に拘わらせていただく。それがしはとある家の、ふかふかしたカアペットの上でくるまって居りました。窓からさす柔かな光が、それがしをやすらかな眠むりに誘そつているものにございます。

それがしはネコとゆう生物でした。もちろんネコとゆう名称自体人間様が考たもので在りますから、それがしにとっては頗る不本意な呼称で在りましよう。しかしながらそれが、つまりこの人間が支配する世界に生きるということなのでございます。

うえの階からだどたと、何やらうるさく聞こえてくる。それはこの家の、一人むすめの佳代ちゃんのもので在りました。いまから学校とゆうのに向うところなのでございます。佳代ちゃんが学校にゆく朝は、いつもこのように騒がしいもので在ります。慌てるのが分かつておるのならもつと余裕をもつて身支度をすれば良きものを、一分一秒でも長く蒲団に包まってしまうのが彼女の常なのでございます。

それがしは耳をたたんで、ゆつくりと四肢を伸ばして居りました。佳代ちゃんのはいつものことなので、一切の動じることをやりませぬ。ただ何食わぬ顔でゴハンとミルクとが運ばれてくるのを待ち侘びているもので在ります。かつてはそれがしにも、佳代ちゃんのことを疎ましく思えることも在りました。しかし今のそれがしの耳には、却つてそれが心地良く聞こえる。これがおそらく、順応するということなのでございます。

しばらくすると、佳代ちゃんが階段を降りてきた。佳代ちゃんはそれがしの伸びているのを見つけると、近ずいてきて、額を撫でました。それがしは、佳代ちゃんにそれをやられるのが堪らなく好きなのでございました。人間のことは借り受くなら、それがしは佳代ちゃんと結婚しても良いとさえ思つて居る。さりながら、それがしは己の滑稽さを理解して居らぬのでございます。

「にやんたはいつもノンビリしていいなあ」と佳代ちゃんがゆつて居りました。『にやんた』とは、それがしに付けられた名であるようでございます。しかし人間に与えられた名など、ネコであるところのそれがしにはなんら意味を持ち合わせて居りませぬ。ですから、それがしは佳代ちゃんに撫でられるたびに、ニアニアとゆうだけなのでございました。

「佳代、朝ご飯はどうするの」と、お台所から母上の声。佳代ちゃんは「時間ないからいらぬ」とゆつて、それがしの頭をもうひと撫でました。「行つてきます、にやんた」それがしに告げると、佳代ちゃんは立ち上がつて玄関の扉を開けました。刹那吹き込む爽やかな風。それがしは目を細めながら、佳代ちゃんをしばらくに見送つたのでございます。

「ほらにやんた、ご飯よ」暫しの静寂ののち、母上の朝食をそれがしに運ぶすがたが在りました。ミルクが目の前に置かれ、次いでゴハンの盛られた皿が置かれます。それがしはそれを、ペロと舐めました。この生き辛いご時世で在りますから、本来は食べ物にありつけること自体が在り難いことなかもしれませぬ。されど、もつとこうきうな鮪の入ったゴハンを頂たいと思うのは、それがしの我が儘なので在りましようか。

ゴハンをきれいに平げたそれがしは、おもむろに立ち上がりました。ゴハンの

後は散歩にゆくとゆうのが、それがしの日課なのでございました。それがしの住む家には、ネコの入り口とゆうものが備わって居りました。それがしはその扉を押して、外に出たのでございます。

当たり前では在りますが、外の世界にはそれがしのほかに、ネコというものが居りました。されども、それがしはほかのネコとつるむのが好きで在りませんでした。そもそも、ネコとゆうのは人間ほど同種間のコミュニケーションに長けた生き物ではございません。ネコ同士とゆえども、言語を持って居らぬゆえ、お互いの理解も抄らぬ。特にこの一帯を縄張りにして居りますノラのぶちネコは、どうもそれがしのごいませぬ。特にこの一帯を縄張りにして居りますノラのぶちネコは、どうもそれがしのごいませぬ。ぶちネコがそれがしにちよつかいを出してきても構うことはございません。疲れますし、なにより腹が減る。

ですが、それがしにも例外というものが在りました。少し行つたところに在る寂びれた靴屋、そこで飼われているネコだけとは、どうしてか馬が合うのでございませぬ。それがしは靴屋の店内に上がり込み、暫くそのネコとじゃれあうのでございませぬ。

そうしているうちに、日はすっかり暮れてしまふ。それがしは靴屋のネコと遊ぶのをやめて立ち上がりませぬ。靴屋の気さくなおやじが「坊や、もう帰るのかい？」とゆう。それを背に、それがしは靴屋をあとにしました。

そろそろ家では母上がゴハンの支度を始めていることでしょうか、それがしにはまだ向うところが在りました。

そこは小さな公園でございました。何とも遊び心のない公園で、ブランコと砂場と、申し訳でないベンチが設置されているだけで在りました。これではきつと、小さな子供くらいしか寄り付くことはないでしょう。もつとも日が暮れてしまつて居る今は、その子供さえも居らず、がらんどうとして居りました。

それがしはその公園の、ひとつだけ在るベンチに登つて丸くなりました。それがしはここである人間を待つて居りました。その人間は靴屋のネコと同じくらい、それがしの良き遊び相手で在りました。ここで待つてさえすれば、決まつてこの場所この時間、例の人間が現れるのでございます。

それがしの、待ち草臥れてうとうとして居る時で在ります、人間はついにその姿を現しました。

「お、いたいた」それがしの姿を見付けると、人間は小走りでこちらに寄つてきました。それは十代半ばの男でございました。

「ネコスケ、元気にしてたか」そうゆつて、それがしの顎を撫でました。この男はそれがしのことを『ネコスケ』とゆつておりました。しかしそれがしにはそれをとやかくゆうつもりはございませぬ。それがしは己の名というものに、ほとんど頓着しておらぬのです。

男は学校の制服を着て居りました。そして、その制服は佳代ちゃんが学校へ着てゆくものと同じもので在りました。されどそれがしは、人間における制服の持つ意味を理解して居りませぬ。つまり、それがしはこの男が佳代ちゃんとおなじ学校に通つて居るのを知らぬということなのでございませぬ、知らぬが仏！ 聞かぬが花！

それがしは撫でている男の手を甘噛みしながら、例のものを要求しました。「分かつた分かつた、ちよつと待つてろ」男は苦笑しながら、もう片方の手に提げていたビニール袋を「そとやりませぬ」。

出てきたのは、ホカホカと湯気の立つ肉まんのでございました。白い湯気はどんな宵闇のなかに吸い込まれてゆきますが、それがしにはその行方など興味が在りませぬ。それがしは、肉まんのただ一点に注がれて居りました。

男は肉まんを割つて、片方をそれがしに差し出しました。それがしはすぐに齧り付く。それがしはこの肉まんとうゆのかかなり気に入つて居りました。肉まんに限らず人間の食すのは、ネコには少々塩辛いものなのでございませぬ、これが却つて癖になる味なので在りました。

肉まんに夢中になるそれがしを、男は黙つて撫でて居りました。

「なあ、ネコスケ」ふと、男が呟きました。しかしそれがしはそれに反応することとせず、肉まんを喰ひ続けます。でも、男は構わず言葉を紡ぎ続ける。「俺さ、好きな子がいるんだ」その声は肉まんの湯気と交じり合いながら、闇に溶けてゆきました。「だけど、どうしたらいいか分からないんだ」

「今のままじゃだめだってことは分かっている、だけど」この男は言葉の通じぬ相手に、何ゆえここまで語り掛けるのをございましょうか。あるいは意味のないことだとゆうことを、薄々を分かって居るのかもしれない。しかし、男の口からは言葉が止め処なく溢れてくる。

「ネコスケはいいよなあ、なんも悩みがなさそうで」

それがしは肉まんを食べ終わったので、男のほうに振り返りました。男は些か苦しそうな顔をしておりました。それがしはこの男のことが嫌いでは在りませんでしたので、そんな顔は見たく在りませんでした。ですから、それがしはニアと鳴きました。

それがしの鳴いたのを聞いた男は、小さく微笑みました。「ありがとな」それがしにはその言葉の意味が分かりませんが、男が元氣を取り戻したのを見て、なんとなく、良いことをしたと思いました。

それがしは男と別れて、帰途に就きました。それがし専用の入り口から中に入ると、佳代ちゃんが玄關に居り、ちようどいま帰ってきたところのようでございました。

「あ、にやんたも帰ってきたー！佳代ちゃんはそれがしを見付けると、近ずいて抱え上げました。まだ帰ってきたばかりだから在りましよう、佳代ちゃんの腕は、ひんやりと冷たくそれがしを包みました。しかしその冷たささえも、それがしにとつては心地良さへと変わるもので在ります。

佳代ちゃんはそのしがしを抱いたまま、二階の自分の部屋へと向いました。そしてそれがしに、学校での出来事を自慢げに話すのでございます。笑顔の佳代ちゃんを見ていると、それがしも嬉しくなってくる。ですが同時に、もやもやとしたものも残るので在ります。どうしてそれがしは、人間でなくてネコなのか。己の知らない佳代ちゃんがそこにいることが、それがしはほんのりと寂しいのでございます。

佳代ちゃんはサッカーのマネイジアというのをやっているようでございました。それがしにはサッカーとやらがどうゆうものなのか、とんと分からぬのでございますが、佳代ちゃんが嬉しそうに話すのを見てみると、何だかこちらも気分が良

い。

「それでね、祐介君がね」佳代ちゃんが、抱いているそれがしに向って語り掛きました。「シユートを決めてね、すぐカッコよかったんだ」祐介というのは、よく佳代ちゃんの話の中に出てくる人物なのでございました。ですがそれがしは、その祐介というのが気に入って居りませんでした。佳代ちゃんのお口ぶりから、祐介とやらのことを好きなのがブンブンによつてくる。ネコの嗅覺を、決して侮つてはならぬのでございます。

雄介とやらが佳代ちゃんの前に現れたら必ずや追っ払つてやろう。佳代ちゃんの腕に守られながら、そう思うそれがしなのでございます。

しかし目ざとい皆様は既に気づいて居られるやもしれませぬが、何を隠そう先ほどの肉まんの男こそが、その祐介なのでございます。ああ、世間とゆうものはかくも狭いものか！それがしは図らずや、敵に塩を送っていたのでございます。

それを知らぬそれがしは、何と心地良さそうにして居ることか。きつとことの実相を知らぬ方が、それがしは仕合せなので在りましよう。

佳代ちゃんの手のひらを感じて居るうちに、それがしはだんだんと眠くなってまいりました。

明日はどんな日になるのでしょうか。今日と同じ、愉快な一日が待っているのでしょうか。けれど明日がどんな一日になるうとも、きつと、いまと同じ毎日が続いてゆくはずで在ります。

そんな掛け替えのない日々を思いを馳せながら、それがしは、目蓋を下ろしたのでございます。

「――俺、明日告白するよ」

それがしを撫でていた祐介がいきなり、そう言い放ちました。額を撫でられていたそれがしは気持ちよくなって、ニアと言いました。

「ありがとな、ここまで決心がついたのはたぶん、ネコスケのおかげだ」別にそれがしには慰めたつもりも、励ましたつもりもございませぬ。しかしこうゆうふうにものを解釈しようとするのがおそらく、人間という生き物の身勝手さとゆうやつなので在りましよう。

雄介はそれがしの額をももう一度だけ撫でてから、立ち上がりました。それがしは、その背中に、ニアとだけ声を掛けました。

祐介のその背中は、きつと決意に満ちて居たのでございます。

未来がどうなるかはそれがしにも分かりませぬ。佳代ちゃんと祐介が手を繋ぎながら歩いて居るかも知れませぬし、佳代ちゃんが目を腫らしながら学校から帰ってくるかも知れませぬ。されどそれがしは、たとえどうなろうと同じ一日を過しゆく。

それが、それがしの日常なのでございます。

甘味、意識の底にて溶ける 八名井明

——今からそっちに行くから和菓子と酒準備しといてくれよ。日本酒な、日本酒。

突然の電話と、生存報告だった。幼い頃によく世話になっていた五歳年上の近所に住む人からのものだった。小学校、中学校を同じ学び舎で過ごし、自分が悩み事に直面したときにはすぐにその人を頼っていた。しかし、高校生に彼がなつてからというもの、疎遠にはならなかったのだがお互い忙しくなり、遊ぶことは次第に少なくなっていた。たまにすれ違ったりすると挨拶、そして近況報告。それから何事もなかったかのようにそれぞれのやることを目指して別れる。よくある近所付き合いだと思ふ。

秋原椎名。椎名さんはよくできる人だ。頭が良い。誰もが知っているような有名高校に進み、そのまま有名大学に進学した。次に面倒見がいい。ちゃらんぼらん人だと一部では言われていたが、やることはきちんとこなしていたし、仕事が残っていたれば即座に引き受けていた。ただ、その引き受け方がちゃらんぼらんに見えていただけなのだと思つている。そしてこれは長所として挙げていいものか悩んでしまうのだが、彼は姉好きだ。

そんな彼からの連絡は約三年ぶりであった。自分が成人して以来だった。記憶にある彼の性格から推測するに急用であると思つた。それが自分に重要であるかどうか、又は椎名さんにとつて重要であるか。どちらでも構わないから、急用である。今回もそうだろうと思つていた。

しかし椎名さんが我が家に来てきたのは電話から二時間後だった。赤く頬を染めて片手には缶ビールを持ち、足元はおぼつかず。酔っていることを隠そうともせず、到着したのが二時間後であることについて悪びれもしなかった。勿論、謝罪の言葉などひとかけらも存在しない。

「あーどうよ。なあなあ、どうよ」

「何がっすか椎名さん。今何時かわかっていますか」

「朝の三時」

「ですね。電話したのは何時でしたっけ」

「一時」

「言うことあるんじゃないんですか」

「ない。伝えることはあるからさっさと酒と和菓子もってこいよ」

やはり謝ろうとしない椎名さんは履物だけは綺麗に揃えて、家にあがる。着ていたスーツを脱いで投げ、けれど目的地は決まっているらしく自分の部屋に向かう。開けっ放しの扉を開めるついでに顔を出して空を見上げると、まだ黒い空だった。

彼の脱ぎ捨てたスーツを拾って一応は客人のものであるから丁寧に畳む。そして頼まれていた日本酒と和菓子を手に持ち部屋に入る。

椎名さんは持参した缶ビールを飲み終えていた。

解いたネクタイを指でいじりながら自室に常備してあるボトルガムを噛んでいるようだった。肘を置いているローテーブルに数個のガムが落ちていた。しかも面でくちやくちやくとわざとらしく音をたてていた。

「人の部屋でここまでくつろぐのは椎名さんの才能っすよ」

「おう。もつと褒めていいぞ。あと和菓子」

べつ、と置いてあるティッシュボックスから一枚を取り出し吐き出す様を見せられて不快に思わない人が居ないでも思っているのだろうか。悔しくなつて舌打ちをすると笑われた。る

「そんな怒るなよ」

「深夜に呼び出して、酒頼んで。人の店の商品タダ食いつてめちやめちやいい接待ですよ」

「そりゃあお前のところのお菓子が好きだつて姉貴が言つてたんだから当たり前だろ」

不意を突かれた。

僅かに手が震えている。急いで菓子と酒をローテーブルに置いた。

姉貴とは彼が愛してやまない姉の秋原滯名のことだ。

そして自分が最も懂れていた人物のことでもある。

秋原滯名さん——お姉さんにもよく世話になっていた。もしかしたら、椎名さん以上にお世話になっていたかもしれない。それもこれも自分が秋原の姉弟を何

処か特別視していたこともあるのだが。

かといって重要なエピソードなどがあつたのかと問われたのなら、無かつたと答えるだろう。ある意味不可侵の領域に彼女は立っていた。話すことは出来ても、きつと隣に並ぶだなんてことは考えていなかったのだ。その点、椎名さんはお姉さんよりも下に、自分に近い側に居る認識であつたのでまだ気軽に話すことも、関わることも出来たのだと思う。

まるで神様みたいじゃないか。

「有り難いですけど」

「おう。いろいろ頂きます」

神様の下なら、使徒かと思いがらういろいろを口に放り込む椎名さんを眺める。この部屋に椅子は無い。座布団代わりのクッションが三つあるだけだ。そのうちの三つ全てが椎名さんによって占領されているので、自分はそのまま腰を下ろすことになる。フローリングに直でないから、少しはましだと思ひこむようにした。ついでにホットカーペットもつけてしまおう。

彼がいろいろを食べている間に酒を注いでおく。辛口の日本酒らしい。適当に引つ張りだしたもので味がいいかはわからなかった。そもそも酒はあまり飲まないのだ。

「なんか材料変えたか」

「変えてませんよ。初代から同じです」

「初代ねえ……俺にとつちや初代もくそもないと思うけどなあ。死んだら終わる。終わって次の奴が新しいことをする」

「そういうことが許されない世界だつてあるから世代つてのがあるんです。じゃないと、続くものも続かないじゃないですか」

「俺はこのいろいろ、嫌いだね。不味くないけど」

「不味くないなら言わんでくださいよ。気になるんです」

「マジョリテイよりマイノリテイを気にする姿勢は好きだぞ」

文句を言いながらも、いろいろを完食すると次に彼は酒に手を伸ばした。缶ビールを潰して、お猪口を持つ。乾杯をすと思うたので自分もお猪口を持つ。

しかし彼は乾杯をしようとしなかった。お猪口を持った自分を睨む。

「しないんですか」

「出来るかよ」

「そんなに俺と乾杯するのが嫌ですか」

「違う。俺は今、とてつもなく暗い気分なんだよ」

椎名さんの言葉は嘘だと思つた。

普段より酔っている（と思つている。椎名さんと酒を飲むのは実はこれが初めてだった。けれど顔を真っ赤にしてこの家に来てきたのだから、相当酔っていると判断した）彼が饒舌に。饒舌に話している。それも普段の倍、話しているだろう。だから、これは嘘だと思つた。

そもそも自分には思いつかなかつた。椎名さんがやけ酒をするほどのことが、これっぽっちも浮かばなかつた。

何に酔いたいのだろう。

「どうしてですか」

「それ聞いちやう？ 悲しくなるぞ。絶対悲しくなる」

「俺も巻き込んで悲しくさせるんですか」

「そのために来たからなあ」

ならさつさと話して欲しかった。さつさと話して、さつさと帰って欲しい。

はあ、と椎名さんがため息をつく。お猪口に注がれている酒全部を飲み干した。豪快な一杯。ごきゆり、と音が聞こえた。

お猪口をこちらに向ける。注ぐ気にはなれなかつた。

彼の目が細くなつて、自分に刃が向けられる。

「俺たちが大好きな、姉貴。死んだよ」

そう言つて椎名さんはお猪口を乱暴にローテーブルに置いて、代わりに日本酒の瓶を持つ。

俺たち、と彼は言つた。

その中に自分も含まれているのは明白だった。悲しくなる、絶対悲しくなる、と彼が言つたのも正しかつた。

告げられた言葉を理解するのに時間がかかった。いつか人間が死ぬこともわかってはいたけれど、早すぎではないだろうか。彼女はまだ三十代にもなっていないはず。いやその前に。その前にいつ彼女は死んでしまったのだろうか。そうか死んでしまったから椎名さんは黒い服を着ていたのか。そうか。だから。

「おい」

ゴン、と瓶の底で小突かれた。小突かれたにしては低い音がして目を覚ます。徹底した現実逃避だった。

目の前に居る椎名さんはしょんぼりもせず、ただ自分を見つめていた。幾分明るい茶色の髪と黒い目を見ているとお姉さんのことを思い出す。

思い出して悲しくなる。

「本当に死んだんですか」

「死んだよ。もう燃えた。墓にも入った」

「もしかしてその日って昨日だったんじゃない」

「ああ。昨日だった。昨日燃えて、墓に入った。そして俺がやけ酒して報告しに来た」

「やけ酒する必要あったんですか」

「俺は姉貴が大好きなシスコン野郎だからこうでもしないと重すぎて口が開けないんだ」

しっかりとした口調で椎名さんは説明を続ける。

お姉さんが死亡するとすぐに葬式を行ったこと、お姉さんが眠っている場所、誰を呼んだか、どうして自分が葬式に呼ばれなかったのか。そして早いうちに自分のところの和菓子でも持つていって墓参りに行ってくれ、と彼は言った。

彼が説明をしている間とはかくそれを事実だと受け入れる作業に没頭していた。相槌を打つ。そして頭を空っぽにして言葉だけをインプットさせていく。そうすると自分の記憶の中にあるお姉さんが霞んでいく。彼女は、死んでしまう人間だったのだろうか。疑問が浮上する。けれど彼女は死んでしまった。

そのたびに痛感する。自分は、勝手に憧れていただけの人間であって彼女と深く関わっていないことを。

「葬式ならいくらでも俺のいとこがしてくれましたよ」

「宗派が同じだったら頼んでたかもな」

「けれど俺だって」

「嫌だよ。おんおん泣かれるような葬式なんて」

「椎名さんは泣かなかったんですか」

「昨日、灰になる前に死ぬほど泣いたからもういいんだ」

ガラスの向こうで眠るお姉さんにすがりつくようにしてそれを抱えるようにして泣きじやくる椎名さんが想像出来た。誰も居ない場所で姉貴、だなんて口しながら人が来る前に顔を洗って何事も無かったかのように振る舞っていたのだから。

——人は他人が泣いてるところを見るのが好きな生き物で、ずっと話のネタにするから極力泣きたくないんだよ。

椎名さんがそう言っていた。

「お姉さんは何か遺書とか残してたり」

「ない。全くない。あるとしたら姉貴の作品」

「お姉さんの作品」

お姉さんは美大に行っていた。絵を描くのが昔から上手かった。自分は彼女の絵を詳しくは知らなかったけれど、よく練習台にされていた。

椎名さんに誘われてお姉さんのクロッキーの練習台になっていたのだ。適当なポーズをして苦笑いをされていた。どんなに変なポーズをしても、変顔をしてもお姉さんは描いてくれていた。自分の描いた絵とは比べ物にならないほど上手くて、だのに彼女は描き終えて自分に見せるたびに「似てなくて、ごめんね」と言っていた。

そのクロッキーが描かれたものも、残っているのだろうか。

あれから椎名さんはひたすらお猪口に注ぎもせず日本酒を飲んでいる。やけ酒をしてきたはずなのにまだ飲むらしい。ここにやって来たときにもビールを飲んでいたので、かなりの量を飲んでいられるはずなのにまだ飲むようだった。この日本酒が飲み干されてしまったらまた別の酒を要求してくるのだろうか。それだけ

はやめていただきたい。

「その中に俺は居たんですかね」

「居ると思う。多分。端から端まで探したら一ページぐらいある、と思う」

「どれだけちっぽけな存在か思い知らされるってことですね」

「そうそう。姉貴はなんか、好きなものは描くけどそれがそのままじゃないって
いうか。俺を描くけど他人から見たら俺じゃないって言うか……」

「独特の世界観で描いてたんですか」

「ここ数年は頭著だった」

自分の形をしていない自分が描かれていると思うとぞつとした。不思議と興味
は沸いているのに行動には移せなかつた。見るのが半分怖い。

「椎名さん」

「おう」

「俺が描かれてる、お姉さんのスケッチブックとかクロッキー帳とか。俺にくれ
ませんか」

「……嫌だけど譲ってやるよ」

小さな声で彼は言った。

そして瓶を持ち、ぐび、と飲み干す。本当に飲み干した。この瓶の中身をほと
んど一人で飲み干された。自分は苦しくなつた。まだ、飲もうとするのか。

しかし想像とは異なり椎名さんはさらに顔を赤くして自分に話し始めた。

「あのなあ。俺だってなあ。姉貴のこと大好きだったよ。姉貴のことが好きで好
きでちゃんと姉貴のことを理解したかったよ。でも姉貴はほら……姉貴は……姉
貴は話すのが苦手だから……いや違う姉貴はちゃんと喋ってたんだけど俺のさ、
理解が追いつかないんだよ。ううん違うな。俺は理解してただけどこそこにはず
れがあつてだから、だから……」

頭がぼーっとしているのか椎名さんはひたすら語り始めた。支離滅裂なことを
挟みつつ、未練を語っている。

ここまで壊れている椎名さんを見るのは初めてだった。

「椎名さん落ち着いて話してください」

「お前にわかつてたまるかつてんだよ……うつ。悲しい。悲しすぎるんだよ。描
くもの描いて、ころつと何事も無かつたみたいに消えてつて。俺は悲しいよ。姉
貴の絵がもつと見たかつたよ。話したかつたよ。でも姉貴は、姉貴。悲しすぎる
だろ……なあ」

「そう思いますよ。俺だつてお姉さんともつと話したかつたし、お姉さんのおか
げでここまでやつて来れたようなもんなんで」

「おいちよつと待てよ。この店の運営に姉貴が関わつてたつてたのか。聞いてない
ぞ」

「進路に迷つてたときにお姉さんに助けてもらつたんです」

あのときのことは鮮明に覚えてる。

親と喧嘩をしていた。和菓子屋を継ぐのか継がないのかで口論になつて初めて
家を飛び出した。制服を着たままポケットにある小銭だけを頼りに、ひたすら町
を回つた。バスに乗つて、適当な場所に降りて手当たり次第に見つけた公園のプ
ランコでさんざん暴れた後にまたバスに乗つた。運良く小銭は千円近くあつたの
だつた。

けれど限度というものはある。金が底をついてしまうと、何処に行くのも徒歩
になる。家を出たのは朝早く、そして休日のことだつた。金が無くなつたのは夜
で、肌寒い秋の季節だつた。

ぶらつきながらどうやつて親に話そうかを考えていたときにお姉さんと出くわ
してしまつた。自分が家出をしていることを知つていて、もたもたしている自分
のことを把握すると喫茶店に連れていった。そこでご飯を奢つてもらつた。育ち
盛りには足りない量のハヤシライス。

彼女は持ち歩いてきたクロッキー帳に絵を描きながら、自分の相談に付き合つ
てくれた。彼女の大好きなココアの香りがしていた。名前も知らないアーティス
トの曲が流れていた。自分の口調は荒んでいた。

お姉さんは自分が話し終えると頷いて、笑つた。「あたし、裕太くんの作つた和
菓子、食べてみたいわ」と言つた。してやられた。

後日。自分の和菓子を彼女が美味しいだなんて言わなかつたら。

そこから感謝の一言を覚えてさえないければ。

良いことのようにだがあれは魔法の台詞だった。憧れている人からの、期待の台詞には勝てなかった。

「へえ」

話を聞いた椎名さんはテンションが下がっていた。

「どうして暗くなってるんですか」

「そりゃあ。そうだな。皮肉だからだな」

「何がです。俺、お姉さんに助けられたんですよ。下手したらこの店だって」

「その助けた人が皮肉なんだよ。昔の俺だな。上手いこと口車に乗せられた」

「お姉さんのことを悪く言う椎名さんは初めてです」

「ああ。だつてなあ。だつて」

言いにくそうに口をごもごも動かしてから、彼ははっきりと自分に言った。

彼の台詞がどんなものだったかは覚えていない。

けれどその先の話はあまり覚えていない。ショッキングな台詞だったのだ。考えもつかないことであつたから、信じたくなかつたのだ。思ったことと言えば、その日が定休日で安心したということ。一日だけは沈んだ気分でも問題がなかつたことだつたということだ。

椎名さんの行動は早くすぐに自分が描かれたクロッキー帳が手渡された。お姉さんが自分を支えてくれた頃のものだった。クロッキー帳の表紙に日付が記されていたのだ。

彼女のクロッキー帳に描かれていた自分は笑っていたし、それに菓子を作っていた。彼女はそれを望んでいたのだろうか？

椎名さんから告げられたあの事実が迷わせる。

「姉貴の死因は自殺だよ」

彼女は、ひどいひとだ。

もう、忘れることにしよう。

追贈

星井靄

ぼくは硝子壘に入ったサイダーを飲み干してしまうと、その中に手紙を一通容れた。景気良くげっぷをしてから玄関へ向かう。外は好い天気だ。クレヨンを片付けてそれから帽子を被っていくようにと咎める声がある。ぼくは上り框に腰掛けながら靴の紐を結び直していた。玄関の扉を開けるとガラガラと音がする。靴底が玄関のコンクリートと擦れ合う。青い硝子壘を陽射しが透り抜けると地面に青い光の水溜りが出来る。風にそよぐように光が揺れる。ぼくが玄関を閉めると再びガラガラと音が鳴った。

手紙の差出人はもちろんぼくだ。だけど署名はない。それに宛名も書いていない。相手は決まっているのだけど、だからこそ名前を書かないでいた。青い硝子の中の手紙はやはり青く、ぼくは少し歩調を早めた。十字路の中央に設えられたマンホールを踏みつける。パタンと乾いた音色。標識の無い路地。乾いたアスファルトが延びている、

細い路地に入るとぼくはほんのちよつと背伸びをした。塀の向こうには空地がある。ブロック塀には色々なポスターが貼られていた。不動産広告、戸建四千八百万円駐車場有土地付新築天体不動産、探偵募集、探偵事務所働きませんか？探偵育てます諸探偵専門学校、暇な男性募集、有閑婦人の相手をするだけで時給五千円、暇な女性急募、簡単なオペレーター業務で時給八千円、結婚相手を見つけませんか？ 伐山結婚相談所、犬のフン迷惑です、浮気調査、一回五千円、諸探偵事務所、プライバシー保護へ全力、混迷党溜田これ夫、路上喫煙は禁止です、罰金三千円、タバコ税で財政再建、雀産党、駐車場この先左、七月五日から、地域開発センター三階にて「江戸の滝野川展」大人五〇〇円、子供無料、立ち小便禁止、百万円で月世界一周等々。ぼくはこれらのポスターを纏めて夏休みの自由研究にしてみようと考えていた。

空地は雑草が生い茂っていた。オオバコ、ヒメジョオン、オヒシバ、メヒシバ、タケニグサ、ヒルガオ、それにネコジャラシなんかが生えていた。他にもたくさん生えているけど、ぼくが知っているのはそれくらいだった。一面が緑色で、空地の中程は竹藪になっていて奥の方は入り口からは覗けないようになっていた。ぼくはこの空地に入る時にいつも壊れた柵を開けて入っていた。正堂堂正面か

ら侵入していたのだ。空地はかなり広く、竹藪の向こうには廃屋が建っていた。だから本当は空地とはちよつと違うのかもしれない。たまに人が入るのを見かけるなんて話もあった。でもぼくを始めとして近所の子供達は勝手ままに忍び込んで遊び場に使っていた。

硝子壘で雑草を避けながら、ぼくは叢の真ん中辺まで進むと辺りを窺った。何処かから風鈴の音がする。風が草の葉を揺らしている。さざめく葉音。誰も居ないな。ぼくは悟ると、硝子壘を地べたに立てた。もう一度周囲を警戒する。誰も居ないな。ぼくは口に出してみる。

「どうかしたのかね」

老人の声。ぼくは驚いて腰を抜かした。うわあつ。ええつと、その。

「まさか、悪さしに来たんじゃないだろうねえ」

い、いえ、ぼくはその、ちよつと。ぼくはしどろもどろ。腰を抜かしたまま硝子壘に手を伸ばす。

「おや、空瓶」老人はぼくに近づこうと腰を屈めた。「ポイ捨てかな」

違うんです。これ、その、大事なもので。あつ、あのそう言えば、ネコジャラ

シつてほんとはエノコログサつて言つて、エノコロつて犬ころつてことだから、

ネコジャラシなのにほんとは犬だつて、あの、おかしいですよ。

「ははあ、物知りなんだね」老人は関心してみせた。

いえ、そんな。ぼくは硝子壘を抱いたままいかにも恐縮だと言わんばかりに身を縮こまらせた。

「それで、大事なら何でこんなところに置きに来たんだい」老人は怒った様子はなく、むしろ子供の行為に興味有りげに訊ねた。「隠しに来たのかね」

ぼくは適当に取り繕つてしまうことにした。この空地に手紙を容れた硝子壘を置いて友達と文通してるんです。紙のまま置いたら風で飛んじやうし、壘に容れたらちよつと雨が降つても濡れなくてすむし。それに、本で見たんです。手紙を硝子壘に容れて海に投げたの。それで、ちよつと面白いなつて。

「へえ」老人は柔和な表情を示した。「それは楽しそうだねえ」

老人はぼくを廃屋の縁側に案内した。廃屋とは言つても、まだそれほど朽ちて

はおらず、せいぜい窓硝子がところどころ破れたりしている程度だった。完全に硝子の抜け落ちた窓にはベニヤ板が打ち付けられていた。ぼくはこの廃屋に独りの時には絶対に近付かないようにしていた。日当たりが悪いせいで薄暗く、幽霊が出そうな雰囲気だった。

「おじさんも君くらい頃だったかなあ」老人の身体はとても能く縁側に馴染んでいた。「硝子瓶の中に船を造る、ポトルシップっていうのに凝っていてね。懐かしいねえ」

老人はにこやかに自らの頬を撫でていた。老人は老人らしく和服を纏っていた。縁側の木地と同じ様な色だ。老人はこの廃屋と調和しきっていた。ぼくは何となく、この主人はこのお爺さんではないかと惟つた。老人の窓もきつとひび割れている。そして、それを隠すために木板を釘付けにする。だが、縁側の硝子戸は開け放たれていて、風が吹き抜けていく。ちよつとだけ埃っぽい。でも埃っぽい風でなくては聞こえない音が雑草の海の上でぐるぐると円環を成す。そこに老人のすべてが立脚する。風が止んでしまえばもうそれっきりだ。ぼくは老人の半ば独り語りと化した息吹に耳を澄ましなが、近所の家から漂ってくるご飯の匂いに気を漫ろにしていた。ぼくの視線は首を振るネコジャラシに向かう。

老人がちょうど「舷灯を灯すのがこれまた難しくてね」と口にした時、雷鳴が轟いた。ぼくらは立ち上がって、空を見上げた。今までぼくらが背にしていた方に暗雲が垂れ込めていた。老人は懐から煙管を取り出すと「まずいな」と呟いた。その声は先程のものとは打って変わって真剣なものだった。

「済まないが私はもう出発しなくてはならないようだ」老人はいつの間にか帽子を被っていた。学生帽の様な白い帽子だった。「君もすぐ行かなくてはいけないよ」老人はそう言うと、空地から早足で立ち去っていった。稲光が幾度か瞬くと、直に雨が降りだした。ぼくは硝子瓶を空地に置くと駆け出した。まだ老人の啞えていた煙管の匂いが残っていた気がした。

アスファルトの上を水が流れてゆく。側溝はその処理能力の限界を早くも見せていた。ブロック塀に貼られたポスター群が濡れそぼつ。どこか淫靡な退廃の観を呈していた。文字がそれを視る人にこびるような淫猥さ。ぼくはそれらを横目

で眇めながら走った。それよりも早く雨が驟つていく。

十字路に差し掛かりつい癖でマンホールの蓋を踏みつける。滑って転びそうになるが、何とか体勢を整えながら駆ける。辺りから洗濯物をしまい損ねたことを嘆く声が聞こえた。路面を雨が打ち付ける音が激しさを増していく。滝の様な、昔の映画みたいな、ノイズの様な。ぼくは硝子瓶を廃屋の中に置いてくればよかったと、この時、思った。引き返そうか。ぼくはしばしの間、その場で足踏みをした。パチャパチャと水飛沫が舞う。

引き返すことにした。ぼくは息を切らしてまたあの空地へと急いだ。すこしだけ涙ぐんでいたがそれは雨の仕業かもしれない。瞬く間に暗くなった夏の午后を、日当たりの悪くなりつつある細い路地をぼくは駆け抜けていく。走りながら背を伸ばす。空地の雑草はみな静かに葉を伸ばしている。竹藪に降り注ぐ雨粒は崩れゆく新興住宅の様にけたたましい音を立てている。空地の真ん中に青い塚が置いている。蓋もきちんとされている。ぼくはそれを拾い上げ、中を透かし見た。大丈夫だ、たぶん。工業団地の如き騒音をがなり立てる藪の奥へとぼくは歩を進めた。歩哨に立った歩兵の様に慎重に、だがどこか好い加減に歩く。足許は泥濘んでいる。湿潤を大いに含んだ地面がベチャベチャ鳴る。害虫駆除の罌の様に足取りを重くさせる。ぼくは溜息を吐くと、しばらく間を置いてから竹藪を突っ切った。バサバサと、怪鳥の羽撃きを聞くことがあれば、きつとこのような音を立てるのだろうと思わせる激しい雨の礫が滴する。雨粒もぼくの足取り以上に大地への愛着を有っているのだ。沼の様な地面を進む。靴はとつとグチャグチャになっていた。まるで田圃に落ちこちた様な泥汚れ。

竹藪を通り過ぎると廃屋が見えた。縁側の硝子戸は閉まっていた。閉めた憶えはなかった。ぼくはおそるおそる硝子戸に手をかけ、中を覗いた。屋内は暗かった。時時明滅する雷光がそれを際立たせる。ぼくはブルつと身震いした。それは決して恐怖から来るものではなくて、小便を催したからだ。身体はすっかり冷えきっていた。ぼくは慎重に硝子戸を横に迂らせると足が濡れたまま廃屋へ上がった。ぼくは硝子瓶を廊下に置くと、後架を探した。それは直ぐに見つかった。縁側の廊下の突き当たりがそうだった。身を屈めながら扉を開けた。埃がひどかつ

た。水洗の洋式便所。汲取り式でなくて好かった。ぼくは水を流せるのか試そうと摘みを捻った。すると、ゴウゴウと音を立てて水が流れ始めた。もしかしたら本当は人が住んでいるのではないか。ぼくはいよいよ怖くなって、便器に腰を下ろした。どうしよう。思わず声が出た。足許を見る。濡れた足跡の脇に糸屑が落ちていた。小便が便器に当たる音。はあ。溜息。ぼくはまたもやどうしようとした。そのままゆっくりと眼を閉じた。しばらくここで休んでも可いだろうか。どうしよう。流れ出るものの量が少なくなる。雨は激しさを増していき、後架の小さな窓をしたたかに打つ。薄暗い室内に白い便器だけが明るい表情を曝け出している。ぼくはそこに腰を掛けていた。ぼくは顔を上げ、それから眼を開けた。

すると先程まで閉まっていたはずの扉が開いていた。それだけでなく、廊下の硝子戸まで戸袋に押しやられ、雨粒が好き勝手に板張りの廊下に侵入していたのだ。ぼくは自らを急かして便器から立ち上がると、まずズボンを使った。手でズボンを持ち上げながらもぼくはゆっくりと足を床に擦りつけながら歩き始める。廊下に置いていたはずの硝子瓶がなくなっていた。しかし、もはやそれどころではなかった。表にあの老人が別れた時の姿そのままに雨の中に立っている。気配を察したのか、ぼくを振り向く。

「やあ。遅かったね」老人は言った。「それじゃあ、ついておいで」

ぼくは戸惑って、硝子戸に手をかけたまま云うべき言葉を探していた。いま起きてくる出来事の輪郭を掴みあぐねっていたのだ。降りしきる雨にすべての物事が白んで見えている。

「ああ、そうだ」老人は腕を組んだまま立っている。「水を流してきてからにしよう」

ぼくははつとして後架へ引き返した。バタバタと廊下を踏んで歩き、発車の案内を告げた列車へ力任せに飛び込む時のように後架の扉をこじ開けその隙間へ身体を滑り込ませる。便器の貯水槽の脇へ手を伸ばし摘みを探し、見つけ出すと左右にそれぞれ二回も三回も揺らしたのだろうか。水の流れが淡黄色から透明な水の色へと遷っていくのを眺めていると、言葉を探してどぎまぎした今の感覚が何事も無かったかのように消失していく。一瞬だけ水が便器から完全に流れ去っ

てしまうと、すぐに新しい水が貯水槽から送られてくる。ぼくの頭のなかによく疑問が湧いてきた。貯水槽へ補充される水のがなり立てる音がゴロゴロと頭のなかへ聴覚を通じて転がり込んでくる。老人はいま何を言ったろうか。老人の口から流水音が飛び出してくる場面が思念となって揺らめいている。正しく再構成されるべきほんの束の間の記憶が早くも霧の中の幻想に阻まれていた。その時、扉を叩く音がした。

「もういいかね」老人の声だった。

ぼくは、まるでそういう玩具か何かであって最初からそう返事をするように決められていたかのように返事をした。頭のなかに渦となって流れていた考え事は瞬間に虚空の中に吸い込まれていった。扉を開け、老人を見る。まったく濡れていなかった。

「さあ」老人は扉を持ったまま案内するように手を広げている。「窓の外を見てごらん」

ぼくは老人の言葉を耳にするより早くに事態を察していた。扉の把手に手を伸ばした時に既に鼻が一つの経験を確認、同時にぼくの想い出や観念を喚び覚ますうとしていた。それはまず一匹のカニであり、泳ぐイルカやクジラであり、灼けるような白い砂浜であり、日傘を差す人の影であり、じりじりする肌感覚であり、砕け散る波濤であり、向こうを迂りゆく一艘の舟であり、防波堤の濡れたコンクリートの色であり、そこに付着するフナムシ、漂うビニール袋かクラゲか何か透明の物、眉間に力を込める感じ、水着の肌触り、足首を掴む冷たい海水、沖で感じる胸を抉るような孤独と恐怖、顔を覆うように過ぎる波、鼻を吐く潮水の刺激、そして何より一面の海、見渡すかぎりの青一色、あの偉かさへの絶望、畏怖、歓待、開放感なのであった。さつきまで硝子戸だったものは今は存在しておらず、ただ空間がそこにあるだけだった。ぼくは船の舳先近くの一室から顔を出していた。

「ようこそ」老人は微笑んでいる。「私のノイラート号へ」

老人はそれだけ言うところかへ行ってしまった。ぼくは老人の去るのも追わずに、ただ扉を掴んだまま立ち尽くしていた。しばらく波が切られていく音を聞いて

ていた。ザパンと船が揺れる。ぼくは足を室内へ置いたまま、上半身だけを扉の外へ出す格好で立っていた。両手で扉の把手と扉に掴まっている。しばらくそうしていたが、すぐに身体が疲れてきて、思い切つて外へ出てしまふか、或いは便器にもう一度腰を下ろし、終わりそうにない自問自答を続けるために雨音に耳を澄まし続けるか、いずれの行為を為すべきか決める時が来た。波の音と雨の音、潮の香りと黴の臭い、晴れ渡る青空と降り止まぬ雨空。ぼくは逡巡し、一旦扉を開けてみることにした。それでもう一度扉を開けてみて様子を窺おう。ぼくは思い切り扉を開めた。パタンと音を立てて扉の錠が噛み合う。ぼくはその時怖くなくて眼を閉じていた。

「さあ」老人の声が響いていた。「もうすぐだ」

ぼくは眼を開けるより前に陽射しと波の碎ける音、そして潮の香りを感知していた。いまぼくが立っているのは甲板の上だった。老人は目の前に立っている。望遠鏡を片手で眼にあてたままこちらを振り返る。和服に水兵帽という何とも違和感のある姿。ぼくはやはり言葉が見つからなかった。黙つたまま船の進路を見る。小島が見えた。老人もぼくの視線を追うようにその島の方を見ている。ぼくはその島に何があるのか見当も付かなければ、いま自分が立っている状況への遣る瀬の無い漠然とした虚しさや奇妙な感興への対処の仕方に困惑していた。船に乗つて離島を探検するという夢はもう何度描いたことか判らない。見知らぬ動物の鳴き声に怯えてみたり、奇怪な植物の姿形に恐れ慄いてみたり、夜の闇の暗さに馴染んだりするをもう幾度も描き直していた。ぼくはそうしたことを大抵睡眠への橋渡しに利用していた。布団の中で周囲の床を海水に見立てて筏の上で目を明かす探検家になったり、真つ暗な部屋を洞穴として丸めたタオルケットを相棒の犬か何かと思つて抱いたり、或いは、退屈な算数の時間、窓の外を眺めたまま教室を船室に置き換えてみたりしていた。だから夢なのかもしれない。そう考えた。だが叶えられた夢が有るとしたら、それは現実においてではないだろうか。ぼくは甲板に座り込んだ。その時、船の後ろの方で木が砕ける音がした。

「ああ」老人が慌てふためいて走つてゆく。「すぐに直さなくては」

船は三本柱の木造の帆船だった。浅く汚れている帆はまだやかに膨らんでおり、

帆柱のてっぺんでは角灯が揺れていた。老人の走つていった方を見ると、老人は船室の壁材を剥がしていた。バリバリと音を立てて船室に穴を空けていく。老人が木材を担いで船室の奥の方へ駆けていくのをぼくは追いかけることにした。ぼくが走り寄るのを、老人は僅かに横目で確認すると、諦めようと呟いた。老人は船室に空けた穴の近くに木板を投げ棄てた。水が入るうが倉庫に穴が開こうがノイラート号は依然としてノイラート号のままだ。老人はそう言うのと、船室の奥へ歩き出し、階段を降りていった。

「この船は」老人は言う。「航海のついでにちよつとした貿易をしている」

ぼくは老人の後に続いて幅の狭い階段を降りる。老人は独り語り続けている。下の倉庫には今回の貿易品を積んでいる。それは辞書や雑誌、それからサイダーの製造機だった。老人は海水が侵入し始めているのかどうかについては何も言わなかった。だが、それについては老人の沈黙が何よりも雄弁に語っていた。老人はその事実を示すための言葉を捨てないでいたのだ。老人はそれを沈黙によつて語り、保護し、私秘のうちに展開していた。老人はしきりにノイラート号はどんなに材質が変わろうとノイラート号であり続けると繰り返していた。かつてはこれ程大きくは無かったのだし、材料が泥だったり、紙だったり、或いは空虚であったことすらあったのだ。それらはかつてノイラート号だったし、今もそうなのだ。一つ階段を降り切るころには老人の言葉には沈黙が多くなっていた。二つ目の階段は階段室の中に設えてあった。室の扉を開けた時、すでに水の流れ込む音が聞こえてきた。老人はぼくを制止すると階段をゆっくり下り始めた。

「もう駄目だな」老人はぼくを見上げる。「直に沈んでしまふ」

ぼくは老人の言葉が水流の立てる音を消したのか或いはそれに掻き消されたのか判らなかつた。階段の下の方から海水がうねりを上げて飛び出してきた。飢えた獣の鳴らす喉の様な音を立ててとぐるを巻いている。木片やら何やら塵を巻き込んでいた。老人は一瞬しやがみ込み海水に手を差し出すと、すぐに立ち上がった。階段を飛び上がった。ぼくは老人の前を走っていた。何処に往くべきか判らなかつたが、階段室を飛び出し、元来た階段を駆け上がった。そして、甲板の上に出るまで走り続けた。しかし、甲板の上には出られなかつた。船室に穿たれた穴

に飛び込んだ途端、ぼくは身体感覚をひとつ瞬きする間だけ失った。そして、瞬きをし終える頃には元の感覚は復元されることなく、砂浜に座って沈みゆく夕日を眺めていたのだ。浜辺まで押し寄せてきては白い網目を織りなし、たちまち消えていく波の冷たさが心地好かった。泡の網が崩れてゆくとき、海水がその網の中で赤赤と燃えるような夕焼けの色光を反射しては砂の中に消えていった。ぼくはそれを眺めているうちにいつの間にか手に硝子壺を握っているのに気付いた。夕陽の色合いには余り馴染まない青い硝子壺。

「ヨコのカギ三四」

ぼくの足に何かが触れ、それを摘み上げるとそう書いてあった。続きはこうだ。

「筒井康隆の小説作品。ジブリによってアニメ化が企画された『旅の〇〇〇』。ぼくは辺りを見回すと、他にも幾つか同じようなもの、つまり紙切れに文字が書かれたものが波間に漂い、或いは汀で波に洗われているのを発見した。きつと雑誌か何かの切れ端だろう。何枚か拾い上げると或る程度重複しているものがあったりする。そして他に較べ大きな紙が見つかった。クロスワードの解答用紙だった。縦と横にそれぞれ六マスずつ、全部で三六個の空欄、とは言っても八つ程黒く塗りつぶされ塞がれていたから、そのうち記入欄は二八文字分だった。左上が一番、そして右に数字が増えていき、端まで来ると一段下がってまた左に戻って七から十二までが一列に並び、そうやって三六番まで一マスごとに番号付けが為されている。解答欄が塞がっているのは五、六、九、十二、二十、二五、二九、三三。ぼくは桃色とも緋色とも何とも微妙な色彩に遷りつつある空の下、浜辺を言葉の鍵を探して歩き回った。渚に漂う紙片を求めてうたかたの網を踏みつける。ピチャピチャと音が立つ。ザラザラと引き下がっていく波がより冽たく感じられる。砂粒を平らげる白い波。

ヨコのカギ一…フランスのカトリック司教。神学者。ルイ十四世の宮廷説教師として、専制政治と王権神授説を主張。

タテのカギ二…『おおきな木』で知られるアメリカの作家。〇〇〇・シルヴァスタイン。

タテのカギ四…ガブリエル・ガルシア・マルケスの短篇集。

ぼくはそれらの鍵が差し込まれるべき記憶を有っていないなかった。ただ波の音がぼくの足跡を追いかけ、ただちに消し去っていくのを眺めていた。言葉が出てこない。ぼくは硝子壺を指の爪先で弾いてみた。カランカランと心地の好い振動が鼓膜をつつく。

タテのカギ十五…春ごとに花のさかりはあり〇〇〇あい見む事はいのちなりけり」

ヨコのカギ十三…アルゼンチンの聖書と呼ばれる『マルティン・フイエロ』の著者「ホセ・〇〇〇〇〇〇」

タテのカギ十八…スペインの神学者。グロチウスに多大な影響を与えた。「形而上学討論集」

タテのカギ一…梨木香歩が師事したとされる児童文学者「ベティ・モーガン・〇〇〇〇」

夕陽は海に熱を奪われたように暗くなりつつあった。怪しげな海面の黝い光沢が気持ちを浮かせてしまうようだった。ぼくは海面に泛んでいた紙切れを掴みかかる為に浅瀬を走った。ザブザブと海を弱弱しく掻き分けていく。陸で溺れているような無様な藻掻き方だった。紙片だけが唯一手繰ることのできる糸であるかのようにだった。

ヨコのカギ十…フランスの映画監督。『夜と霧』、『ヒロシマ、モナムール』

ヨコのカギ二六…「ラテンアメリカの母」ガブリエラ・ミストラルの本名のミドルネーム。

ヨコのカギ七…イタロ・カルヴィーノ「ある詩人の冒険」で「赤茶けた海草」が絡まっていたもの。

ぼくは辺りを見回す。手にはまだ硝子壘を握っている。海の上に白いものが見えても、それは砕けた波から捨てられた色の塊にしか過ぎない。手を伸ばすとそれはもうとつくに消えている。代わりに海草を掴むことがある。その時、ぼくは海草のぬめりに植物の生命を感じ取る。ぼくは大きく息を吸い込むと海の中に潜る。ザバンと飛沫が上がる。グルグルいう泡の音、或いは海の呼吸の音だろうか。ぼくはぼくの身体から音を感じる。身体が浮き上っていく。ぼくは必死で眼を開けて蒙い海の中を覗き込む。こんな時、ぼくは自らの眼を頼りなく思う。これらの視覚像を想像と置き換えられるのであれば、どれだけ気軽だろう。

タテのカギ十一…ジョン・チーヴァー『泳ぐ人 The swimmer』の主人公。

ヨコのカギ二一…エウリピデスの悲劇。コルクスの王女を扱うもの。

タテのカギ二六…ジョン・ラスキン『〇〇と百合』

ぼくはこれらの紙片を全て集めてしまったらどうなるのだろう。ぼくは海から上がって、きつとその時にもこの硝子壘を握ったままで、それからぼくは夜の浜で何をしたら好いのだろうか。最後の一枚を手にして、それでクロスワードを解いたらどんな言葉がぼくを歓びの内に待ってくれているのだろう。ひよつとするとぼくがその言葉を迎えるのではないだろうか。きつとそうだろう。ぼくはその解答を手にしてどうしたらよいのだろうか。この壘に詰めて流してしまおうか。ぼくはそうするのもかもしれない。海に向かってその答えを示してみせるのだ。そうすれば、ぼくは帰ることが出来るのだ。そう、ぼくは帰らなくてはいけなかった。しかし、ぼくはどうやってここまで来て、こうして言葉探しなんてしているのだろう。ぼくは海に落とした指輪を探すように海底の砂を手で叩く。いったい何を探していたのだろう。

訂正…今月のクロスワード・パズルにおいて、答えとなる文字を示すために枠線を強調しておりませんでした。正しくは、十一、十六、二一、二六の四箇所となります。

すべての解答は出揃っていたのだ。ぼくは海底の海草に引っ掛かっていた一枚の紙を拾い上げると浜に向かって走りだした。空には月が出ている。今にも手が届きそうな程近く大きく見えた。黄金色の光が海に手を伸ばすように降りてきている。波間にそれは突き刺さる。白いうたかたの網目に突き刺さるのだ。きつと海面下から覗いたら魅力に満ちた風光だろう。けれどもぼくはよたよたと走った。渚まで上がってくると、壘に一枚の紙が貼り付いているのを見つけた。

ヨコのカギ三一…「〇〇」あなたはこれを読んでいる。

ぼくは紙に文字を書き付けた、きつかり四文字、そして、この紙をサイダーの空き壘に詰めたら、急いで家を出て、陽射しの強烈な中を走り抜け、あの十字路でマンホールを踏みつけ、余すところ無く貼られたポスターの群れの脇を通り過ぎ、例の空地へ忍び込み、顔馴染みの植物たちを掻き分けると、真ん中辺にその空き壘、宛名も差出人名もない空き壘、それもそのはずで、喧嘩した女の子に謝る為のちよつとした仕掛けのようなもので、ぼくのへそ曲がりをごまかす為の遊びでもあるのだから、署名など不要だったし、ただ一言が難しい関係を、絡まりあつた経緯や経歴を解くための鍵なのであり、その一言が沈黙以上でも雄弁以上でもあるのだと確信できる、そんなわけだから、この悪戯じみた謝罪会見を実践に移すためには何より青いサイダーの空き壘が必要だったのだが、どうしても硝子壘が見つからないとあつて、搜索を早急に打ち切り、ぼくは母親に訊いたのだが、サイダーなら人にあげちゃったなどと云うのだった。

ぼくは、どうしても青い空き壘を手に入れたくて、外を探してみることにした。いつもの十字路を静かに歩く。陽射しの剣が激しく攻め立ててくる。帽子を破りなさいという母親の声を無視して来たのが今になって後悔される。扉に貼られた数えきれない量の情報に腹が立つてくる。空地へ入る扉を押し開け、やや気の沈んだまま、そこへ忍び込む。もはやぼくには空地に生えた植物の名前などどうでもよく、全てが雑草の一言に頭のなかで取りまとめられている。雑草の中を進み、

中央付近に來ると、緑の波の中に青い光が漂っていた。ぼくはすぐに駆け寄った。三ツ矢サイダーの空き壺。紙が入っている。ぼくは急いで壺を持ち上げ、中に入っていた紙を木の棒を使って引っ掻き出した。青い硝子壺の中の手紙には「ごめんね」とただ一言だけが書き付けてあった。真っ赤なクレヨンで。それはぼくの言葉であって彼女の言葉でもあった。些し湿っていた。差出人の名前も宛名もない、青く透明な硝子壺からは淡くサイダーの香りがした。それはリンゴの匂いであって、そしてそれは初夏のまだすべてが緑い時分のことだった。

素描

—

都市

好きな天気というものがあるとすれば、迷わず霧雨だと答える。粒が細かければ細かいほど、いい。ついでに言えば、秋のものならばなお。

そういうわけだから、今の天気こそ、まさに最高の状態と言えた。

しつとりと湿った冷たい空気が肌と肺とをほんのわずか濡らして、晴れていればくつきりと見えたはずの景色がけぶっているのを眺め、雪解け水のせせらぎが囁くような雨の音を聴き、どこへ行くでもなく、ただただそこに佇んでいる。この交差点には人通りもなく、車も通らない。静謐な気配が満ちる。

通るものがないのならば、信号機というものも無用のだろう。それでも、いまは誰のためともなく、赤から青へ、青から赤へとめくるめくその輝きは、いっそ愚直なまでにひたむきで規則正しい。その頑なな輝きを霧はやさしく絡めとって、灰色の空気と混ぜあわせ、あたかも地上に星の瞬くかのごとく、色付けるのである。

そういう様子のことを、ぼくとしてはある種の官能のように思えてならない。もしかすると、人工的で、個体としての区別がくつきりとしたものどもを猥雑に、一個の環境として溶け合わせるような、そういう効果を期待して、ぼくはこの天気を好んでいるのかもしれない。もちろん、そんな理屈は後付けで、いろいろと講釈を垂れること自体、野暮の極みのような気もするけれど。

埼京線から小田急線へは新宿駅での乗り換えとなる。地下の八番線ホームへと降りると車輦が客を待ち侘びて口を開いていた。時刻は一時半頃だろうか。時計を確認する間もなく適当な乗車口へ滑り込む。人がいやに少ない。怪しんで車内を見回すと、ぼくと同じ頃に乗り込んだ若い男がしばらくまごついてから空席に腰を下ろすことなく隣の車輦への扉に手を掛けていた。ぼくはその男が避けた座席の方を見た。床が汚れている。吐瀉物が撒き散らされていたのだった。

車窓に陽光が差し始める頃には、車内には立ったままの人が幾らか居た。ぼくは発車前に慌てて移った車輦の座席に腰掛けて本を読んでいた。イタロ・カルヴィーノの『レ・コスミコミケ』だ。宇宙喜劇。あの車輦にはまだ吐瀉物が乗っているのだろうか。誰かがうっかりあの席に腰を下ろしてはいないか。そんなことを考えながら頁をめくる。Vhd Vhd 夫人が月に取り残されてしまった時、列車は何処を驟っていただろうか。たまに顔を上げると、いかにも閑かな街の風景が顔を覗かせるので、ぼくは心を弾ませた。滅多に気持ちの良い風など吹かない街から離れていつている。

ぼくも彼女同様、衛星へと引っ張られていたのだ。それは若かりし頃の Quid 老人の様に Vhd Vhd 夫人を追いかけたのこともかもしれない。或いは、衛星の方がぼくに向かって動き出したのかもしれない。いずれにしても、ぼくが向かっている生田駅は近付いていた。

ずっと下を向いて本を読んでいた所為か電車に酔ってしまった。窓の外では多摩川が燦めいている。川縁の釣人とバーベキューに勤しむ人人の対照と乱反射する光が眼に眩しかった。ぼくは本の頁を閉じて、胃の辺りの気持ち悪さに意識を集中させた。寝不足だろうか。実を云うと、昨日は眠れずにずっと起きていたのだった。眼も閉じてしまう。カプルの嬌声が車内に響いている。

街並みは惑星から離れると徐々に集合住宅より戸建住宅の棟数が割合を増していた。壁か巨大な墓石の様な高層建築はほとんど見当たらなくなり、たまに見つ

けた時にはその異様さがありありと感じられるのであった。そして色彩は灰色から緑色へと移っていく。それは都市の喧騒を、巨きな惑星のあの特異な空気を鎮めてくれているようだった。星雲らしき街の景色はやがてその密度を薄めていき、散り散りになった戸建住宅の群れへと遷移していく。同時代性の中に表された歴史性が今や一線の交通機関によって描き出されていた。流れゆく電気の双極性は乗客たちの両性を運んでいく。それらの二分された性質は惑星と衛星との間にあっても混ざり合ったままであって、しかしながら確かに分かれていた。

生田駅には二時頃に着いた。手に持っていた本を急いで鞆にしまう。改札は二階にあって、南北いずれかの階段を降りるとようやく駅の外に出られた。ぼくは南口を択んだ。外は川が流れていた。何という名前かは判らない。駅の南側には多くの緑が生い茂っていた。斜面に生えた種類の植物。丘の上には住宅地は見えず。ぼくは下流に向かって歩き出した。階段を下って左手の方向だ。直ぐにコンビニと橋が現れる。川沿いにそのまま歩けば明治大学や専修大学があり、右手の橋を渡ると団地に入っていく。コンビニの前に居た小学生の「抹茶を試したい」とか何とか云う会話が聞こえてくると、ぼくは微笑ましく懐った。橋の向こうを見遣ると、団地へと続く路は階段だった。しかし木陰が涼し気である。辺りには川と土の匂いが立ち籠めている。

橋の向こうに渡した視線をそのまま川の水面に落とす。ずいぶん汚い川だった。ドブ川だ。誰かが入浴剤でも落としたかのように不自然な色をして流れていた。乳白色掛かった青緑色。しかし、生活感を想わせ、ちよつとした愛らしさを感じさせる。

直ぐに眼を正面に向け、橋を渡った。階段は何段あるか数えるのも厭になるほどの段数で、汗が滲む。階段を昇りきってしばらくそぞろ歩く。そこら中に草木が繁茂し郊外の豊かさを湛えていた。しかし、一方で自動車の交通量が鬱陶しい。歩道が余り整っておらず、縮こまって側道を歩くことになる。小学校への通学路をダンブカーの出す生温い風を浴びながら通った子供の頃を想い出す。途中、子供に紐を結わえ付けて散歩している初老の男性に出会った。犬の散歩みただが、それは家族の紐帯を直接明示しているのだ。

団地の周辺では建売住宅の内覧会をやっていた。小奇麗な建物に不動産屋が入りしており、住宅の前で幾つもの幟が風にたなびいているのだった。綺麗な住宅の建ち並ぶ傍にはきちんとこみ集積場や駐車場が整備されている。生活を保証しようという地域の行き届いた管理の象徴だ。

街の中は風が吹き渡る。乗り物酔いもいつしか快癒し、気分好く散策を続けた。丘を登ったり降りたりし、交差点を幾つも往還していると公園の多さが目につく。どの公園も賑わっているというわけではなく、団地内にある団地専用の公園には人が居なかった。もともと本来の意味での公園には人が大勢居る。子供が遊び、それを親が見守っている。近くに野球場があるらしく歓声と叱咤の音が聞こえてくる。そんな光景を横目にぼくは丘を登っていた。一番高いところに来たら何があるのだろうか。もしかしたらVhdVhd夫人が居るかもしれない。しかし、丘の頂上付近には浄水場があるばかりだった。金網には幾つもの工事許可票が貼られている。そして騒音計が言い訳がましく設置されている。そのまま歩くと更に一段高くなった場所が視界に飛び込んできた。

ぼくは風前の灯火となった期待に胸が萎みつつあった。丘の上に更にもう一つ丘が飛び出している。そこが附近で最も高い場所であった。浄水場の脇を歩いて行くとそれまで僅かにだけ見えていた丘の全体が見えてきた。その頂には一軒家が二つ並んで建っていた。あそこならVhdVhd夫人がいてもおかしくなさそうな孤高さが感じられた。きつと夜になるとあそこから降りてくるのだ。その時、ちやうど白い軽自動車はその丘を駆け上がって行った。車が細く曲がりくねった路を昇るのを観ていると、ぼくはその丘を後にして帰ろうと念った。もうそれ以上、路を上がってはいこうとは考えなかった。

駅までの帰り路、それまでうつすらと感じていた植えられた木木の余所余所しさが強く看取された。道端に落ちているごみがその存在を強く主張し始め、おまけ程度に造られた畑地が顔を翳らせていた。吹く風は汗を乾かすことなく通り過ぎてゆく。それよりも素早く自動車が道路を這っていく、人を乗せて。横断歩道はもはや誰のために引かれたものではないのだと明らかに車が進みつけていく。団地の地階に貫かれた商店街はシャッターを下ろし、暗がりには空っぽの段

ボール箱が積まれている。その向こう側に見えるのはまた団地だ。風すらも通り抜けることのない商店の順列。店名すらも判然としないのだった。階段は昇りよりもどういわけか歩きづらく、いやでも足許を賸めさせる。ただのコンクリートの段差でしかなかった。丘に貼りつくようにして植わった緑色した植物群にはもはや生命力など感じられず、お飾りであることが分かった。それらの粉飾は都市生活者の、惑星に通う流動体の気休めだった。団地の建物がまるで障壁の様に思われた。そこに棲む人人の為のごみ捨て場の多さが不気味だった。駐車場に停められた車の数。路上駐車車の車内で何かしている運転手。車は窓も開けずに居た。駅に近づくと、生田駅を通過していく何本もの車輛の響きが聞こえる。その音はどこか人を焦らせ、忙しさを喚起する。薄汚れた川は生活排水で溢れ、もはや自然の水流などではないのであって、表情は病人のものだ。そしてその流れが大学の方へと伸びていく。その脇を人が歩いてくる。電車に運ばれてきた人達だ。手には電話を持ち、老いも若きも何かしらの通信を行っている。その流れに逆らってぼくは駅へと歩いた。

ぼくは駅の出入口まで来ると、何かを確かめるように北口へと向かった。踏切前には電車の通過待ちの車が列を成している。そして、北口の目抜き通りには激しい車の往来。不釣合いな横断歩道。その辺りに書店があったので、ぼくはちよつと覗いてみようという気になった。店内はそれ程広くなく、客もまばらである。棚を流し見る。岩波文庫は無かった。それどころか河出文庫も無かった。ちくま文庫は新書の奥に追いやられている。

ぼくは本屋を出て、まっすぐに駅へ引き返した。駅前には人待ち顔の人がちらほら。車輛が来るまでの数分間で、ぼくは何人の人に割り込まれただろうか。到着した電車に乗り込むと、なかなか扉が閉まらない。何度も軽快な警告音が鳴り、扉が開閉を繰り返す。乗降口の傍に立っていたぼくはまるで機械に咀嚼されているような気分だった。

窓の外を密集していく街の風景が流れる。電車は途中の駅で急行の列車と接続された。かなりの人がそちらへと乗り換えたが、ぼくは各駅停車の方にそのまま乗り続けた。人がごちゃごちゃと詰まった車輛が先に発車する。あの群衆は終点

でようやく吐き出されるのだろうか。ぼくは下を向いたまま、本を鞆から取り出すことなく、またしても酔っていたのだった。午に見た吐瀉物の映像が脳裡に泛ぶ。もう風が具合を良くしてくれることはないだろう。ぼくは眼を瞑り、腕を組んだまま終点を待っていた。時刻は四時を遥かに過ぎていた。もうすぐ都市に夜が訪れ、窓から漏れる灯が星の様に輝き出すのだろう。巨大な質量の生む重力がぼくを再び惹きつけている。アパートへ帰ればきつと食事の支度もせずに寝てしまおうだろう。ぼくはまどろみに堕ちつつある意識の中で考えの結び目を索っている。朧気ながら再編されていく出来事。街の風景は窓の外だ。

友人の誕生日プレゼントを買うために、この地に訪れた。

夜空がどこまでも見渡せて、空気が良い。

商店の立ち並ぶ大通りでは、大きささまざまな人々が忙しなく働いている。人が多くて活気付いているのもまた、好印象だった。

こういうふうには人の交流が多いところには、様々な品が集まってくるものだ。例えばそう、僕の友人が気に入ってくれそうなプレゼントも、きつと。

僕は友人に喜んでもらえるようにと、プレゼントを選びを張り切っていた。普段は面倒くさがっているように見えるかもしれないけど、こういう時にはちゃんと頑張るのだ。何しろ、僕は良い子なのだから。

だけどそんなことを考えている自分が、ちゃんちゃら可笑しかった。嘘っぱちだ。

空気が良いのも、活気が良いのも。もちろん僕が良い子ちゃんなのも、全部。君は嘘が上手いね、と誰かが言っていたのを思い出す、或いは、君は嘘が下手だね、とも。

ここは人でいっぱいだった。だけど、だからと言って必ずしもそれが活気の良さに結び付く訳ではない。行きかう人々の顔には、独特の倦怠感が張り付いていた。

目の前のそこは、得体の知れない時計、古着、それからどここの国ものかも判然としない料理でゴった返していた。料理屋からは有害そうな灰色の煙が漏れ出し、空を平気で汚していく。むせ返るような煙に肺を満たされて、どうにも気分が悪かった。

夜だというのに、どうしてこの人間はこんなにひっきりなしに行ったり来たりしているのだろう。分からない、分からない。ただひとつ僕に分かるのは、この人間は、ここにいてよくしてここにいてということだ。そしてそれはきつと、僕も含めてなのだろう。

常に人が交差していく様子は、まるでここだけが、まだ昼間であるみたいだった。

ここは昼夜が逆転している。

空を見上げた。

未だ眠るそぶりを見せないこの場所の光に霞むように、空はすっかり輝きを潜めてしまっていた。星ひとつだつて、ここからは見えやしない。

それはまるで、店の光で煌々と輝くこの場所が星空みたいで、あの夜空が、黒い地べたのようだった。

なるほど昼夜が逆転しているのと同時に、天地も逆転しているらしい。

僕は逆さになった空に目がくらんで、思わずその場に立ち止った。

一体僕は、何しにここに来たんだっけ。一瞬だけ、自分の目的を見失いそうになる。

そうだ誕生日のプレゼントを選びに来たんだ。

けどこの人ごみの中で目的なんてものは、すぐにどこかに流されていってしまう。僕は見失わないように、必死になってそれを握りしめた。

けど気付かないうちに、僕は裏路地に流されていた。ここはさっきまでの大通りと違い、人の流れがずいぶん緩和されている。だけど、それと同じくらい、ずいぶん暗い。

すぐ横でライターが売っていた。そういえばもうすぐ誕生日であるところの僕は、喫煙者で、最近ライターを失くしたと言っていたのを思い出す。

I M U C O のプリント式ガスライターを買った。僕は喫煙者じゃないので、煙草の良さなんて分からないし、ライターの良さなんてもっと分からない。だからライターなんてものに拘ろうとする、奴らの気がしれない。だけどこれで取り敢えず、少なくとも面倒くさい文句を言われることはないだろう。それだけだ。

やっとなの荷が下りた僕は、ほっと胸をなでおろした。プレゼントさえ買ってしまったらもうこれで、あとは僕らの自由なのだから。

僕は少し行つたところにある、居酒屋に足を踏み入れた。

店はぎゅうぎゅうに人を吸い込んでいて、けれどもそこにずっと佇んでいる。

沢山の人がそこで酒を呷っていて、僕は彼らが馬鹿だと思った。だけど、僕も今からそのなかに入っていくのであって、僕もまた馬鹿だった。

席に通された。椅子は堅い木で出来ていて、おしりが痛かった。

ハイボールと、少しのつまみを注文した。運ばれてきた液体は、炭酸水で割られて何だか締まりのない色をしていた。僕はそれを、ちびちびと飲み始める。

店の中は何だか煙たかった。つまみを調理するための炭火の匂いと、誰かの煙草を吹かすニコチンの臭いだが、絡み合って、何とも言えないにおいを生み出していた。

煙が店の中と、そしてまた僕の肺を満たす。

僕はその煙の行き先を眺めた。煙はくゆりくゆりと弧を描きながら、天井のほうへ上がっていく。そして行き着く先は天井に設置された大きな排気口だ。煙はまるで広げられた傘のように、排気口の一か所に吸い込まれていく。

この煙は排気口を伝って、一体どこへ行くのだろう。あの人の多くにぎやかな大通りの商店街かもしれない。はたまたあのしみつたれた裏路地かもしれない。けどそんなことはどうでもいい。重要なのは、煙にとつてその行先が、天国なのか、それとも地獄なのかということだ。

残ったハイボールを一気に飲み干すと、それきり僕はナイーブになって、すぐに店を出た。

店を出ると、外は人がずいぶんまばらになっていた。

僕は何だか、取り残されてしまったような気分がした。

僕は打ち捨てられたビール瓶のケースに腰掛け、星ひとつない空を見上げた。

真っ暗だった。

こんなどうしようもない夜にひとは、ハッピーバースデーを謳うのかもしれないと思った。

十字路の、その向こう。

左手にある鰻屋を見つめてみると、どうしてこんな立地になってしまふのさうの考えた。交通量の多い駅近くでありながらその駐車場に駐車されている車の数と言えば、片手で数えられる程度だった。時刻は十二時を過ぎており、飲食店の稼ぎ時なのだが繁盛しているには全く見えない。あくまでも人が出入りしているのを、なんとなく見つけていると、ああ入ったな、と、わかる程度。これで経営がうまくいっているのか不安に思う。

それもそのはずである。

今日は祭りだ。

下駄の音はコンクリートの地面に響かないが色とりどりの浴衣を着た女性が一本の道を書いている。白地に青、桃色と様々な色を差し込み、殺風景な歩道に色を添えていた。

神社へと続く一本道を多くの人々が進む。天候は曇りのち晴れ。とにかく曇りと晴れを繰り返す、なかなか厄介な天候だった。たまに空を見上げられるような日差しであれば、次にはそれを拒むような光を注ぐ。変わりやすい天候の空には、常に白い雲があった。

鰻屋を左手に歩道を進むとさらに十字路が出現する。日差しはどんどん強くなっていくので、多くの人は地下通路を進んでいた。鰻屋と異なり、それと同じ左にあるファミリーストランは賑わっているようだった。

日曜日だと言うのに溢れかえる人々。それは日曜日だからだろうか。もう少し先で祭りが開催されているというのにもつたないとも思えるが、彼等には彼等なりの過ごし方と言うものがあるので何も言えまい。アルバイトの学生らしき人物が、窓のこちら側をちらりと見た。羨ましそうにも見えるその視線が、仕事の辛さを語っているようにも見える。煌びやかな装飾もこの日ばかりは疲労の色に染まってしまふのさう。桃色が濁るように、外気にやられてこの看板もきつと

色褪せるに違いない。

浴衣を着ている人々を除けば、カジュアルな服装に身を包んだ人が多い。祭りであることを抜けばやはりただの祝日であることに間違いなかったのだ。気温が上昇していることと、熱中症を気に掛ける時期になったためか人々は半袖であったり、もうノースリーブを着用していたりと、薄着である割合が高かった。女性は日傘やアームカバーをし、日焼けを回避しようと必死である。

ある女子は地下通路への入り口横に寄りかかり、バッグを漁る。そこから取り出したのは白い容器に入れられているドラッグストアで、この時期人気を誇る日焼け止めだった。三十分ごとに塗り重ねることを勧めているのをしっかりと守っているのさう。真面目な性格であると思われるその女子は、日焼け止めを振ってからたつぷりとそれを自分の肌塗りに塗った。肌に馴染ませてから満足そうに微笑み、地下通路へと入っていく。地下通路で日焼け止めを塗ってはいけなかったのさうか。

車の量が増えていく。何処へ向かっているのかもわからぬ車たちは、信号に従い進む。渋滞は起こしてはいないが、祭りの影響でどうやら普段使える道路が封鎖されているために、少々の不便は発生しているようだった。見慣れない警官が、的確な指示を出している。

茶髪を一つにまとめ上げ、紫陽花の絵柄の浴衣を着ている女性に続き地下通路に入る。

すると、どうだろう。暑さなどそこにはなかった。ひんやりとした空気は冷やされたものではなく、温められなかった温度であった。肌を包むその冷気に肩を震わせる人も居る。明かりはあるが、短くそこまで深くない地下通路なので、外から差し込む光によってはつきりと通路内は明るく、そして明瞭となっていた。外の色彩を白やベージュと表現するならば地下通路そのものは焦げ茶色であった。理由は中の様子が見えても、結局は暗がりでありはつきりとした色がわかりづらからだ。一応、電灯は設置されているが外の光の方が明るいのであまり役目を果たしていない。

中に居る人物で目についたのは、床に尻をつき蹲っている男性だった。ホーム

レスのようには見えなかった。服装がそこまで汚れていなかったこと、脇にあるビール缶がおそらく酔ってここまで自力で歩いてきたのであろうことを示していたからだ。現在の時刻を確認する。十二時半。ということは、朝から呑んでいたのだろうか。変な理由をこじつければ、今日はお祭りなのである。朝からはめを少し外しても、同じようなことを考えている仲間——同じ酒呑みや友人、親族が助けてくれると思っていたのだろうか。それとも、そこからひっそりと抜け出して、こうやって地下通路で一人呑んでいたのだろうか。男性は眠っているようだったので、近づくことは出来ても話しかけることは出来なかった。それをする勇気が無かった。

男性を背にして地下通路を出る。やはり外は暑い。

祭りとなれば、勿論露店が並んでいるものだ。今日の祭りには、神社の境内には所狭しと露店があるし、加えてその神社の境内を出た——神社の裏口周辺以外の入り口や出口にも露店は出ている。そしておそらく、この神社へ向かうための大通りであるだろう約一キロメートルの道にも、露店が並んでいる。たこ焼きやお好み焼き、フランクフルトにじゃがバターと露店の顔とも呼べる飲食を売るものもあれば、最近では収入が悪いのか金魚すくいではなく玩具の魚を使用した魚すくいなんてものもある。

それに便乗してなのか、とある電気店がヨーヨーすくいとかき氷を催していた。制服を着ている女性は、ぎこちなく歩いている人々に声を掛けているがまだ祭りが遠いからなのか、目もくれない。はたまた、祭りの方でヨーヨーすくいをして、かき氷を食べようと考えているのかもしれない。しかし、人々は浴衣を着てもないし、ただ単に歩いているように見えなくもなかった。女性のため息をつく。

日差しが弱くなる。

雲が出てきたのだ。日傘はまだ閉じられない。

だが雲行きは怪しくなるばかりだった。電気店を右手にして進み、歩道橋を渡る。歩道橋を渡っている間に、空はみるみるうちに黒くなっていったのだ。灰色がかった雲が空を埋め尽くしていく。雨が降る雰囲気はしないが、不安にさせるには十分なほど暗い雲は、祭りにどのような影響を齎すのだろうか。

揺れる歩道橋は古く、手入れがされているのか不安を覚えた。車道を見下ろすことは自殺を望んでいるようであまりしたくはなかったが、好奇心が勝り覗いてみると、やはりと言うべきなのか車の量は少なかった。この歩道橋を超えて、橋を渡れば世界はほぼ一遍する。主に人々の服装が、開催を告げることとなる。真っ黒のコンクリートを、白い車が進む。赤信号にも遮られず、白い車は祭りへと向かっていった。

一つ、赤い郵便局のバイクが元の場所へと帰って行った。

その様子を眺めながら、祭りへと向かう。仕事をしている人々は、どうしても辻褄を合わせなくてはいけない。不足のないように穴を埋めなくてはいけないから、祭りを楽しめない人物が一人や二人、発生することはおかしなことではない。歩道を歩く親子は、和気藹々としていて、そして会話の内容と言えは祭りのことで占められていたし、子供は甚平を着せられていた。新品の甚平が嬉しいのか子供はスキップをする。浅黄色の甚平だった。その数秒後、甚平は子供が転んだことにより汚れてしまうことになったのだが。

泣きわめく子供の声が祭囃子の聞こえぬ道路に響く。気づく、気に掛ける人間は親しか居ない。車の排気音が無情にも子供の存在を掻き消していく。

空模様が子供の心情を表現しているかのようにどんどん悪くなっていった。子供を親が宥めたのを確認してから、さらに祭りへ向かう。

最後の砦とも表現出来るだろう橋を渡っていく。ページのタイトルが敷き詰められた歩道のある堂々とした構えの橋なのだが、車道が右手すぐにあるので油断をしてはならない。気を抜くと背後からやって来る自転車に、走る子供に、前からやって来る祭り帰りの人々に押されて左は川へ転落、右は自動車事故となりかねないのだ。物騒なので車道側にも柵を拵えて欲しいと思っただけだが、何も声に出していないので一向に柵は作られない。

橋を超えてしまえば祭りの会場はすぐそこなので、一気に人々の服装が変わった。普段は見かけないような和服ばかりが視界を埋める。その中で、アレンジの施された黒地の裾にフリルをあしらった浴衣を着ている少女が、ツインテールにした黒髪をいじりながらスマートフォンを操作していた。

左手の川は天候のせい、光が差し込んでいないからか水がどのようなになっているかを把握することは出来なかった。ただ、そうであったとしても濁っていることだけはつきりとわかる程度には汚れていて、絶対に入りたくはないと思っただけは居るようには見えない。橋から見下ろすようにして、川の中がどのようなになっているのかを相談している少女らが数人いるが、彼女たちが落ちないことのみを祈った。片手にある綿菓子に水に触れたら消えてしまう。きっと、この日のためにクリーニングや手入れを施してあるだろう浴衣や甚平が、台無しになつてしまう。来年もよい祭りを過ごしてほしい一心で願った。

すると、背後からきゅ、とタイヤの擦れる音がした。

この音は聞いたことがあった。自転車が急停止するための、必死の鳴き声だ。

そしてその停止音は残念なことに背後——すぐ後ろで発せられていた。

次の瞬間、橋の柵、左手によろけていた。咄嗟に柵を掴むが、勢い余つてか身は柵の向こうへと追いやられる。

眼前に広がる空は悲しいほど黒かった。限りなく灰色に近い黒色をした雲がパズルピースのように並べられ、わずかな切れ目から顔を出している太陽は細く光を注いでいる。まだあの子供が泣いているからこんな暗い空なのだろうか。早く機嫌を直してほしい——

川の様子を観察していた少女たちがあんぐりと口を開けている。綿菓子も同じように落下した。軽い綿菓子はふわふわと浮かなかった。挿し込まれていた割り箸が重かったのだろう。ぼちゃん、とも音がしなかった。水面には浮いてしまっているようだった。もう、背後にあるので、どうなつてしまったかについてははつきりとわからない。

ツインテールの少女がこちらに向かってスマートフォンを向けている。にやり、と笑ってこちらを撮影しようとしているようだった。

落下している最中、カメラに向かってピースをすることは出来た。はい、チーズ。シャッター音は聞こえない。何故ならもう沈んでいた。濁った水が目を潰す。早く上がらないと。

今日は楽しい祭りの日。何があつても楽しいはずなのだ。

銀座は文化の歴史を感じさせる街だ。華やかな街の中に大火の悲劇があったとは想像もつかない。江戸時代に一度、明治時代に二度起きた大火災。地震や火災の大きな被害を受け続けている日本が文化を継承していくには大変なリスクがある。それでも日本独特の様式美を守ろうとするこの国の人々の心意気だけが文化を支えているのだ。

火災から免れるために東京は銀座煉瓦街を作り上げた。ロンドンのリージェント・ストリートに倣い設計された街並みは、ロイヤルな香りがほのかに漂う。その後関東大震災、第二次世界大戦が銀座の町に多大な影響を与えたが、明治の煉瓦街の風情は今も色濃く残っている。

銀座の文化は時代と共に変化し続けてきたが、私は戦前の文化に強く惹かれる。特にグルメやファッションで日本風にアレンジされたものが興味深い。例えば木村屋のあんぱん、煉瓦亭の洋食は和洋折衷の食べ物だ。この時代、多くの人に受け入れられるためには、外国文化をそのまま持ち込むのは無理があったのかもしれない。

今では気軽に海外旅行ができ、ネットで自国のことのように情報を手に入れ、外国人に話しかけられたら一目散に逃げ出す人もほとんどいなくなった。そんな時代だからこそ、歌舞伎や宝塚歌劇のコアなファンが日本独自の文化を守っているし、ファッションでもネオみやぎ族が現れるなど優れた文化は決して消えることがない。

先日、買いたいものがあって銀座に出かけた。車の通らない脇道を歩くのが好きなので、大手町で降りて散歩しながら銀座へ向かった。

日比谷通りと402号線に挟まれたストリート。ここは脇道とは呼べない立派な通りだ。高級ブランド店のショーウィンドーの洗練された美しさと本格的なお洒落な人が目立つ。五月の街路樹の輝きが元気を与えてくれるが、冬になるとこ

の木々にイルミネーションが施され、また違った街の色を楽しめる。

ベビーカーを押すファミリー、大きなソフトクリームのオブジェを悪戯っぽい表情でペロツとなめる女の子、モードファッションを華麗に着こなした二人連れの女性、仲の良い年配のカップルと様々な年齢の人々がマイペースで歩いている。銀座中央通りの方がゴージャスな雰囲気をも少し出しているが、街のスピード感と濁った空気のせいで安らぎは感じない。

この通りを左に折れてすぐのところ、ジュエリーショップのようなチョコレート店がある。「フ・メゾン・デュ・ショコラ」。食べる宝石とも言われるチョコレートだから、当然店構えもそうなるのだろう。ガラスケースにずらりと並んだチョコレート横に鮮やかなバステルカラーのマカロンが一条乱れず鎮座している。なんと乙女チックに美しいのだろう。フィンガービスケットのように細長く、イエローオーカー色のエクレアもとてもおいしい。食べ歩きするマカロンを一個買いたしたが、丁寧に接客してくれるのはさすがだなあと感心する。こういうことを学べるのがこの町の良いところだ。

405号線の信号を渡れば銀座だ。中央通りに向かっていくと、「ツモリチサト」のうろこの壁が3Dのように浮き出て見える。イエローのグラデーションと金の彩りは、目立つが温かく柔らかかで、決しておかしな景観ではない。むしろ銀座にふさわしい。

「ツモリチサト」の服に童話の世界を感じる。夢があるし、着てもカワイイと思う。でも私は着たいとは思わない。それはゆるふわ感と、遊び心が満載すぎて実用性に欠けているせいだ。

G a G a ほどではないが前衛芸術的なこの服で大学の講義を受けるのはなかなか勇気がいる。もしそんな人がいたら、すぐに友達申請をするだろう。

中央通りは歩行者天国だ。日曜日くらいはみんな散歩しよう。

お腹が減っていたせいか、きらびやかなショーウィンドーを楽しむ余裕はなく、足早に三越に向かった。

三越では一階エスカレーター脇にいる整理係の人が、いつも通りに「エスカレーターには二列で動かずにお乗りください。」と丁寧呼びかけている。そうし

ないと本当に危ないほどどんどん人がエスカレーターに乗っていくので、正直ちよつと怖い。

外国語の店内アナウンスは英語でなく中国語だ。昨今の世界経済情勢を見れば当然の判断だ。銀座はいつでも最先端の街なんだなあと思っていれば、この前池袋東武で何と五か国語アナウンスが流れていて、度肝を抜いた。さすが池袋。

さて、お昼はイタリアンレストラン「セストセンソ」でとうろうと思う。三時すぎだったので店内は静かだ。お店の人は全員男性で、客は全員女性という実に今の風景である。女性に人気なのはインテリアの影響かもしれない。というのも、全てに皮、麻、木、石、和紙の天然素材が使われているので、心身ともに安らげるのだ。オレンジの照明がほんのり明るい、ゆったりとした空間は、まるでおしやれなマンションのリビングのようだ。オープンキッチンから見えるシェフの華麗な動きにはひとつの無駄もない。

私が選んだタリアテレー・ラタトウイユソースは、オイルと塩分控えめで家庭的な味だ。イタリアンはオリーブオイルの多さに閉口することがよくあるので、このテキストはうれしい。ブロッコリー、ズッキーニ、パプリカ、きのこトマトをたっぷり入れた家で作るパスタのレシピも脳内に出来上がった。

ワイングラスに入った氷なしの白ぶどうジュースの甘さ、酸味、果実特有の渋みと天然の香りをゆつくりと堪能しながら、つい長居をしてしまった。時には分不相応な場所に行ってみるのも悪くない。ただし、きちんとした哲学を持っていないといけないが。

では、そろそろ買ったものを手に入れよう。

木村屋。その入り口は狭く、出入りの人でごった返していて、確固たる意志を持たないとひよっこ大学生など店内に入ることすらできない。その辺は回を重ねてすっかり慣れたが、更なる難関はクリームパンを手に入れることだ。木村屋ならではの混じり気のないパン生地と、パンのためにしっかりと作られたカスタードクリームでできたクオリティーの高いこのパンは、よく売り切れになっている。この間などは、ガラスの蓋からちんまりと見える、木のケースに並んだ残り少ないクリームパンを前のおばさんが全部買ってしまった。一瞬、おばさんの首を絞

めてでも手に入れようかと思っただけから、パンの誘惑は恐ろしい。

しかし、あった。ほの温かく重いクリームパン。度々クリームパンの代替品扱いにされてしまうさわやかなあんずジャムパンもあんぱんも、優しく素直な気持ちで買うことができた。

木村屋のあんぱんは、手作りのもの以上の価値を持っていると思う。パンは小麦粉、イースト、塩、水、砂糖を基本に卵、油などで変化させていくのだが、木村屋は、あんのために試行錯誤してパン生地のレシピを生み出したのではない。あんもパン生地も手作りではここまで質は上がらない。お菓子作りに凝っていた時は自分のお菓子の方が材料が良く、好みの配合で作れたので満足できた。だから店のお菓子が嫌いだった。しかしあんぱんは作る気がしない。餅は餅屋、パンは木村屋だ。

ずっしり感が心地よい木村屋の白い袋を携えて、最後に立ち寄るのは決まってお隣の山野楽器である。二階のクラシックコーナーでは、バッハの「トッカータとフーガ」のファイナルが厳かで威圧的に流れている。バッハは作曲家の中で最も悪魔的な人だと思っっているせいか、作品もあまり好きではない。なるほど天才だと感じる時があるし、聖人君子的でない芸術観にも共感できる。しかし彼の子宝指数の高さはどうにも受け付けられない。一人の女性に13人も子どもを産ませるのは、出産の危険性を考えるとDVとしか思えないのだ。

それに比べてピアノの詩人ショパンは、ガラスのハートの持ち主だ。夭折したせいで肖像画は青年のまま。一度も結婚せずに美しい音楽だけを残していった。バレエ椿姫の音楽にもなったバラード第一番は、気持ちよく落ちた時に繰り返し聴く曲だ。迷惑ばかりかける人間がいる一方で、優しく慰めてくれる音楽もある。バレエ音楽やお気に入りのアーティストのCDを眺めていると、バレエ「ラ・バヤデル」の全曲CDを見つけた。だがゲルギエフ&マリインスキー劇場管弦楽団の演奏でないことにケチがついて、買わずに帰ってきてしまった。そして大変後悔している。ゲルギエフは罪深い。

銀座は海外ブランド店が立ち並び、物価が局地的に高い。学生などが行くこと

ろではないと思っている人もいるかもしれない。しかし私は文学を学ぶために銀座へ行く。

明治創業のネクタイの田屋、文房具の伊東屋、レストラン煉瓦亭。文豪は皆、おしゃれで、こだわり屋で、グルメなのだ。そして文学のにおいを感じるところには必ず美がある。

日記

エッセイ

私の佳人

今日は待ちに待ったおデート。オシャレもメイクもバッチリだ。いくら大学生同士でも、近いとはいえ学校が違くと、逢うのには中々骨が折れる。マジメな学生は何かと多忙なのだ。

2人は約2カ月ぶりの再会を大切に愛おしむ。そして、いざ根津ぶらり旅へ。彼女は埼玉県民なので、デートプランは毎回私が決めていく。今日のプランは、うちの学食でお昼を頂く、弥生美術館で絵画鑑賞、お隣のカフェ「港や」で休憩、最後に根津神社というもの。

優しい彼女の笑顔に癒されながら、道中のおしゃべりに耽る。彼女は恋人と遠距離恋愛中なので、彼の話で持ち切りだ。源氏物語を勉強中なのに恋に縁遠い私には羨ましい限りだ。しかし写真の彼は私のタイプではない。社会人だから仕方がないのかもしれないが、彼は仕事に忙しいことにかまけて、あまり会えない事を肯定しているように思える。私は一度だけさり気なく、別れた方がいいと言ったことがある。彼女は今まで見たこともないようなきれいなえがおで「心配してくれてありがとう。」と言った。全くもう。二の句を継げなくなってしまうではないか。どんなに笑わせても、恋人の話をしている時の彼女のえがおに優るものはない。普段は大人しい気性なのに、恋人との喧嘩はとてつもない。泣いたり、怒鳴ったりする姿なんて想像ができない。私は絶対男のためには泣きたくないし、泣けない。

人の魅力というものはほんの少しの隙間から垣間見られる。おっとりした平安美人の彼女。しかし彼の事で表情をくるくる変えている時の彼女もまたとても可愛らしく、はっとさせられるような美しさがある。

エッセイ
美とは一瞬であり永遠でもある。麗らかな初夏の午後、ゆるやかに流れる「荒城の月」と優しい冷気に包まれながら、あんみつを口に運んだ。

親愛なるシスター清水

今日は土曜日なのに生憎の授業。宗教学だった。彼の喋りは単調であるが話には中々含蓄があるし、興味深い。真面目でいかにもお堅い風情の彼はなんと私のお父さまと同じ、省庁勤務だった。何となくバツが悪く感じる。

今日の講義はキリスト教、神道、ヒンドゥー教などのお話だった。私は、中学が関西にあるミッション系の学校だった。学校内にはシスターがいたし、近くに教会もあった。制服は修道服をイメージしていて、地元では制服がカワイイ学校という定評があった。髪を2つくりにして、学校のトレードマークともいえる帽子を頭にのせ、紺色の足首まであるワンピースの裾をなびかせて歩けば、中学生といえども皆いっぱしの貴婦人然としていた。校舎からは海が見え、晴れた日には宝石のように眩い水面を眺めることができた。帰りは友達とお喋りしながら哲学したりなんかして、急で長い坂道をのんびり歩いた。

そんな懐かしい記憶と邂逅したら、ふと1人のシスターを思い出した。私の大好きなシスターだ。シスターにも色々な種類の人っていて、優しいひともいればロツテンマイヤーさんみたいなひともある。彼女は物腰が柔らかくて芯が強い、そういう人。今でも覚えている言葉で「2つの苦みを持っている人がいたらその人に5つの幸福をわけてあげなさい。」というのがある。つまり人の苦しみは見かけだけではわからないから倍以上尽くさなさいということだ。辛い人は苦しみ、幸せな人は幸福を分け与えるというのは中々合理的で、人の道理にかなっているなど感じた。皆優しすぎない優しさを味わっているのだ。

さてチャイムの5分前、授業も終わり。親友ののりけ話を聞きに行ってきた。

橘小夢

散歩が趣味な私。休日は至る所をトコトコ、トコトコ歩いている。特に文京区がお気に入りだ。文豪ゆかりの地が多い文京区は、日本文学を学ぶ者にとつては町自体がお宝なのだ。

さて今日はどこに行こうと迷っていたが、母の勧めで、弥生美術館でやっている橋小夢展に行くことにした。絵はあまり詳しくないが、今回の展覧会はとてめ気が入った。小夢は幻の画家とも言われており、今回初めて展示される作品も多かった。画風は妖艶で繊細。そしておんなの常にか何を求めているような細く鋭い目が特徴的だ。題材は文学に関するものが多かった。だから私にもわかりやすかったのかもしれない。

幻の画家小夢の人生は意外と平凡なものだった。家族を大切に、雑誌の挿絵などの商業的な仕事もしていた。しかし当時は評価がさほど高くなかった。絵のクオリティからすると、むしろ低いくらいだ。これにはわけがある。小夢は悲劇の画家という異名も持っている。画集を出そうとしたら震災が起こり、絵を出したら発禁処分になったりして、最後まで大きなチャンスに恵まれず幻の画家となってしまったのだ。そんな小夢が再評価されたのは日本の伝統文化に外国人が興味を持つようになってからだ。日本人が評価できなかった美を異国の地に住んでいる人々が評価してくれるのはとても喜ばしいことだが、すこしさみしい。

絵画のどこに芸術性を見出すかは難しいし、概して芸術性の高いものほど評価されにくい。まあ、こんな事を言つては身も蓋もないのだけれど、芸術品の定めのようなものなのだ。今価値があるとされているものは、誰かがそこに価値があるというべールを被せたものだ。ピカソは偉大な芸術家だとされている。技術も、心へ訴えるものもたっぷり備えているようだ。それをただ崇め奉るか、上品に挑発に乗ってあげるかは個人の自由だ。

私は自分の好きなもの、嫌いなものは全て自分で決める。芸術に対してひとは皆、ステキな浮気者であつていいのだ。

7月に弥生美術館で新しい展覧会が開かれるが、もう待ち遠しく感じてしまう。本当にときめきにはお金がかかるなあど強欲な自分を少しだけ戒めて、お気に入り

りの日傘をさしているものカフェへ向かった。こんな暑い日にはガトーショコラよりはアイスクリームがグッド。

人生を生き抜くということは、平地を横切るとわけが違う

おでこの上の方がズキズキ痛む。しばらくすると腹痛と吐き気も仲間に加わつて遊びだす。これが一週間くらい毎朝続いている。五月病か、はたまた初期のうつかとみんなに心配された。うつというのは強ちハズレではないような気がする。私の中に悩みという名の何かは確かに存在するのだから。しかし、それほど深刻なものなのかと聞かれるとそうではないと答えるだろう。本当は深刻なものがあるからだ。

携帯の目覚ましと普通の目覚ましの二重奏を聴き、頭痛を相伴に友達と談笑し、授業を受けるといふなんて事のない日々。不満なんて多分ない。それでもふと考えてしまう。まだ見ぬ楽園を。

父が帰ってきた。ただいまという言葉が始まりに、デリカシーの欠片もない父は早速傷心の娘に絡んできた。鬱陶しいことこの上ないが、揉めると面倒なのでいつも通り右から左へ受け流す。父の話は玉虫のようにコロコロ変わるので余計なことは言わず、曖昧に笑って相槌を打っておけばよいのだ。しかし今日は珍しく面白い話が混じっていた。父の職場の沖繩出身の人によると、沖繩の人は自転車替わりにタクシーを使うらしい。沖繩は雨と坂が多いから自転車は必然的に無理だそう。彼は東北大学出身のエリート官僚だ。高校生の時から塾にはタクシーで通っていた、と少し自慢げに語っていたということ、さぞかしリッチな暮らしをしていたのだろうと想像した。しかし事情はちよつと違っていた。沖繩のタクシー料金は運転手さんとの交渉で決まるらしい。つまり値切れるということだ。彼は学生だったのでマケてくれていたのだ。関西出身の私は値切り文化は心得ているはずだが、カルチャーショックを受けてしまった。自分の常識という名

の壁がいつも簡単に打ち砕かれてしまったようだ。そして、何だか自分の悩みが下らないもののように思えてきた。四角四面に考えていたら人生は損をする。

今日は話のお礼に、いつもより丁寧にお茶を淹れてあげた。たっぷりとありがとうを込めたお茶をどうぞ召し上がれ。

五月十五日

炭酸が苦手だと言うのに炭酸を買ってしまう。栄養ドリンクに分類されるそれを電車が来るまでの三分で飲み干すのは大変だった。

瓶とはどうしてこうも飲みにくいものなのかと考えつつ私は急いで炭酸を流し込む。珍しくせき込まなかったので電車に乗る寸前、瓶を捨てながらガツポーズをした。

その後見事にせき込んだ。一駅分だ。

帰宅してからも炭酸が飲みたくなり自動販売機へ向かった。間違いだった。吐き出されたのは炭酸ではなく珈琲だった。カフェインを摂取すると別の意味でせき込んだ。珈琲には砂糖、それからミルクだろう。

結局また家で珈琲を飲んだ。口直しが多い一日になっていた。

そういえば最近寝付けないのはカフェインのせいではないかと妹に言われたので今度から夜に珈琲を飲むのはやめようと思った。妹は十時には寝ていた。羨ましい。けれどタオルケットを蹴って腹を見せている女子高生は見えない。今日もタオルケットを直さないと風邪をひかれる。

明日のバイトが少し楽しみだ。新しいサラダのお迎えは心が弾む。

弾んだ心とは逆に声は枯れてしまうが、それはまた別の話だ。

五月十七日

起きて異常な喉の乾きに「とうとう私も死ぬのか」と考えながら麦茶を飲んだ。何度も死にたがったり死ぬのは人間ならよくあることだ。

体温計は平熱の一度上を指していて、ああ今年も発熱してしまったなあと悲しくなる。健康第一だなんていうのが健康に気を使っても私は風邪をひく。

風邪薬のせいですこぶる眠くなっているところで、妹に髪をいじられる。引く張られると痛いのに髪をいじられると眠くなる。眠さには勝てず眠ってしまった

た。起きたら編み込みだらけの髪があった。解くのに疲れてしまつてすぐに寝ようと思った。

布団の、枕元で積んである文庫本が私を眺めている。二年前に買った本が私を呼んでいる。しかし私の手元には図書館から借りた本。返却期限には勝てない。

早くこれも読んでしまわないと。嫉妬深い目が増えてしまう。

ところで、本を積み上げている訳だが本棚を買うと言う予定は全く無いのがおかしい話で、きちんと終いさえすれば本は私を恨みややしないと思うのだがどうだろう。

埃を被っていることは無視して。

五月十九日

十八日だと思いこんでいた。いまいち日付が追いつかない。

眠い。眠すぎて気がついたら眠ってしまったている。どうやって眠ったのだろうとか、考えているうちに眠くなってしまっている。

こう、意識すると眠れなくなるくせに気がつくとも眠っているとは何事か。

友人にここ最近の愚痴を話している。むしろそれしか話す内容がないので、そろそろ控えたい。

ところで。

雨が降ったわけだけれど、アスファルトの臭いがしなかった。

しつこい雨ではなかったから？ それとも今日の雨は消臭剤だったのかもしれない。勿論無臭だ。いつもはアスファルトの香りなのかもしれない。

たまにはレインコートを着ようと思った。六月になれば出番はやってくるだろうか。

でも私はレインコートを持っていない。そういうえばあの重苦しい感じが嫌いなのと、上手く着れないという理由で謙遜していたのを思い出す。百円程度なら買ってもいいかも。

五月二十五日

日付が空いたのを許してほしい。誰も許さない気にはならないと思うがとりあえず許してほしい。何と無く許しを請いたい気分なのだ。

生まれて初めて貧血になる。

授業を受けながらシャープペンシルを動かしていると、本当に、本当に突然世界が暗転したのだ。驚いた。

私はこの表現を多用したことがないのだがこれからは使えるぞ！ という気分になってしまったのは不謹慎だと思う。けれど表現が実感出来るとなると少し嬉しくならないだろうか。

そういえばウォークマンをなくした。

四六時中音楽が無いと生きていけない私がウォークマン無しの生活をするということがどれだけ困難かというところ、キャベツ無しでモンシロチョウを育成するものだと思って欲しい。多分できるけれど、できるかな？ と思わせてしまうレベルの状態なのだ。

イヤホンなら適当に見繕えるがウォークマンレベルになるとどうしようもない福沢諭吉が口座で眠っているのを叩き起こさねばならなくなる。

それは嫌だ……私には宝塚が……宝塚が待っているのに……。

五月二十六日

ゼミ発表初回をなんとか乗り切り二限を睡眠に費やし三限のプリントは所々穴食い状態になったが私は元気だった。貧血とはなんだったのか。

ウォークマンを失って数日。発見される様子も無い。もしかしたら道端に落としたのかもしれない……幸いなのは全てパソコンに楽曲が入っているということである。バックアップの大切さを思い知っているとiPhoneのバックアップを催促された。

はて、iPhone。

エッセイ

家に帰るなりパソコンに飛びついた。おお音楽が聞けるぞ！ イコライザは動かさないけど音楽が聞けるぞ！ ジャケットデータ読み込まないけど！ わあいわあいと一人で喜んでいたりまた貧血を起こした。どうなっているん

だ。テンションは貧血に関係しているのか。昨日は落ち込んでいたのに。

膨大な量の楽曲を一気に入れても全く聞かない曲が現れてしまうので百曲ぐらいにしておく。買ったアルバムの中の全曲を好きだという人物はたしてどれほどのだろう。

五月三十一日

また日付が飛ぶ。

好きなメディアがこぞって更新やれ動きを見せると思わずテンションが上がってしまふ。今日は寝込んではいない。高校時代の友人と町田を歩いていた。

初めて訪れた街で何を考えるかと言うと、珈琲店を探したりする。考えていなかった。

何故かその街特有のブレンドだとかを置いている店があるのだ。買はしないけれど。上手く試飲をさせてもらってから考えるものなのだ。店員には適当に「親が珈琲好きで」とか言えばいい。

さっぱりとした味わいの貰った試飲のブレンド名を忘れたけれど、町田はいいと思う。美味しいものがある場所が悪い場所なはずがない。

バイト先と同じ系列店舗で飲み物を買おうとついでくるはずのトッピングが無かったので匿名で連絡しておいた。許さない。私のストロベリージャムの恨みは大きい。

ついてくるはずのものが無くなっているのは本当に心に悪い。例えば特典とか。それはもうトッピングと同じようなものだけれど、しおりは重要だ。私はそれ目当てに本を買うこともあるのだから。

真夏の文庫本フェアが迫っている。財布が腹を空かせているけれど、口座に餌をやり続けなければ。

六月一日

死にもの狂いでレポートを完成させた方がいいが、体裁を完璧に間違えていた気がした。

日記

千五百文字は私にとって述べたいことを述べられる文字数でなかったので削った。ちなみに余分な感想等を含めて述べたいことと換算しているので、実際には規定量の文字数に収まるのが面白い。

えっ、もう書けたの!? と友人が言ってきたが完璧に無視。

いやいや。私はちよっとタイピングが早いだけですよ、と言ってやりたかった。だって早いんだもの。少なくとも他の友人よりはずっと早いはずで、それでいてうるさいタイピングをしている。隣で授業を受ける友人はこのタイピングの音を聞くと「追いかけてられている気がする」と答えた。私もそう思う。

階段を下りているときに後ろから勢いよく、しかも足音を異常なまでに鳴らしながら迫ってくる人物。

追いかけられると否応なく逃げてしまう。小心者の私はタイピングの音を小さくする努力をしようと思う。

そしてまた本を借りる。図書館返却物は全て読み終えるが自分で買った本のことは聞かないで欲しい。

六月二日

ひたすら音楽を聴いているとハイになる。躁状態までとはいかないが曲調と気分の合致によつては叫びたい気分になる。

私が曲を選ぶ基準は自分とどれぐらい合致するかなのだ。四つ打ちやれ転調やれとにかく自分と馬の合う曲を探すためまずはイントロ。

ふむふむ。君はこういうやつなのか。しかし惜しい。次、というように容赦なく曲を変えていく。変えていくうちにどこかびつたりと来る人材に出会うのでそれまでの辛抱だ。

本は読み切つてから駄作だとか兎に角言いたい放題するということに変な話だと思ふ。

けれど退屈な映画を見続けるのが苦であるのと同じで私にとって合わない音楽を聞くのは食べられないものを口に突っ込まれているような気分なのである。

茄子を突っ込まないで欲しい。茄子に突っ込むのはひき肉だけでいい。

作つても食べられない料理のレパートリーが増えていく中、今日もじゃがいもを茹でて塩を振つただけの料理がやはり王道だなと感じた。

六月三日

発表の機会が多いと口達者になればと早口言葉をしてしまう。今日は柿食う客は云々とずつと言つていたけれど結局発表の順番にはならなかった。

日本語の早口は口をたくさん開けて回してを繰り返すが中国の早口はひたすら舌を動かす印象がある。

滑舌が非常というわけでもなく、まあ、つかえる程度に回らない私は頭を抱えた。中国語の発音が上手くなった気がしない。ちなみに私は巻き舌も出来ない。ろろろろろと友人が言っているところを私はえおえおえおと発音するのである。

恥ずかしくなつてきたので早口をする癖をやめようと思う。

今日はひたすら魚を食べたので私にえらが生えてくるのも時間の問題だ。人魚姫じゃないが水中で会話をしたら、と思つたけれどまず目をどうにかしないと生活すらままならないのでは。人魚の構造の不思議は目に集約されていたのだ!

はて、今日はどうしてこんなにおかしなことが思いつくのかよくわからないので寝ようと思う。

今日の夢はサーロインステーキを食べる夢がいい。

六月四日

語学の話題が沸々と浮かぶけれども日本語が一番難しいらしいのもっと堂々としていたい。

そういえばこれも十日目で、一応ノルマは超えたのだけれども、全く一貫性のない文章の羅列になつてしまっている。

けれど毎日それが信念でもない限り同じことを延々と言い続けるのははたして面白いものなのだろうか……ふむふむ。

同じことを言っていると云えば、毎日妹はアイドルを可愛いと言っているし父

はツムツムのハートを送れと言うし母は母でお腹が痛いと言っている。妹はとりあえずそれを心の内にしまっつけてほしい。父はそんな子供っぽいことやめるべきであり、母は薬の服用をやめてヨーグルトチャレンジに切り替えるべきだと思う。一方私は今日もパソコンを前にして原稿が終わらないだのなんだの言っているので血は争えないというか、人間は何か毎日同じことを吹き続けているのかも知れない。

ために妹のツイッターを見せてもらおうと本当に同じことを微妙な差で言い換えていたので面白い。

とりあえずまた眠くなってきたのでここまで。昨日は結局納豆まみれになって甘いキムチを食べる夢だったので今度こそサーロインステーキを食べたい。

六月五日

起きて発熱に気付くまで、五回頭をぶつける。

こうやって文も打っているときもじんじん痛むが何もしないのも嫌なのでとりあえず打つ。

ちなみに五回の内訳は、一回目が二段ベッドの柵、続いてベッドの柱、階段へ進むまでのコーナーで一回、トイレのドアノブに残りは洗面台の蛇口だった。そこでやつと身体の不調に気が付いたのはもう朴念仁としか言いようがない。

明太子って何が明るいんだろう……と考え始めたところで雨が降ってきた。残念ながらレインコートは買っていないのと、寒気が尋常ではないので外には出られない。

ここ最近のかたつむりやなめくじを見かけないので雨が寂しい。紫陽花も少なくなつて、六月がただの休暇のない月になってしまう。

おっと、忘れてはいけないいとこ周回が日曜夜にあるので話のストックを集めておかねば。特に話すことないけど。結局愚痴大会になることは眼に視えているけれども。

エ
今度なめくじを見かけたら必ず塩をかけようと決心した。今日の夢は味噌ラーメンがいい。

六月七日

最終日は何かを書こうと思っていたらこんな時間になってしまっていたので反省する。今日はいとこ会議のはずだったのだけれど、ほとんど不参加の状態終了してしまった。

みんなが大きくなると離れていくらしい。体が小さかったから収まったあの部屋は私が寝転ぶだけで狭くなってしまっていたし、もう一緒にビールケースには座れない。

かなり落ち込んだのでひたすら焼き鳥を食べていた。タレをたっぷりつけすぎたせいで味がしつこくなっていたけれど、それもいいのだ。

膝を抱えて悲しくなるよりかは身体を動かした方がいい気がしたので、とにかく暴れていた。主にゲームで。集合場所には常にゲームがあるので適当に見繕って適当に遊ぶ。

おかげでより悲しくなってしまった。一緒にやったゲームを懐かしいという理由で選ぶんじゃないかった。

あの頃のわいわい遊んで過ごした日々は通用しないのだと感じてまた悲しくなる。

誰かが大きくなっただけで変わるものだと感じた。来年の正月には顔を出そう。

2015/05/15 (金)

サークルで皆にエッセイを書くように言ってしまったので、早速書き始めることにする。

ここしばらく金曜日は遅刻寸前の時間に家を出ることが常態となっている。たいてい目は醒めるのだが、そのまま布団から起き上がることなく二時間ほど枕を抱いたまま居る。誰の何という作品か忘れてしまったが、ラテンアメリカ短編集に、ホセ・デ・マイストレ伯爵という人物が書かれていた。曰く、かれは召使に朝の六時から一時間毎にかれを起こすように命じるのだが、一向にベッドから出ようとしない。あの朝のまどろみ特有の気分、布団の温かい感触を味わうためだ。起きなくてはいけないという不安を感じた後に、その苦を上回る幸福感に身を包む。うとうとするあの感じは確かにとても幸福だ。

思い返すにぼくは子供の頃から朝が苦手だった。これまでのわずかな人生にすっきりした気持ちのいい目覚めを味わったことなどほとんど無いだろう。考えてみると、これまでにサークル内で発表した小説のタイトルは、最初が「コイトスのめざめ」、最近のが「うるとき」と、なんだか睡眠に関して通底するところがある気がする。我ながらどうかと思

う。さて、今日一日は睡気と倦怠感に苛まれていた。

図書館に返却する本を鞆に入れて通学路を急ぐ、暑さもあって汗が出る。どうせならうとうとしたまま大学に飛んでいきたいくらいだ。授業の内容はもうほとんど何も覚えていない。三限の先生の話が相変わらず堅苦しい感じがして苦手だった。

授業が終わって図書館に向かう。本を返却してから、渡邊二郎の著作を探す。ちくま学芸文庫に入っているものは図書館には無かったので、単行本を読むことにする。大学図書館は余り文庫が揃っていないので残念だ。『芸術の哲学』という放送大学のテキストを見つけたので、それを読み始めた。いわゆる実存系の思想の流れの中にあるようだ。芸術の虚構性を認め、その虚構性を生の真実性を見るための装置だと捉える考え方に共感を覚える。ぼくは兼ねてから「窓」の象徴性が気になってしょうがないのだが、芸術は真実の為の窓だと言える。窓について書いてある本は滅多に無いので、見つけ次第、購うことにしている。先日、『ヴァーチャル・ウインドウ』というのを見つけた。普段覗かない美学芸術系の棚にあつたのだが、その手のものは縁がないので演習のテーマが芸術で僥倖だった。検めて値段を見たら税込四〇〇〇円を超す。買わなきゃ良かった。当然まだ読んでいない。

サークルでは、正直なところ出たくはないが、課題めいたものを出した。新入会員を増やすためにはやはり活動しなくてはどのようなものもなさそうだが、文学なんて今日日流行らないのかもしれないが、ヴァレリーやらイーグルトンは修辞学的重要性を説い

ている。でも、言葉なんて誰もそれほど気にかけないみたいだ。例えば、「有る」と「在る」とでは大違いだ。ひとつの言葉にも決まって歴史が有る。人文学なんて要らないのかもしれないが、もう少しくらい色色な人の目に留まっても可さそうなものだ。帰ってから気付く。図書館に返却し忘れていた本が二冊部屋に残っていた。返却期限は今日だ。明日返しに行っても、ペナルティは二冊合算だとして、二日間の貸出停止か。それならまあいいか。最近ほんとうに忘れっぽいので気を付けなくてはならない。

2015/05/16 (土)

雨音を聞き二度寝して、午頃に起床。雨は止んでいた。図書館に本の返却をしに往く。駅の改札付近に大学に雇われたと思いき小父さんが立っており、「学生は階段を使うこと」だったか細かいことは忘れたが、エレベーターの使用を禁止するような文句を書きつけた看板を持っていた。教育機関としてどこかおかしい気がするが、たぶん目的は近隣住民に対する目眩ましだろう。学生から巻き上げた金で学生を縛り上げるのだから凄い。学生はマゾか。

暇潰しを兼ねて、最寄りのひとつ隣の駅で降りる。すぐ傍のスーパーで買い物をするが、結局買うものは何処で買おうが大して変わらないので、それほど目新しさはなかった。ビニール袋が有料の店だったので損をした気分だ。偏見だが、だいたいウオ

ルマート系列というだけでイメージが良くない。

アパートに帰ると蒸し暑くて何もする気が起きない。この頃読んでいた牧野富太郎の随筆集幾冊も読み終えてしまったので、気軽に手の着けられる読み物がなくて困る。河出文庫から『南方熊楠コレクション』というのが出たり、平凡社ライブラリーから『日本残酷物語』が復刊されたり、欲しい本が立て続けに出ている。しかし、そんな金はない。ただ『日本残酷物語』は高校生の時から欲しかった本なので早いうちに買っておきたい。牧野富太郎の本も買いたいし、柳宗悦やその息子の柳宗民の本もそう。『井上ひさし短編中編小説集成』はまだ三巻までしか買っていない。それに、そろそろ卒論に向けて言語行為論関係の本でも集めようとも惟う。まだ卒論のテーマなんて決まっていないが、ウイリアム・ジェイムズ、ハイデガー、ヤスパース、メルロ・ポンティ、デリダ、フーコー辺りから選ぶとは考えている。要するに現代思想の範疇だ。とりあえず、言語をテーマにしておけばいいだろうか。

右に上げた思想家から何を抜き出したいかと言うと、交差とか交通といった概念だ。こういうような研究をしている人はいるだろうと惟っていたら、やはり居た。篠原資明という人だ。交通論とかいう領域を立ち上げている。まだ読んでいないが、先行研究として上げられる先達が居てこれ幸い。しかし、この人、方法詩とかいうのもやっていて、こちらはすこぶるつまらない。何とかユーモアの欠片もない感じがする。まあ、まだ詳しくは見えていないの

だが。ところで、どこかで見た名前だなと思ったら、ドウルーズやらエーコの入門書を書いている人だった。

寝る前にオクタビオ・パスの詩集をバラバラとめくる。「詩論を書くことは／書くときに／書かれたすき間を／読むことを学ぶことである／ぼくらが通った足跡ではなくて／ぼくらが向かっている／道である」「詩とは／裂け目であり／一つの言葉ともう一つの言葉との間の／空間であり／未完成なものの輪郭である」（レオン・フェリペへの手紙）。これはそのまま文学論と文学作品に置き換えても通用する。問題なのは、エッセイはそのどちらに属するかということだ。どちらにしても「書くこと」には変わりないはずだ。もしかしたら両方を兼ねるのかもしれない。むしろ「書くこと」の本源なのかもしれない。だから芸術性は薄くても当然だし、書くときには感性がいつそう働くのかもしれない。ところで、「随筆」って、筆の随に、ということだから、ちよつとシュルレアリスムの自動記述みたい。

2015/05/16 (日)

朝起きると窓の外で外国人が大声で電話をしていた。カーテンを開けたら外国人に睨まれてしまった。布団でも干そうかと思ったが、外国人が煙草を吸っていたので止めた。

床屋に行こうと思い、電話を掛ける。三時からなら空いているそうなので、それまでに録画していた

『プラタモリ』を二本分観た。長崎の回だった。それでも時間が余ったので横になってぼうつとしていた。旅行したくなる。

床屋に往くと、娘がもうすぐ成人式だという女性が相談にやって来て、ぼくの御髪卸が中断される。そう言えば、ぼくも今年成人式があったが行かなかった。確かゴールデンウィークのどこかだったはずだが、往復で約そ二万円も出して参加するほどの行事じゃないし、と惟つたのだった。だいたいスーツとか正装が似合わない。何にしても成人式に出席してないので、ぼくはまだ人に成っていないのである。

さて、髪を切り過ぎると大滝詠一の「乱れ髪」という曲を思い出す。歌われているのは女性のことだが。帰りにスーパーでバナナでも買おうかと惟つたが、与謝野晶子を思い出したので止しておいた。

室に戻つてくると、眠気がひどい。適当に本を読みながら寝ようとしたが、こんなところで眠気を散佚してはもつたないと思ひ、こらえる。思えば、この時さつさと寝ておけば良かった。

晩御飯に豚肉ともやしを炒めたのを食べる。食後にトマトをひとつ。テレビを眺める。外から外国人の話し声が響く。テレビを消して、しばらく外国人の話し声を聞いていたが何語かわからないし、甚だ迷惑なのでパソコンの電源を入れ、イヤホンで耳を塞ぐ。音楽が些し静かになると、外人の嗤い声がイヤホンを買ってくる。こういうことは日常茶飯事なのでまあいいかと思つて、ニュースをチェックす

る。やることもないし、シャワーでも浴びようとイヤホンを外すと、まだ外国人の声が響き渡っている。

風呂場から出ると、外人の音がまだする。まさか幻聴ではあるまいと思ひ、ちらっとカーテンを開けると、やはり外国人が二人アパートの扉の前に立っていた。時刻は零時半。携帯片手にもう一度窓の外を覗くと、外国人が怒鳴り声を上げこちらに近づいてきた。ところで、ぼくはアパートの一階に住んでいる。つまり、目の前に外人が迫ってきた。気持ち悪くと思ひ直ぐにカーテンを閉じる。心臓に悪い外国人だなと思ひ、布団に這入ると、外から話し声が聞こえてくる。あそこの室のやつだろ？ あいつ頭おかしいんだよ。裁判だ、裁判。訴えたら。だいたいいあそこの婆さんがいい加減だから悪いんだよ。などなど、ぼくの室の前でぼくとぼくの住むアパートの悪口大会を始めたので、もうちよつと能く聴いておこうとこつそり窓に近づく。ちなみに悪口を言っていたのは、向かいのシェアハウスの管理人の男と先程の外国人。管理人の男は以前、「なんだよメゾン××って、意味わかんねえよ。変な名前に住んでんだから、あそこの住人も頭おかしいぜ」と叫んでいた傑物である。外で喋ってるくらいで覗き込んでんじやねえよってなあ。いかれてんだよ。前はこんなこと無かったのに、あいつがおかしいんだよ。はや午前二時になるうかという頃、まだまだ止まる様子はなさそうだった。面白いので全部聴いておきたかったが眠くなったので途中で布団に引き返してし

まった。頭の中に川崎の簡易宿泊所の火災のニュース映像が泛んだ。

2015/05/18 (月)

アルバイトの日。昨晚の一件で寝不足。作業中も昨夜の罵倒でいっぱいだった。おかげで時が経つのがあつという間だった。

バイト先へ向かう途中、自動販売機の脇にサラリマン風の格好をした男が四人ほど座り込んでいた。顔は紅く、朝から酔っ払っていたのだろうか。東京は物騒だなと念ひ、田舎が懐かしくなる。どうも、周りに何も無いようなところで育ったせいかな、東京の様なごちゃごちゃしたところは未だに馴れないところがある。

周りに何も無いところで育ったほうが、感性が豊かになるのではないだろうかと最近考える。しかしながら、ぼくは感性は鈍いし、やっぱり幼時からいわゆる芸術に触れている人の方が舌が肥えているようだから、間違っている。ヴァレリーが感性は空虚を埋め合わせるとか言っていたから、空虚に触れている方が感性が働くのではないかと惟つたが、やはりあの空虚は芸術作品でしかないのか。アパートに帰ってくると、実家から電話が掛かってきた。外国人がうるさくて敵わないという話をしておいた。かなり以前に、向こうの管理会社に苦情のメールを送ったら、しばらくして、夜中に突然男の叫び声が飛び込んできたことがあった。クレーム

入れてんじやねえぞ、うおう。うわあつ。あの時はさすがに不気味だった。

関係ないが、このアパートのさらに凄い点がある。それは、ぼくの上の室に住んでいる学生だ。かれは毎夜二時半になるとお経を唱えだす。ぼくは初め怪奇現象かと思つた。最初の頃は幸福の科学のお経だったが、最近は法華経を唱えている。

そうした常軌を逸した落ち着きの無さを目の当たりにすると、ちよつとだけ人間性について考えさせられる。人間も所詮は動物だろうとか。植物でもあるし、たぶん鉱物でもあるかもしれないとか。文化 *cultur* は教養、耕作 *cultivation* と関係がある。藝という字は種えるという意味だ。何を種えるのか。種とは何を言うか。ハイデガーの紹介するヘーベルの言葉。「私たちは、エーテルの中に花咲き果実を稔らせるために、根をはって大地から生い茂らなければならぬ植物である」(渡邊二郎『芸術の哲学』より孫引)

「その空虚さが祖国であり、放浪しながらの安住の地である」(オクタビオ・パス「四重奏」『続オクタビオ・パス詩集』真鍋博章訳、世界現代詩文庫)

田舎に帰りたくなってきた。今頃になってホームシックかもしれない。

2015/05/19 (火)

天気が悪いといつも以上にぼうつとしてしまふ。

授業の記憶がもうほとんど霧の彼方にある。授業に出ても話を聴かずにぼやぼやしてるか関係ない本を読んでもせいかもしれないが、聴覚と視覚と両方がせつかく備わっているのだから双方とも使わずにいるのは勿体ない。両立できるかどうかはさておいて。

それで今日は渡邊二郎の『芸術の哲学』を読んだ。ハイデガー、ガダマー、フロイトの芸術に関しての考え方を紹介した部分だ。開かれやら大地やらハイデガーの独自の用語はなかなか判らない。『芸術作品の根源』は途中で投げってしまった。また読み返さなくては。

フロイトの芸術論といえは、以前にコリン・ウィルソンだかの著作でその概略に触れたような気がする。さて、渡邊二郎の本に拠れば、フロイトの考えでは詩人は明るい昼日中に夢想する人であって、詩人の創作とは白昼夢に他ならない。しかし、詩人は詩作術を心得ていて、白昼夢の性格を和らげる。普通は他人の妄想なんて聞かされてもうんざりするだけだ。だが、詩人の白昼夢、つまり作品に関してはそうではない。人はその作品に悦びを見出し、みずからの願望を想像上で代理してくる詩作に魅了される。確かに、そんな一面もあるかもしれない。ピカレスクやグロテスクなんて特にその傾向が強いかもしれない。フロイトは世間にも識られたとおり、それらの働きを人間の精神、特に性欲に拠って一元して説明しようとした。要するに生物学の世界観だ。もちろん、動物もそう単純じゃないだろう。その手

の本でいったらユクスキュルの『生物から見た世界』は必読の書だ。ハイデガーの思想もここにその影響を看取れる。

ユクスキュルは、生物が棲むのは環世界だと言う。環世界とは主体に固有の世界の現れである。例えば、イヌは人にとってはペットだが、ダニにとっては食事である。ダニにはイヌというのは食事のトーンを帯びた知覚像として環世界の中に現れる。

物凄く簡単に云えば認識の違いである。しかし、ユクスキュルの本から読み取れるのはそんな些事ではない。しかし、そんな説明を詳らかにしようと惟つたら、丁寧に読み返す必要がある。だから説明しないでおく。

関係ないが、よく人にぶつかる。というよりぶつかられる。ぼくに衝突する人にとっては、ぼくは衝突可能なもの、或いは存在しないものと映っているのだろう。もっと好意をもって考えれば、道を譲ってくれる人と念われているのかもしれないが、謝罪の言葉もないところを鑑みれば、それはなさそう。別に苛立ちもしないが、あんまりしょっちゅうぶつかるると身体を痛めるので表を歩かないようにしたい。

家に帰ってパスタを茹でる。パスタを茹でるとどうしても村上春樹を思い出して余り気分が好くない。これで缶ビールなど飲むとんでもないことになる。違うのはぼくがモテないということだ。そこだけが浮彫になるので惧ろしい。

食事をしながら、録画してあった『きんモザ』を

観る。世の中みんなあんな心根の優しい可愛らしい人間だったら好いのに。あの世界に生まれたかったなあ。はあ。烏丸先生にぎゅうってさ。と、このように妄想を補償し、作品の内に大地と世界が提供され、懊悩と葛藤に満ち不安に苛まれた時間構造の内に存在する人間存在の真理真相が露呈化される虚構装置が芸術なのである。おやすみデース。

2015/05/20 (水)

外人の声で眠られぬ。この調子で誰だか判らない外国人と生活時間が同期されてゆく。これがグローバル時代か。これを見てたら取り敢えず他所のアパートの扉の前で酒盛りをするのは止めてください。

しかし厭なことは続くもので、風邪を引いた。原因はおおよそ見当がついている。火曜日に、講義中、ぼくの後ろに座っていたいかにも無神経そうな男が嫌な咳を一時半の間し続けていた。かれの所為ではないかもしれないが、かれの所為にしておく。

あとシャーペンを失くした。それなりのお値段だったし、かれこれ六年ほど使っていたのに。これも火曜日の大学が原因だ。この機に万年筆に乗り換えようかなあ。でも金が無いな。

さて、今日はアルバイトの日。朝、行き掛けに友人から連絡が入り、バイト先のコンビニで女子高生から嫌われて陰口を叩かれているから辞めようかどうか悩んでいるとか。その女子高生がツイッターに

書き込んだ悪口の画像が幾枚か送信されてきた。女子は割合こんなものだから気にしてもしょうがないんじゃないかと思うけど、これは偏見か。男女問わずにツイッターで個人攻撃をして楽しんでる人はいらる。ちなみに多くの学科の人達もよくやっつるヨ。おおこわい。あ、内緒デスヨ。虞ろしいからネ。

咳がひどくなってきたのでこらで筆を擱こうと惟つたが、ちよつと雑念がよぎる。

こんなの書いてないで小説書けばいいんじゃないの、との囁きが聞こえた。確かにその通りだ。或る本で紹介されていたナタリア・ギンズブルグの言葉。ギンズブルグはいつか書く文章のために思いついた言葉なんかをノートにメモしていたが、或る時そんなものは無駄だと悟つた。「この仕事には『貯金』のようなものはないのだから」。注意したいのは、飽くまで、この言葉が貨幣の保存を指していると解釈できることだ。つまり、記号化されたものを口座に記帳するなんて無駄だということだ。資産のまま保有しとけということだ。

なんだかちよつと牽強付会めいてしまった。こんなことを云うために言葉を引いたんじゃないやなかつたはずなんだけれども。

実のところ、小説は去年の暮れ頃から何度か書くうとしていた。だが、自分の中でしっくりこないのて書き直すことを繰り返している。タイトルは「遺精」で決まっているのだが、どうにも収まりが着かない。最初の場面ばかり書き直している。別に最初

の場面が気に喰わないのではなくて、最初の場面を捏ねくりまわしてその後の展開を考えているだけなのだけれど、書き改める度に話の筋がずれていく。基本は幻想風だが、一度ミステリ風、サスペンス風の変な調子になってしまった。パソコンじゃなくて原稿用紙に書いていたらかなりの資源を無駄にしていただろうなあ。だいたい文章書くの向いてないんだよなあ。育ちが悪いんだから。いけない、愚痴っぽくなった。これも育ちの悪さの為せる業ということ

で、シリア・ポールを聴いて寝ましよう。

2015/05/21 (木)

風邪が悪化する。風邪薬の副作用で意識は朦朧。大学は二限からだだったが、二限の演習はドイツ語の翻訳を当てられていた。ただのドイツ語の文章なら大した問題じゃないが、文章の中に「ペニス」と「インポテンツ」という語が入っている。ドイツ語を読んで、それから翻訳をする流れだったので、少なくとも二回はこれらの語を口にする必要がある。

そして、この訳文発表は教卓で行わなくてはならない。すなわち、公衆の面前でのべ四つの下ネタ語彙を披露するというのがこの日の課題であった。このようなことを過剰に気にしてしまうのがないのだから、やはりそれは性分というものでやりたくないのだ。この羞恥を軽減するには、何と言っても滞り無く翻訳をこなすことが肝心だ。なんでよりにもよってこのような文章を課せられるのかと自らの運

命を呪いながら翻訳を発表する。さいわい担当した文章自体は簡単なものだったので流麗に任務を全うした。ここまで書くとき程気にしていたと思われそうだが、書くことがないのでこんなくだらないことを書いているのだけれども、これもまた言い訳のように取られるのだからやはり文章を書くというのは難しい。

三限は芸術を主題にした演習。一応哲学科の演習科目なのだが、どんな内容が哲学から離れ、今や都会育ちの学生による単なるゲージツスノビズム大会と化している、ウィキペディアに書いてあるレベルの事実ばかりを並べ立てて満悦とあつてはチョットまずいと思えますがね。この日はフェルメールの贋作を作った男の話をしていた。贋作作ってたんですよ、スゴイツすよねじゃあどうしようもない。本人は面白いと思っているのだろうか。成績の為に厭厭やっていたと考えたい。じゃなきゃ中学生の自由研究だよなあ。じゃあお前はちゃんとやれるのかと質されると困る。芸術のゲの字もないような田舎育ちには向いていない授業だ。ゲと言ったらゲジゲジのゲだろう。

四限はついに風邪のせいでダウン。記憶が無い。もとから人の話をちゃんと聴かないタイプだからそれほど変わりはないが。どっちかと言えば、ユングの云う内向的人間だし。

料理をする余裕が無い。お金が無くて困るが、有り金でコンビニのサラダを買って晩御飯。最近まともにも食べてないなあ。『日本残酷物語』買いたいし

節約節約。出来てないが。

2015/05/22 (金)

定刻通り寝坊。寝坊すると微妙に電車が混み合う時間帯になってしまふからつらい。喉は痛いわ頭はぼろろとするわ関節は痛むわ寒気はするわの這這の体で学校に辿り着く。

三限の講義の先生が五分に一回くらいの頻度で寝ている学生を皮肉っていた。真面目な先生なのは分かるが起きている学生も気分を害されるのではないかと感じる。ぼくは眼を閉じていたが寝てはいなかったので大丈夫。あと風邪割引。

授業が終わって、就活セミナーに出席する。予想していた以上に気味の悪い集会だった。講師がいきなり「それじゃあ、隣の人と話し合ってみよう」とか言い出す。独りで来ていたぼくの隣は友人同士で来ていた連中だったので話さずに済んだが、知らない人同士で自分の長所やら進路やらを話さなくてはいけないとか気持ち悪い。はじめに人見知りの人はいるかとか独りで来ているやつはいるかとか聞いていたが、その直ぐ後に独りでもいいんですよとか人見知りでもいいんですよとか言い出したのも自己啓発臭くてたまらない。面白かったのは講師自身が「ブラック企業はすぐ寝るんですよ」とか「自己啓発ではないですからね」とか言っていたことだ。誰も自己啓発は引つ込んでろなんて言ったわけでもないのにそういう風に云うことは後ろめたさ

があるのかもしれない。

それにしても、あんな風に講師にやれと言われて素直に従う学生が大勢いるのもちょっと不気味だ。ぼくは余程帰ろうかとも惟つたが、よくまあペテンくさい話を聴く気になるよなあ。暴力はああいうところから生まれるのだろうか。人事コンサルタントなんて武器商人みたいな業界の人間の言葉を受け入れるほどの器用さはぼくには無い。

そもそも、今日は一応社会学部メインの日だったのだが、社会学を学んでいて何でああ素直に生きられるのか不思議だ。ぼくが偏屈なのを差し引いてもあの空気は異常だ。じゃあ隣の人と話そう。ガヤガヤ。はい止め。シーン。テレビの観覧客よりも従順だ。いちいち聞き手に何かしらの活動をさせるのはセミナーの常套手段だが、ことある事に挙手と会話を求めるのに対して有無を云わずに従い続けるなんてみんな懲役上がりなのかな。ああ、就活したくない。

サークルではひとまず読書会用の課題図書を選ぶ。案がほとんど出ないので、じゃあ芥川とかでいいのではということとなく目に留まった「浅草公園」に決定。前回企画した都市スケッチの参考になりそうなので丁度好いだろう。スケッチの参考になると惟つて前から決めていたとか嘯いてもいいけども。

それから今後は冊子を月刊誌にしてみたらどうかと話し合う。今年はどうにかなくても、来年からは急に人が増えたりしない限り、サークル自体の存続

が危ぶまれる。今のうちに活発な面を対外に宣伝しなくてはまずい。もう遅いんだけど。まあ、ぼくが悪いんですが。お慈悲を。

明日は中野の諸星大二郎原画展と銀座のカイヨワの石コレクシヨンの展示に出かける予定。

2015/05/23 (土)

十一時頃に起床。さっそく出かける準備をする。中野へは三十分ほどで往ける。お昼にコンビニで買ったパンを食べた。

道中でお金を下ろすために郵便局へ寄る。八万円。そのうちの六万円は家賃だ。なので予算は最大二万円だが、全部使ってしまうわけにはいかない。来週には注文していた高橋葉介の復刊本が届くのでその分は残しておかねばいけない。

中野へは埼京線で新宿に行き、そこから中央線に乗り換える。電車はそれほど混んでいなかった。車内にひどい猫背のゴスロリ服を着た女が立っていたのだが、土曜の昼下がりを見るにはちよつと不気味だった。言うまでもなく彼女も中野で降り雑踏のうねりに吞まれていった。諸星大二郎の原画会場は中野ブロードウェイの四階だ。そこまでは商店街を通って行く。通りを奥に進むにつれ老人やカップルの姿が減り、おたくというよりはマニアな人の姿だけになっていく。秋葉原の人波に較べればもう少し落ち着いた雰囲気がある気がした。実際は単に人の数が少いだけだろうが。

ブロードウェイに来るのは久しぶりだった。『デビルサマナー』を思い出す風景だ。四階に着くとしばらく会場を探して歩きまわった。階段があるのは反対側にそれはあった。白抜きで「リトルハイ」と書かれた黒地の看板が掲げられている。会場は人が十人も入れないような小さなものだった。来場者のほとんどは壮年のおじさんばかりだ。ひとりかふたり諸星ファンではなさそうな若い女性が立ち寄っていた。ぼくもおじさんに混じって数点の原画を観るが、狭いのでやはり落ち着いて観てられない。取り敢えずTシャツと先行販売されていた本『諸星大二郎 マッドメンの世界』を買って墓場の一画ほどのスペースの会場から出る。Tシャツが思っていたよりも高く躊躇してしまった。一枚四千円。まあグッズだからしょうがないか。他には手拭いとクリアファイル、関係書籍があった。たぶん池袋で以前開催された原画展の残り物だろう。あの時は、ぼくは講義の有る日だったが開始前から並んでいたっけなあ。

会場から出て同じ階にあった古本屋を覗く。『鈴木大拙全集』が一冊五百円で置いてあって欲しくなるが嵩張るし止めた。しかし、結局棚を眺めているうちに何冊かの本を手持って会計へ向かう。ウォルトン『釣魚大全』、『ハイデガー』、『ニーチェ』、『デリダ』、『言葉のつて』、『フロンクベルタ』、『秘密の博物誌』、『奇想天外』七八年七、八、十月号、それとサークルで話題に出ている金城一紀『対話篇』。カスターナダの著作も揃っていたりして、また来たく

なる。

中野駅に向かって歩き始めると、何層にも並んだアベックの障壁に歩みを遅らせられる。アベックの壁というのは意外に追い越せないもので、遅刻しそうな時間に大学に向かうと、白山駅を出た辺りで同じ学科のアベックが目の前をお手て繋いで歩いていて追い越そうにも追い越せず悶悶とした挙句に遅刻するということがしばしばある。

駅に着くとちょうど電車が到着したので急いで乗り込む。新宿駅の改札を出て紀伊國屋書店へ向かう。予想外に迷わずに辿り着けた。始めて行くので戦戦恐恐としていたのだが、改札さえ間違えなければどうということもなかった。

紀伊國屋書店には七階に劇場があつて、今度やららしい井上ひさし『戯作者銘々伝』の告知ポスターが掲示されていた。井上ひさしと言えば、大泉洋主演で『東慶寺花だより』を下敷きにした映画が公開されるそうだ。テレビでコマースヤルを見て、すごい時代になったもんだとひとり驚いた。

さて、紀伊國屋書店では平凡社ライブラリーの棚がどこにあるか判らず結局『日本残酷物語』は買わなかった。岩波文庫の品揃えだけは良かったが他の文庫はいまいち。ゲーテの『形態学論集・植物篇』を買いたかったが無かった。

柳宗悦『工藝文化』、『柳宗悦 茶道論集』、『柳宗悦随筆集』、『新潮』六月号、『文學界』六月号、『新潮』六月号を買う。店員の対応がとても丁寧で感じが良かった。三省堂とジュンク堂は忙しさの所

為かけっこうひどい。

店内をうろろろしている、自己啓発書のコーナーで立ち話をする人が多くて驚く。まず若いカップル。男の方が自慢気に「おれはこの本もつと早く読んでれば、人生変わったなあ」などと吹かす。また、老夫婦も同じ様な具合に「このポジティブってやつがよさそうだねえ」などと話していた。もうすぐ死ぬのに明るく前向きになってどうしようというのか。『存在と時間』でも読んでほしいのに。自分にとつて都合のいい本を探して読もうという姿勢がぼくは苦手だ。新しいものを探す方が愉しいのに、なんでわざわざ自分の経験を再確認するような読書をしたがるのか。それだけ自分が好きなのだろうけど。

結局この日は予算の七割近くを消費したことになる。今月も生活費が厳しそうだ。そう言えば、銀座行きは面倒なので止めにした。そっちの方の展示会は七月までやっているのでもいいけど。

帰って来て雑誌に目を通す。サークルで制作する冊子の参考にしようと思うが、なかなか難しい。『奇想天外』には漫画も載っていたりするので、もういっそ漫画解禁でいいから。それでも人は来ないだろうけど。読切、連載、評論、エッセイ、この辺りが基礎だろうが、ううん。まあ悩んでも解決はないし、今日も外国人の声に頭を痛めながら寝苦しい夜におやすみを云いましょう。

今日は風邪が悪化して喉と頭が痛いので一日中寝込んでいた。夕方になって布団から這い出、ご飯を用意する。買い物に行っていないので冷蔵庫には豆乳しか無い。寂しいが乾麺の蕎麦を茹でる。乾麺を手にするたびに父親に「乾麺」という言葉が通じずに困ったことを思い出す。素麺とか蕎麦とかの乾いたやつだよと云っても、そんなものは見たことないなどと云う。

さて、蕎麦を食べべ終えると風邪薬を飲むのだが、もうすでに服んだ気がしてならない。まあ服まないよりはいいかと思って、服しておく。

昨日買った『新潮45』を読む。普段はこの手の雑誌は買わないが、古本をテーマにした特集が組まれていたので買ったのだった。いくつかある記事はどれも郷愁を想い起したような内容だった。古書店としては有名な高原書店の話が目立った。一つ目の記事には「新たな古本ブーム！ 本読み史上最高の時代」などという煽りが入っている。「高原書店からブックオフへ、または「せどり」の変容」というのがその記事の題。筆者の思い出とともに古本屋の歴史を振り返るとい内容になっている。その中で気になったのが次の文。「最近、一部で流行っている、私の部屋へようこそ、このセンスある本棚を覗めてください系のオシャレ古本屋が私は苦手だ。入る気になれない」。ぼくも同感です。

それはそうと、いちばん興味深いのが「音羽館」

の店主広瀬洋一の寄稿だ。「音羽館」というと、ぼくは実際に行ったことはないのだが、名前は知っている。別に古本マニアではないし、書店を巡るのが趣味というでもないのだけれど、名前だけは知っている。勿体つけずに言えば、『草子ブックガイド』という漫画で舞台となっている古書店の名前がその音羽館から採られているからだ。漫画内では「青永遠屋」となっている。この漫画の話をしだすと長くなるし、読み返したくなってしまおうので余り書きたくないが、ちょっとだけ書いておく。

主人公の草子は芸術家志望で飲んだくれの父親と二人で暮らしている。草子は本が好きで、古書店「青永遠屋」から無断で本を拝借しては、その本に感想を書いた紙を挟んで返却することを繰り返している。或る日、店主に気付かれてしまうが、店主の老人はその感想文が気に入っている。そこから、主人公の生活が徐徐に好転していく、といった筋運び。

特にぼくが好きなのは父親と主人公の関係を焦点にした話なのだけど、それは書かずにおく。

それで、その広瀬洋一の記事にも先ほど引用したような文とつながることが書かれてある。「しかし、最近増えている古本屋はセレクトショップ的です。店主の個性とこだわりを売り場で表現してゆく形が主流になっています。もともと、私自身は最近まで試行錯誤を続けたあげく、強い個性を出そうとするのは無理だと諦めました。この棚を見てくれ！というお店もありますけれど、お客さんによっては

それが嫌味になる場合もありますし……。このように指摘される押しつけがましきは何も古書店に限った話ではないが、それはさて置いて、それではどうあるべきなのか。「私は、店の特色はお客さんが作ってくれるものだと思えるようになりました。店の個性は自然と醸し出すフレイバーぐらいのものでいいのではないでしょうか。ほら、西荻のあの店、名前何だっけ？ ぐらいの存在感でいいんです。」。

文学においては受容美学の立場がある。読者の受容性を観点にした批評の考え方だ。それと似たような話だ。と言うと大掴みに過ぎるが。ぼくの書く文章もそうありたいと念う。もつと言えば、ぼくもそうありたいと思う。「あいつ、名前何だっけ？」くらしいの存在感を得たい。そもそも大学に入る前にそんな風なことを考えていたが、今のところは着実に「あいつ、名前何だっけ？」の位地を占めている。この調子。

2015/05/25 (月)

今日はアルバイト。昼ごろに地震があった。ビルの上の方なので随分揺れた気がする。社内の携帯が一斉に緊急地震速報を報せるので心臓が悪い。

アルバイトが終わってから神保町に往く。三省堂の軒先に古書が陳列してあったので危うく買いそうになる。特に岩波文庫なんかは絶版モノだといつか読むかと惟って財布の紐を緩めてしまう。

気を引き締めてから店内に入る。いつも入る度に入口脇に陳列されている土偶が欲しくなる。しかし土偶なんて果たして何に使うのだろうかと思わずに自省する。

三省堂に脚を運ぶと大抵古書館を覗く。今日は何も買うまいと考えていたが、棚に並ぶ『西田幾多郎哲学論集』の三巻揃。値段は三千円。探せば他でもっと安いものが手に入るかもしれない。逡巡する。視線を逸らした先に『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』。以前見た時、値段は千円だった。一応確認する。二百円。これ一冊ならいいかと思う。じゃあついでに西田もと邪念が入る。気が付けばレジに向かう我が足。

本の入った袋を提げながら新刊書を開いて回る。結局この日買ったのは、『日本残酷物語Ⅰ』、『柳宗民の雑草ノオト』、『ゲーテ形態学論集・植物篇』、『ゲーテ形態学論集・動物篇』、『カルヴィーノ』、『アメリカ講義』、『オクタヴィオ・パス』、『弓と堅琴』、『そして漫画』、『ヒストリエ』九巻。『残酷物語』は結構売れ行きが良いようだった。

そう言えば、古本の棚にビートニク世代の作家を網羅した事典というのがあった。ちよつと欲しかったが千五百円だったので諦めた。レオ・レオーニ『平行植物』は二千円もした。

今日から読み始めた、『デリダ』『言葉にのって』から、「これまで私が何を書いたにせよ、一度たりとも私から離れたことがない夢があるとすれば、それは、日記の形式をとった何かを書くことなんです

よ。実のところ、書きたいという私の願望は、網羅的な年代記の願望です。……つまり、『完全な』日記です。」

ダントーの謂う理想的年代記者みたいなもので、もしくはボルヘスのバベルの図書館のようなものだろう。ぼくの頭は愚にもつかないので記録したいとは思わないが、デリダ程の才能があるとそんな風にも思うのかもしれない。確かにデリダの頭の一部始終を見ることが出来るのなら面白そうではある。小説は却って欠けている記録だから読者の立場があるのかもしれない。作者の権威や批評家の威圧、或いは偉そうに振舞う読者の越権行為から逃れることが出来る。江戸時代の縁切り寺は楯や帯など身につけたものを境内に投げ込めば逃走完了らしいが、読者は小説の中に何を投げ込めば逃げ切れるのだろうか。アジュールとしてのテクスト。これだけだと唯の寂しがり屋や妄想家の逃避地にしかならなさそうだ。それではやはり窮屈になる。無い頭で考えても仕方ない。イーノを聴いて床に入る。

2015/05/26 (火)

風邪が癒らない。大学で授業を受ける。いつも以上に講義が頭に入らない。

たまに見かけるのだが、机の上にタオルやら小物やらを並べて場所取りをしている人が居る。花見の場所取りみたいでなんだか見つともない気がするが本人たちは真なることをしていると思っっているのだろうか。そこまでしなくても誰も隣に座らないんじ

やないかと訝しく念うがどうでもいいか。

久しぶりに「シムシテイ 2013」をやるが直ぐに飽きる。予約までして買ったのにここまでクソゲーだとは思わなかった。でも、これのお陰で受験勉強をしなかった訳だから充分愉しんだと言える。「シムシテイ4」なんかはぶつ続けて二十時間以上やったことがある。その時は痛くて眼が閉じられずに悶絶した。

今日は体調が悪いのでここで終わり。

2015/05/27 (水)

今日はアルバイトの日。作業にOCRが導入される。ずいぶん作業効率が上がった気がする。

風邪の方は多少良くなったが咳が止まらない。ネット調べたらマイコプラズマに感染するとそんな症状が出るそうだ。昔インフルエンザをこじらせて肺炎になったことがあるので些か心配だが、以前も似たような症状になったことがあるので今回も耐えしのげば大丈夫だろう。

デリダの『言葉にのって』を読み進める。「したがって、政治的な領域においても、詩的ないしは哲学的な翻訳においてと同様に、創出すべき出来事は、翻訳の出来事です」。ぼく個人の意見だが、哲学の勉強なんてすべて言葉の問題でしかないと感じる。

エドモン・ジャバスの『私は私の住まいを建てる』というのを読んでみたいが邦訳されていないら

しい。取り敢えずジャベスの著作は今度チェックしてみる。

2015/05/28 (木)

大学。今日の演習は色色と凄かった。自己紹介をするときに妙に格好つけたがる人が衆い。知ったかぶりが甚だしい人がいた。見つともない。そして、三限の演習では発表担当の学生が何故かギターの弾き語りを始めました。テーマは「バクリ」がどうのこうのだったが、テーマそっちの自分で自分が気持ち良くなることに終始していた。一応哲学演習なんです。そのリサイクルにも授業料というのが掛かっていることになるんですが、ちよつと呆れる。

四限も凄かった。自分語りのしたい人が二人も居て収集が着かなくなっていた。肝の座った人が少なくないようだ。呆れ返るのひっくり蛙。

デリダ『言葉にのって』読了。代わってカルヴィーノ『アメリカ講義』を読み始める。基はノートン詩学講義とかいうハーバードの講義枠で行われたものだそう。この枠は、エリオット、フライ、ボルヘス、オクタビオ・パスなんかが講義を受け持ったそうだ。すごい顔ぶれ。日本だとかこういう企画はどういうのがあるだろう。ブローティガンも大学での講義を行ったことがあるのだし、日本ももつと作家に講義をやらせてはどうだろう。滝本竜彦は専門学校講師をやっているとネットで見したがどうなんだろう。

それはさておき、カルヴィーノの著作はけっこう文庫化されているがほとんどが絶版だ。日本人作家でも直ぐに絶版になるが、海外作家モノは容赦無い。取り敢えず、河出文庫のは『不在の騎士』以外は有っているので、岩波文庫のものを揃えようかな。

いま午前三時近いが確実に明日寝坊する。最近たださえ寝不足なのに。機械で睡眠を管理できたら楽なのに。あと眠気を銀行に預けたい。発明が待たれる。

2015/05/29 (金)

大学。退屈。寝坊は勿論した。始業寸前に教室に入れたからセーフ。

それはさておき、今日のサークルは読書会を予定していたが、人が居ない。皆ぼくに内緒で焼き肉に行つたのだろうか、なんて考えながら誰も居ない教室で待ちぼうけ。やつとぼくを含めて三人集まる。文字通り話にならないので困る。腹立ちまぎれに他所のサークルの展示の感想用ノートに落書きしてきた。

サークル開始前に学科、とは言ってもコース制とかいうよく判らない制度の集まり。卒論指導という題目だが、来たのは五人だけ。最近の若者は集会が嫌いなのか。山内志朗と戸田山和久の著作を推薦していた。数日前に山内志朗のツイッターアカウントで国立大学の文系学部再編を知った。ニュースで取

り上げられたのは昨日だったか。私立大学も他人事ではないだろう。文学部は人気が無いから減らすとかいうことだが、確かに人気は無いだろう。特に本来国立大に進むべき貧困層には。しかし貧乏人は国立大にはそれ程行っていないのではないか。それに貧乏人ほど文学を学ぶべきと惟うが、これは貧しい人間の嫉みでしかないか。

うちのサークルもお陰様で廃部寸前だ。国際主義より教養主義の方がマシかもしれない。

さて、カルヴィーノ『アメリカ講義』を中程まで読み進める。色色と面白い話が出る。特に惹かれたのは、イタリア語で元元は「彷徨」を表し、曖昧であることを意味する「Vago」という語が一方で「優雅」とか「魅惑」を意味するということだ。移ろうこと、虚ろであることが美へ、美しさと通じる。色が褪せることが美しさを際立たせる。ヴァレリーの謂う美的無限もこの系列かもしれない。虚空が美を誘発する。感性は曖昧さの裡に彷徨し美を求める。美妙というのがまさにその言葉通りの意味によつてこれら的事象を象徴している。幽玄の美とはこのことではないか。しかし急いではいけない。「ゆっくりに急げ Festina lente」の命に従ってみる。ガリレオの謂うように「論じるのは走ることに似ている」*discorrere come il correre*」のかもしれないし。

2015/05/30 (土)

今日は暑い。ちよつと外に出ただけで陽射しにや

られて頭が痛くなった。

アパートの家賃を支払ってから、近所の古本屋に往った。始めて入る店だったので恐る恐る店に近づくと、入り口には均一本。ほとんどが日焼けた漫画と新書。忍び足で店内に入ると、入り口の左側にレジがあり店主が坐っている。蓬髪を後ろで束ねており、高齢と思われるが他方で年齢不詳な感じがする。顔はあの千石先生に似ている。しかし、千石先生のような穏やかさは一切なく、打って変わって陰しい顔つき、厳しい目つき。視線だけで人を殺せそう。ぼくが店に入るとすかさずその殺人光線を浴びせてくる。今にも出て行けとばかり。おっかなびっくりしつつも本を物色する。何となく携帯を取り出し、ツイッターを開こうとするやいなや、「携帯はやめてくれるかなあ」と怒声。ほんとは感嘆符が四つくらい附くだろう。これは確かにせどり屋と思われるようなマナー違反だ。反省しつつ好きそうなお本を手にとってパラパラとページを覗く。「弄くり回さないでくれるかなあ」と、また怒声。慌てて本を棚に戻す。取り敢えず買いたい本だけとは怯えつつも本を手取る。店主は「いいかげんにして」と更に声を荒らげ睨みつけてくる。大急ぎで本を持ってレジに向かう。ぶっきらぼうに「一九〇〇円」と吐き捨てる店主。レジの奥にはブラウン管。画面には店内の様子が映し出されている。防犯カメラが設置してあるのだろう。余程の客嫌いなのだ。むしろ、客に本を買われるのは歓迎しないのかもしれない。一体全体何の店なのか。肝を潰して店外に飛び

出す。午後の陽を浴びてようやく人心地着く。吸血鬼の魔手から逃れた気分だ。しかし、お陰でアイリス・マードックの『網のなか』を買うことが出来た。他に河本英夫先生の『システムの思想』を購入。慌てて飛び出したせいで廣松渉の『もの・こと・ことば』を買いきびれた。しかしもう二度とあの店には行きたくない。誰が行くもんか。

帰宅後、インターネットで店名を検索してみる。出てきた出てきた。「入るだけで怒鳴られる店」。数十年前からずっとそうらしい。どうやって経営しているのだろう。ネット書店に出品しているようでもないし。お得意さんがいるのだろうか。ちなみに店の品揃えはなかなか良かった。でももう行かない。今度だれかに古本屋教えてよとか訊かれたら真っ先におすすめてやろう。

今日は本屋とは怖いおじさんが居るところだという童心に還れたので可しとしよう。ぼくの抱いていた本屋の恐怖をまさに再び現前させてくれた店だ。いや、それ以上の狂乱を秘めていた。ありがとうS書店。さらばS書店。板橋にあるS本書店。どうもありがとう。店主の坂本猛さんよ、永遠に。

2015/05/31 (日)

今日は風邪が悪化して寝込んでいた。咳がひどくて眠られぬ。

出かけようと思っていたが取りやめて一日中布団のなか。ようやく眠りについて目が醒めると夕方。

今日はやけに上階の住人も屋外の外人も騒がしい。カルヴィーノ『アメリカ講義』を読み終える。

何ページにもわたって砂つぶのようにびっしりと並ぶこれらの記号が、まるで砂漠の風に吹かれて動いてやまない砂丘のように、表面はいつも同じでも違っている、世界の多彩な光景を表しているのです。

カルロ・エミリオ・ガッダという作家が紹介されていた。かなり面白そうなのだが文庫化はされておらず、単行本も絶版のようだ。それから、『煙滅』でお馴染みのジョルジュ・ペレックも取り上げられていた。筒井康隆も『煙滅』をどこかで紹介していたはずで、その時にぜひとも買わなくてはと思ったのだが、遂に買わずにいたのをようやく思い出した。

それはそうと、2015/05/25の記事の『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』を買ったことを書いたが、何かわだかまりがあるなど思っただけで積んであった本を片付けていたら全く同じ『短篇集』が出てきた。やはりもう既に持っていた。つまり、一〇〇〇円で売られていたのは別の作品で、勘違いだったわけだ。しかも手許に既にあつたのは訳者謹呈札が挟まっている初版のものである。ただしカバーが欠けているので、カバーを買ったと思うことにする。

最近物忘れが本当にひどい。図書館から借りた本を返却手続きせずに直接棚に本を戻してしまっ

ただいま延滞中となっている。しかし、本は図書館の棚の中だ。明日にも返却済みの本を返却しに行かなくてはいけない。

2015/06/01 (月)

アルバイト。終わり次第神保町へ。三省堂。

まずは四階の古書館に。何となく普段見慣れた棚も検めて見る。すると、アイリス・マードック『愛の軌跡』が。何という僥倖。これ幸いと手にとつて、別の棚へ移り目を着けていたカルヴィーノ『不在の騎士』を掴む。すぐ側にあったマルケス『誘拐』も買う。以上の三点を購って古書館を出る。

そもそも三省堂に来たのは漫画を買いにだ。というわけで児童図書と漫画の置かれた六階へ上がる。そう言えば、と岩波少年文庫を見に行く。カルヴィーノの『マルコヴァルドさんの四季』と『みどりの小鳥』を発見。手に取る。この時点で財布の中味が危ういことを考えないようになる。目当ての漫画を無事に手に入れ、二階の文芸書と文庫のコーナーを見て回る。ここでもそう言えばと思つてカルヴィーノを探す。ついでに最近文庫化したボルヘスの『幻獣辞典』も求める。

結局、この他に、『それ町』一四巻、カルヴィーノ『レ・コスミコミケ』、『パロマー』、『イタリア民話集(上)(下)』、それからボルヘス『詩という仕事について』を加える。

もうここまで来たら、岩波文庫のカルヴィーノの

三番目の作品『むずかしい愛』も買うしかない。しかし絶版になっている。

こんな時のための岩波ブックセンターだと発案。三省堂を飛び出す。ブックセンターなら絶版本を置いてあるというわけではないが、一冊くらい売れ残つてそうだと考えたのだ。

ブックセンターまで来ると早速岩波文庫の棚を閲する。あつた。『むずかしい愛』。ついでにヘンリー・ジェイムズの『ワシントン・スクエア』もあつた。それからちくま文庫の『井上ひさし対談集』も買った。もう両手に花とか本というか。お陰で電気代を支払えないぞ。

三田線に乗って帰路に着く。が、その前に大学の図書館へ寄ることに。例の返却された未返却本を返却しに往くのだ。熱帯夜の中、汗をかきつつ坂を上り墓場みたいなキャンパスへ辿り着く。図書館の扉を颯爽と開け、入り口の自動改札のような機械の前に躍り出る。学生証を出そうと冷え込んだ財布を取り出す。無い。学生証が無い。何という愚行。己を憾んで叫びたくなるが、落ち着いて考える。ここまで来たら恥を忍んで司書の方に頼もう。というわけで、カウンターに居た司書の人にかにも阿呆っぽい感じで話しかける。すみませくん。うっかり借りた本を手続きしないでえ、直接書架に戻しちゃつてえ、延滞してるんですけどお。ああ、じゃあ学籍番号とお名前教えてください、こちらで手続きしてくんで。と、返す刀の鋭利さが羞恥心を抉る。通りかかった年配の司書の方が笑いながらぼくを見てい

る。ああ、恥ずかしい。筒井康隆の短編なら失禁か嘔吐でもしている場面だ。或いは、『ムーミン』のスニフであれば「ゲロがでちゃうよ」と叫ぶか腹痛を訴えて甘える状況。さっきまでとは別種の汗が背中を濡らす。文字通りのカウンターを体感した。帰り路、我ながらかなりのドジっ娘ではなからうかと惟う。男だけでも。これが女の子なら可愛らしいで済むが就活前線へ半歩ほど足を踏み込みつつあるおっさんもどきがやらかしているのだから、かなり厳しい。だいたいオクタビオ・パスの詩集をうっかり延滞する女子つて何だよ。居るのかよ。居るなら会いたいわ。絶対可愛いだろ。

そんな風に考えながら、晩御飯には素麺を茹でました。

2015/06/02 (火)

大学。二限はどうか体調不良でありたいとの願望からサボタージュ。眠かつただけだが。

おれは二限を休んだ体調不良だぞ。不良だからな。そう自分に言い聞かせながら午後から学校へ。昨日買った『それ町』を読みながら座っていると、耳からは現象学の話が流れこんでくる。作者の他の漫画でもあつたことだが、最近タイトルに「夢幻」つて付けた『夢幻紳士』のパロディをしたり、高橋葉介フオロワー感が出ている。何故そんなことが気になるのかと言えば、ずいぶん前にツイッターで作者のツイートに非公式リツイートというのをし

て、お返事を頂戴したことがあるのだが、その時に
ぼくのアカウソウの画像を夢幻紳士にしていたので
ある。それでお返事の内容が「趣味が合いそう」と
かそんなのだったので、ちょっと嬉しく思ったのだ
った。その後立て続けに『夢幻紳士』ネタが垣間
見えるので、あの時にインスピレーションが与えら
れたのかしらとか勘繰ってしまうのである。ほぼ確
実に関係ないのだが。でもファンだからつい妄想に
浸ってみたいのです。

四限は突如休講になったので図書館に行く。

ENGLISH JOURNAL を読み、高校の時お世話に
なった先生がテレビ番組に出演なさっていることを
知る。その雑誌にコラムの連載をしているのだ。つ
い前はラジオとか新聞でも活躍していた。我なが
らけっこう凄人に教わったものだ。

今日は自慢が多いな。ついでにもう一つ、この間
注文した高橋葉介の復刊本がいつまで経っても届か
ないと思ってメールを確認したら、なんとサイン本
が当選していた。それでしばらく時間が掛かると
か。高橋葉介のサインが抽選で当たるのは二回目
だ。それもこれも高橋葉介がサイン好きなおかけ
だ。難有也。

ゲーテの『形態学論集・植物篇』を少しだけ読
む。眠い頭には全く入ってこない。

2015/06/03 (水)

アルバイト。寝坊寸前。雨降りの朝は意識が遠の

く。

メールをチェックすると、遂に高橋葉介のサイン
本が発送されたとの報せ。明日には届くと思われ
る。ところで、何となく作家の名前を挙げるとき
に、ぼくは日本人作家の場合はフルネームで書くこ
とにしている。例えば、高橋と書くとは不躰に過ぎる
し、そもそもどの高橋か判らない。高橋幸宏かもし
れないし、高橋健一かもしれないし、はたまた高橋
源一郎かもしれない。しかし、かと言って高橋先生
というのは何か違う気がする。筒井康隆は先生と呼
ばれるのが嫌いらしいが、ぼくも先生というのは苦
手なのでそう呼ぶのはためらわれる。そこで、フル
ネームで記すことにしている。これなら敢えて言い
切ることで敬称を表しているのだと認められるから
だ、たぶん。或る本でそんなことが書いてあったよ
うに思う。記憶違いかもしれないが。

アルバイトを終えて、傘立てに挿してあった傘を
探す。どうもぼくの傘が無い。どうやら出入りの
業者の方が誰かが間違えたようで、似たようなデザ
インの傘が挿されてあった。仕方ないのでそれを持
って帰る。いつもと握りの部分が違うので妙な感じ
だ。傘が無いというと井上陽水だ。何かこれを書い
ていると同じ様な話題が頻りに出てくる気がする
な。それだけ見識が狭いのだ。無理矢理にでも文章
を書くことで自らを戒め、傷を付け、痕跡を遺して
いく、そういう修身の仕方もあろう。

未だに咳が出る。もはや医者に掛かる金もないの
で自然に療るのを待つ。この歳になってから自分の

身体の弱さを切に感じるようになった。でも、別に
そんなに弱くはない気もする。

暇なので某掲示板を散策した。最近、身体欠損を
自らに強いる人の記事を見かけるようになった。流
行ってるのだろうか。そういう身体芸術だと言っ
ているが。世の中物騒だ。

2015/06/04 (木)

大学。二限はドイツ語のテキストを翻訳する演
習。演習 Seminar という語はラテン語まで遡れ
ば、種を蒔くことという意味だ。また、接ぎ木する
ことであり、子であり、結果であり原因である。結
果であるということは所産であり、成果であること
だ。また、原因であるということは話題であって、
主張であり目標であり、理想であり、福祉であって
関心事である。そして何よりも根拠である。根拠は
文字通り大地である。種を蒔くということは、子孫
であり先祖でもある。すなわち教師と学生が共に参
加する一つの場を表している。その場にこそ原因と
結果とが同居する。或る種の矛盾がある。種を蒔く
ことと同時に種が蒔かれることだ。演習というのは
教育であるのだから、また文化の養成であり、教養
との接触である。そしてそのような場への忌避はエ
ディプス・コンプレックスに他ならない。或いは男
性性からの逃避である。すなわちサボターージュとい
うのは果てしなくゲイであるのだ。冗談ですよ。

三限と四限はそれぞれ余り話を聞いていなかっ

た。

そんなことより、遂に『高橋葉介マジカルツアー』が届いた。サインイラストはミルクちゃん。数日前にネットで高橋葉介と吾妻ひでおの対談記事を見た。二人ともまだまだ現役だなあ。高橋葉介はジブリファンだが、宮崎駿は諸星大二郎ファンだ。諸星大二郎と高橋葉介は交流がある。マニアはこーいう三角関係で盛り上がるのだろうか。登場人物全員初老のおじさんである。女子大の漫研とかなら話題になりそう。若い人はそもそも高橋葉介と諸星大二郎って知ってるのだろうか。ところで「マジカル・ミステリー・ツアー」ではなく「マジカルツアー」なのは敢えてなのか。ミステリ風でもあるのに。別にどっちでもいいか。

内容としては半分以上既刊の単行本なり文庫本なりで読めるものだ。「カリオストロの城雑感」はいかにも同人誌っぽい雰囲気面白い。あと、クラリスのイラストが可愛い。それから「シャーロックホームズの日常的冒険」という田中圭一のようなパロディ。宮崎駿にインタビューに行った際の出来事が元ネタだそう。サイン用のイラストが思うように描けずにサインを破き棄てる巨匠。いかにもだ。寝る前に久し振りに地元の友人と話したが毎度毎度同じ様な尾籠な話題と絶望合戦で進歩がない。お互いに歓待を切望する。

2015/06/05 (金)

今日は、というか昨日の夜、寝る前くらいから熱が出てきた。朝、目が醒めると身体が重い。というわけで、大学には始業数分前によく到着。しかし、先生はそれ以上に遅れてくる。

サークルは休むことにして三限が終わってから帰宅する。アパートの近くに設置されている避妊護膜自動販売機、いわゆる家族計画に貼紙がされていた。「盗人よ、いつまでも悪事が隠し通せると思うなよ！ 返せ泥棒！ 日本から出て行け」。何のことでか要領を得ない。泥棒との暗号のやりとりだろうか。何が盗まれたのかくらい書いといて欲しいものだ。それにしても、せっかく明るい家族計画を立案した人が自動販売機を利用できないのは可哀相だ。使ってる人見たことないが。実を云うと、この貼紙は何ヶ月か前も見たことがある。もうこんな物騒な処から出て行きたい。

2015/06/06 (土)

この日は、帰宅後ずっと横になっていた。ちよつとだけゲーテ『植物篇』を読み進める。

相も変わらず午後に起床。雨の音が響いている。暇なのでパソコンでニュースサイトを巡回する。「きんもザ」の主人公大宮忍の誕生日だそうである。友人に吹き込んだら早速そのことをツイートしていた。

ツイッターを眺めていると、何やら怪しげなりッ

イトが大量にタイムライン上に流れてきた。よく見るといずれも「永井均さんがツイートしました」とある。永井均は哲学者だ。ヴィトゲンシュタインの研究をしていたり、最近『文學界』で時間論やら存在論を主題に連載をしている。しかもちょっと独我論じみた論旨だったりする。そんな人間がスパムを連携認証した挙句、怪しげなツイートを拡散する源になっているのだ。直前には歴史だの科学だの学者らしいことを勇ましく呟いている。それだから、どんな可笑しさが込み上げてくる。この後、永井均の立場はどう変わるのだろうか。

実家から荷物を送ったとの連絡が入る。時間を正午に指定したとのこと。明日は午前中から出かけようと思っていたのだが仕方なく予定変更。

ゲーテ『植物篇』読了。後半は前半と内容が重複しているので読み進むのが面倒だった。次は『動物篇』を読まなくてはいけない。そもそも『色彩論』を最初に読むべきだったかもしれない。

2015/06/07 (日)

チャイムの音で慌てて飛び起きる。宅配便。中身はお米。

身支度してから外出。埼京線に乗って新宿へ。新宿駅に着き迷子になる。小田急線の乗り換え経路を間違えてしまったのだった。ようやく小田急線のホームに着くとちょうど電車が待機している。慌てて飛び乗ったら何故か人が少ない。よく見ると床に吐

瀉物が。げえつ。

いそいそと別の車輛に移る。目指すは生田駅。六月にサークルで出す冊子の企画の取材というか何と
いうか気晴らしも兼ねての散策。そもそも実はその
企画の締切は今日七日なのである。立案者本人がこ
れじゃ駄目だなあ。自分で計画立てといてこれはマ
ズいですよ。

取り敢えずちよつと散歩して直ぐに帰宅。寝不足
の所為か頭痛がひどい。大丈夫かなあ、色色と。

それにこのエッセイも今日が締切なのだけど、丁
度好い着地点が見当たらないぞ。どうする。もうい
つそサークルを退部するか。いや冗句冗句。そう言
えば、山下達郎が最近は冗談が通じないから困ると
か言ってたなあ。その通りだと思えます。

こうなりや無理やりまとめよう。

ゲーテの参加していた集まりについて、かれはこ
う言っている。

そこでは、美的趣味と学識、知識と詩作が社交的に
作用しようと努め、真剣かつ徹底的な研究と喜ばし
い素早いが活動がたえず競い合っていた。

素晴らしい。わたしたちもそういうサークルを目
指したいですな。以上。雑つ。

うーん、駄目だなあ。ひとまず、まだまだ続けば
いいですね。

書評

やつと小説を読みました。好きな漫画で台詞が引用されていたので。やっぱり新潮文庫が好きです。

『この部屋で君と』

朝井リョウ 飛鳥井千砂 越谷オサム 坂木司 徳永圭 似鳥鶏 三上延吉川とりこ著

新潮文庫 nex 二〇一四年九月

初めましての皆さんしか居ないと思えますが初めまして。八名井と申します。下の名前は適当に明なんてつけていますが、読み方なんてどうでもいいのでとりあえず読書日記をつけます。

アンソロジーものです。表紙の男女二人のようなものではなく癖の強い話が多いです。こうやってアンソロジーを読むと作家の長所とかが顕著で面白いです。

『ここからはじまる倫理』

アンソニー・ウエストン著 野矢茂樹 高村夏輝 法野谷俊哉訳

春秋社 二〇一四年六月

倫理のレポートなんて書ける訳が無いと文句を言いながらの一冊。見事に助けられました。勿論図書館で借られます。

新潮文庫 二〇一三年九月

有川浩著

こうやってばか騒ぎをしている人々はどうしてこんなにも愛おしいのでしょうか。学校爆発させてみたいですね。いつか爆発しそうですけれど。

『子供をゲーム依存から救うための本』

オリヴィア&カート・ブルーナー著 木村博江訳

文藝春秋 二〇〇七年六月

DDR がパーティーゲームとされていてめちゃくちゃ笑ったんですけど間違っているのは自分だと気付きました。図書館で借られます。

東洋経済新報社 二〇〇三年五月

西野泰広編著

社会心理学科の方は一度読むといいと思います。各方面のことがおおまかです。がわかるので。そう考えると一年生向けなのかもしれませんね。図書館で借られます。

『女装と男装』の文化史』

佐伯順子著

講談社 二〇〇九年十月

【DDR】Dance Dance Revolution (ダンスダンスレボリューション)。コナミ(現・コナミデジタルエンタテインメント)のアーケードの音楽ゲーム。上から降ってくる矢印をノリノリの音楽に合わせて足元の矢印パネルを踏んで楽しむ。とても疲れる。

『星の王子さま』

アントワヌ・ド・サンテグジュペリ著

新潮文庫 二〇〇六年三月

ふと気が付くと女装、男装を取り扱った作品が多いことに気付かされます。気にしなくてもたくさんあるものですね。題材にしてみました。図書館で借られます。

『汚れちまった悲しみに……』

中原中也著

童話屋 二〇一四年一月

無駄に高くてキレそうになりながら買いました。無駄に高いので丈夫です。ど
つかの文庫と違ってめっちゃ表紙頑丈です。どつかの文庫と違って。

——以上、八作品です。他にもまだあるのですがこの八冊を抜粋させていただ
きました。理由は単純で、きちんとメモがしてあったからです。参考にはならな
いと思いますが、皆さん良い読書ライフを。

インテリぶる推理少女とハマたいせんせい

-In terrible silly show, jawed at hermitlike SENSEI-

著・米倉あきひろ H J 文庫 二〇一三年三月刊

サナギトウカ

『せんせいは何故女子中学生にちんちんをぶちこみ続けるのか?』なる珍妙極まるタイトルで投稿され二〇一一年 H J 文庫大賞の奨励賞を受賞、改題を経て二〇一三年三月に刊行された本作、通称「インハマ」は、強姦魔である「せんせい」と女子中学生である「比良坂れい」の頭脳戦と恋愛模様を描くメタミステリ小説。……こう紹介した時点で既にいろいろと頭おかしいのだが、おおむね事実なのが始末に終えない。

この小説の見どころは主に二点、あくまでライトな文体でありながら語られている内容が下衆の極みであるというギャップと、叙述さえ成立すれば事実そつちのけで過去がねじ曲げられてしまう荒唐無稽さである。これだけだとなんのことを言っているのかわからないと思うだろうから以下、詳しく解説していく。

物語はある離島の学校に赴任したせんせいにまつわる『わるいうわさ』について、比良坂さんが本人を直接追求する、というシーンから始まる。その『うわさ』曰く、なんと彼は顧問を務める文芸部の女子中学生を十五人も強姦したというのだ。そしてヒロインにして文芸部最後の十六人目である比良坂さんは問いかけることには、『せんせいはわたしを襲ったりなんてしませんよね』――。あたかも名探偵が犯人を言い当てるシーンのごとき緊迫感(なんか冒頭の紹介でネタバレしてるが)果たしてその真相とは……! などと、まあ煽るまでもなく事実である。というか開始六ページで主人公が自白する。しかも一人称の地の文で。せんせいって、本当に最低の屑ね!

あらかじめお断りしておくが、強姦は犯罪。実刑となつた場合、刑法一七七条により三年以上二十年以下の懲役に処せらる。するな。

まあ、これだけだと本作はただの信用できない語り手兼犯人によるミステリなのだが、もちろんそれだけには留まらない。というのも、この小説がミステリで

はなくメタミステリたる所以は、ヒロインたる比良坂さんにあるからだ。個人的には、せんせいの邪悪さもさることながら、比良坂さんも同レベルの危うさを秘めているのではないかと思っている次第。伝われ、このやばさ。

さて前述のとおり、せんせいは文芸部の女子生徒を立て続けに強姦しまくつたわけだが、それは巧妙なアリバイトリックや弱みを握って沈黙を強要するなどという策略を用いるものではない。というか計画性もたれらいいも一切なく、初犯(赴任してから、という意味)で比良坂さんに目撃される。やばいと思つたが性欲が抑えられなかったとも言つても言うつもりだろうか?

ここで、「比良坂さん、現行犯を目撃したんなら『うわさ』の真偽とかわざわざ確かめる必要ないじゃん!」と思つた方、疑問はごもつとも。しかしながら、比良坂さんが本領を発揮するのはまさにここから、彼女のせんせいへの(よりにもよつて!)と、こじらせにこじらせたミステリ脳は事態を急速に混沌へと導いてゆくのである。

まず前提として、彼女はこの世のすべてが理屈通りに動いていると信じて疑わない。それは裏返せばこの世のすべてに理屈が存在すると信じていることでもあり、この比良坂さん、せんせいが強姦などするはずがないという恐るべき誤解にもとづいて「じつは強姦ではなかった」「合意の上での強姦だった」など理路をこじつけ、事実そつちのけのでたらめなストーリーを付度してしまうのだ。あまつさえ周囲の人々もとある理由からそのストーリーを認めてしまうため、『うわさ』が立とうが目撃されようがせんせいは一向に断罪されることがありません。やんぬるかな、その強姦は空耳どころか空目ですらないにもかかわらず。

こういうわけで、なんでもかんでもストーリーを見つければ気が済まないインテリぶつた推理、なんだかんだとそれを事実 на格上げしてしまう場の雰囲気織りなす混沌とした状況が、メタミステリとしての本作の特徴である。つまり、この作品においては事態の解明と解決が別のものとして扱われている。探偵役の推理が当事者の承認を経て事実として扱われるというお約束のパロディになるわけだ。一般的に、ミステリでは探偵が指差せば事態は秩序づけられてゆくものだが、本作の場合はまったく逆の作用が生み出されるのは皮肉と言うしかない。

したがって、比良坂さんが展開するこの詐欺的な叙述が猛威を振るい出す頃には、読者の目はぐるぐるしてくること請け合い。まさにそれこそがこの作品の醍醐味であり、文体と内容、事実と叙述、二重の食い違いが物語をめくるめくものとするのである(めまいのな意味で)。「HJ文庫大賞始まって以来最大の問題作」と言われたものの、それと同時に『単純な面白さなら間違いなくトップクラス』とも評されたのはけっして伊達ではないのだった。ところで、この解説がじつは作中の前半部分までにしか言及していないというのも驚くべき点。

ほかにも実在のミステリ作品に言及してかけあいが繰り広げられるなど、メタミステリの名に恥じぬ暴れっぷりを見せるが、どこかで聞いたようなタイトルやトリックが、あたかもそれを台無しにするかのように冒流的な引用を施されるその背徳感がたまらない。そういえば、副題である英文も森博嗣氏の某有名シリーズを彷彿とさせる韻を踏んでいますし、もうやりたい放題だなこれ。これも本作の特徴の一つ。

このやりたい放題さはミステリにおいてもっとも重要な謎の提示にも及んでいる。じつは比良坂さんには亡くなった姉がいて、その死に関してせんせい因縁を持つているらしいということが序盤に明らかになるのだが、それですらふわっとした推理でほのめかされたり付度されるばかりで、事実関係は闇の中。そもそも、陰鬱な舞台背景とは裏腹に描写は明らかに軽快なものだし、口絵なんか見ると野球やらバスケットやらやってるあたり、お前ら本当にやる気あるのか。とはいえ、この作品におけるミステリ性とは、真相や解決ではなく推理そのものなので、さもありません。

しかし、それもまた一興というもの。小説なんて楽しんだ者勝ちであるし、信用できない語り手の叙述をどのように受け取るかはそれを受け取る側の恣意に委ねられるのだから。それを踏まえて、あらゆる理路から黒を白と言いくるめる比良坂さんの手口を駆使すれば、単純にメタミステリとしても、唾棄すべき強姦魔と無垢な女子中学生の悲恋を描くラブロマンスとしても、叙述を駆使して過去を遡及的に改竄しようとする現代異能バトルとしても、恋愛小説脳をこじらせた比良坂さんがせんせい宛てのラブレター代わりに執筆した作中作としても、あるいは

はこの作品の解釈が可能である——ほかならぬ、メタ叙述を挿入することによって！

そんなわけねーだろ。

ところで、こういう真相軽視かつ推理重視のミステリというのは円居挽のルヴオワール四部作などほかにもあり、こちらを探してみるとまた面白いかもだ。文庫版『烏丸ルヴオワール』に収録されている法月綸太郎氏の解説では、まさにそのようなミステリについて語られており、なんと『インハメ』にも言及しているぞ！

東洋大学文藝サークル“綴”刊行物のお
知らせ

『新白山文学』創刊号

『新白山文学』vol.2-3 合併号

『新白山文学』別冊ブックガイド

2015年7月

次号 vol.4 は9月1日発行を予定しております。

過去発行分の冊子はサークルホームページにて公開し
ております。

著者紹介

サナギトウカ 学生。文学部哲学科三年。東洋大学で一番素晴らしいサークルと言われているFSMにも所属するヘヴィラノベリーダー。眼鏡。

星井靄（ほしい・あい） 学生。文学部哲学三年。批評会で毎回同じ内容の指摘を受けるも一向に作風に変化がないことで知られる。もはや痴呆では。裸眼。

草津出（くさつ・いづる） 学生。文学部日本文学文化学科二年。創作意欲の昭和新山の異名を誇る大人物。今年の夏は免許合宿だそうです。眼鏡。

八名井明（やない・あきら） 学生。社会学部社会心理学科二年。茶道も嗜む文藝サークル界の忍刀。いつかは裏千家ならぬ裏綴に分家するかも。裸眼

はるゆかり 学生。文学部日本文学文化学科二年。この春入ったばかりだけど溢れるフレッシュユネスで文章を綴る。半裸眼。

つづりちゃん マスコット。a i o君との悲恋が「大蒜心中」として小説化された。がしかし、まだイラストが決定していないので、どのような姿か未知。

編集後記

この度、どうにか創刊号に引き続き第二巻にあたる合併号の発刊を致しました。そして、書道研究会の皆様のご好意で展示スペースを半分貸して頂き、推薦図書と発行冊子の展示を行えることになりました。今年の文藝サークルは一味違うぞ、というところをアピール出来ればと思っております。新規会員も随時受け付けておりますので、どうぞお気軽にお声掛け下さい。

それにしても、今年はサークルガイドにもキチンと名前が載っているはずなのにどうしてこんな人が来ないのでしょ。私が悪いのでしょうか。それとも最近の若い方は小説とか興味ないのかしら。読みはするけど別に書きたくはないっていう感じなのかもしれないですが、書いてみることで読み方も変わってくると思います。この機に筆を持って家に閉じこもろう！

それはそうと、今号の内容はいかがでしょうか。私は草津氏の「闇ゆく街」が傑出していると思います。構成が素晴らしいですね。

今号はただ時間の制約で創刊号に比べ盛り沢山とは言いがたいかもしれませんが粒ぞろいですから、味わい深さは保障します。

最後に一言、期待は絶望の母である。

（文責・星井靄）

新白山文学 vol. 2-3 合併号

編集人 渡邊和教
発行人 湯畑慶介
発行所 文藝サークル“綴”
印刷所 東洋大学

<http://ttuduri.web.fc2.com/>
<http://ttuduri.blog.fc2.com/>
https://twitter.com/toyo_tuduri

ハッシュタグ #新白山文学 にて感想等お待ちしております。

2015年7月1日初版第1刷発行

bungei_ajo@hotmail.co.jp

不許無断転載